

Bulletin of Yokohama  
Museum of Art No.16

ISSN 1881-6770

横浜美術館

研究紀要

第 16 号

---

# Bulletin of Yokohama Museum of Art No.16

横浜美術館 研究紀要 第16号

Bulletin of Yokohama Museum of Art No.16 2015

---



---

---

# 目次

---

## 石渡庄一郎（江逸）研究：新収蔵作品資料を中心に

片多 祐子 | 5

## A Study of ISHIWATA Shoichiro (Koitsu): Focusing on Newly Acquired Works and Documentation

KATADA Yuko | 57

---

## 横浜美術館美術情報センターにおける資料展示について

興津美由紀、谷口和歌子 | 18

## Book Exhibitions at the Art Library (Art Information and Media Center) of the Yokohama Museum of Art

OKITSU Miyuki, TANIGUCHI Wakako | 58

---

## 【資料紹介】 下村観山画房日記『やまの上』

柏木 智雄 | 87

## Introducing Documents: *Yama no ue* (On a Hill), Studio Diary of SHIMOMURA Kanzan

KASHIWAGI Tomoh | 60



# 石渡庄一郎(江逸)研究：新収蔵作品資料を中心に

片多 祐子

## はじめに

石渡庄一郎(画号：江逸、芳美、東江／1897-1987)は、川瀬巴水(1883-1957)の弟子として横浜や東京近郊の風景に取材した版画を出版した、新版画運動に関わる作家のひとりとして知られる<sup>1</sup>(fig.1)。また、近代日本の版画の流れを全3巻に纏めた『近代日本版画大系』の中で石渡は、竹久夢二、伊東深水、鳥居言人、安井曾太郎、川瀬巴水、吉田博ら版画の大家とともに名を連ねる<sup>2</sup>。横浜美術館では、開館準備室時代より石渡を横浜ゆかりの重要な版画家のひとりとして位置づけ、1986年(昭和61)に14点、続いて88年(昭和63)に6点の本作家による木版画を収集した。石渡はその後、当館開館準備室の職員らによって定期刊行物への寄稿文などに取り上げられた他<sup>3</sup>、いくつかの展覧会にも出品され<sup>4</sup>、版画家としての本作家の業績が断片的に紹介されてきたが、いわゆる新版画を制作した期間が2年間のみであった本作家の足跡の多くは、謎に包まれていた。



(fig.1)  
石渡庄一郎肖像写真『石渡庄一郎(江逸)旧蔵関連資料ファイル』  
横浜美術館所蔵(石渡昭一氏寄贈)  
(2012-M-007)より

その後2012年度から13年度にかけて、当館では本作家の作品や関連資料計45点をご子息の石渡昭一氏から受贈した<sup>5</sup>。これらは戦後に手掛けた肉筆素描や版画、石渡がデザインした商品の見本類の他、「納品複写簿」や石渡昭一氏がまとめた未完の年譜(以下、「年譜」)などを含み、これまで欠落していた石渡の足

- 1 石渡は、新版画運動の主導者であった版元の渡邊庄三郎が経営する渡邊版画店より、1931年(昭和6)から翌年にかけて風景版画を出版した。近年では「新版画」の呼称について検証が必要との論考も示されているが、一方で“Shin-hanga”という英訳も定着してきている。岩切信一郎「昭和新版画の諸相——一九三〇年代の伝統木版画——」『日本の版画Ⅳ 一九三一～一九四〇』千葉市美術館、2004年など参照。
- 2 加藤順造編『近代日本版画大系 第三巻』毎日新聞社、1976年。本書の中では石渡作品5点が紹介され、作家略歴が掲載される。本書は、加藤版画店主であった加藤順造が編集をしているため、1930年代半ばに同店より多くの版画を刊行した石渡が重要視されたのは、自然な流れといえよう。新収蔵作品資料群の中には、執筆者の吉田漱から石渡に対し本書の掲載内容をたずねる書簡も含まれており、作家本人の確認を経た解説であったと推察される。
- 3 岡部昌幸「(神奈川子安濱所見)床場 石渡江逸」『青淵』1986年7月、岡部昌幸「昭和の浮世絵師・江逸 横浜の淡き情景 江逸・石渡庄一郎の横浜と愛」『市民グラフ』第60号、横浜市市民局相談部広報課、1988年9月、33頁。
- 4 主な展覧会に『近代版画にみる東京—うつりゆく風景—』(東京都江戸東京博物館、1996年)、『よみがえる浮世絵—うるわしき大正新版画展』(東京都江戸東京博物館、2009年)、『モダン横濱案内』(横浜都市発展記念館、2010年)、『はじまりは国芳—江戸スピリットのゆくえ』展(横浜美術館、2012年)など。
- 5 2012年度収蔵作品資料一覧は、『横浜美術館収蔵品目録2012(平成24年度)』(横浜美術館編集・発行、2014年)に掲載。同2013年度については、執筆時点においては未刊行。

跡を補完し得る貴重な資料群であった。それは、本作家が近代日本の社会において印刷技術が急速に発展し、社会構造も変化を遂げる中、時代の流れに鋭敏に呼应しながら版画制作に留まらない幅広い活動を展開したことを示す。そこから読み取れる新たな石渡像は、これまで知られていた活動がごく一部にすぎなかったことも示唆する。そこで本稿では、主にこの資料群に基づきながら、石渡の多彩な活動の一端を明らかにしたい。

まず第二次世界大戦以前の歩みについては、版画作品以外にほとんど資料が残されていないため、同時代の文献や、新収蔵資料に含まれる戸籍謄本の複写などで補足しながら、版画家としての石渡が生まれた時代背景を確認する。戦後においては、新収蔵作品資料で裏付けることのできる、デザイナーや孔版技術者としての本作家の新たな側面を掘り下げる。それによって、戦前と戦後を結ぶ石渡にとっての版画制作の意義を考察する。

## 百貨店図案部勤務の経験

1897年（明治30）、東京市芝区神明町（現東京都港区芝大門）に生まれた石渡は、浮世絵師・井草国芳の一族であった義兄井草仙真のもとで染色図案を学んだ後、日本画などを習得した。その後関東大震災を契機に横浜へ移住し、同地で経営展開した百貨店の野澤屋図案部に就職したとされる<sup>6</sup>。野澤屋の社史である『野澤屋から横浜松坂屋へのあゆみ』によれば、1864年（元治元）、初代茂木惣兵衛が創業した「野澤屋呉服店」は、1921年（大正10）に株式組織されることになった<sup>7</sup>。専務に就任した殿木三郎は、名古屋銀行頭取の瀧定助の腹心の部下であり、経営手腕を見込まれて派遣され、改革の実務を一任されていた。殿木は新館が開業する前日の同年9月20日、社員に次のように訓示している。

従来営業科目は主として呉服太物類にして、是等には店員も多年の経験あると雖も、今回増築新館陳列の新科目に対しては従来の店員は全く無経験のことにして、誠に至難の事に属するも、漸く仕入販売其緒に就かんとするに至れるは悦ぶべきことであります。茲に全店員に告げたいきは当呉服店も純然たる「デパートメントストア」となりて社会的事業と為りたるものであります<sup>8</sup>。

この訓示からは、大正末期から昭和初期の野澤屋は、前近代的な呉服店が近代的な百貨店、すなわち「デパートメントストア」へと変貌する過渡期を迎えていたことが分かる。ここで野澤屋の変革のモデルとされていたのは、1904年（明治37）にいち早く「デパートメントストア」宣言をした三越呉服店であったと考えられる。百貨店としての三越は、西洋的なイメージを取り入れることで、従来の呉服店からの脱却を図った<sup>9</sup>。そして、三越は、呉服売り場とは一線を画した新たなイメージづくりのために1908年（明治41）に杉

6 吉田漱「収録作家紹介」『近代日本版画大系 第三巻』毎日新聞社、1976年、273頁

7 ノザワ松坂屋編『野澤屋から横浜松坂屋へのあゆみ』1977年。『読売新聞』2008年10月26日地方版〔神奈川〕に掲載された「連載 灯りが消える」によると、野澤屋創業110年の歴史を記したこの社史は、1974年に名古屋資本の松坂屋傘下に入った際に発行が中止された。その後、ゲラ刷りが神奈川県立図書館で初公開され、現在でも同館が本資料を所蔵している。

8 前掲書、45頁

9 百貨店の近代化については、次の文献に詳しい。神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』勁草書房、1994年

浦非水（1876-1965）を専属の囑託図案家として雇用し、続いて翌年には「図案部」を設置した。三越の図案部誕生以降、大正期には、ライオン歯磨本舗の意匠部、資生堂の意匠部など、企業の広告活動が活発化するとともに、デザインの専門部署の設置が相次いだ。

野澤屋もこうした動きを受けてやがて図案部設置へと踏み出したと思われるが、1921年（大正10）の株式会社野澤屋呉服店の規程には、図案に関わる部が記載されていない<sup>10</sup>。一方で、1925年（大正14）付の専務取締役の訓示に「図案装飾」と称される係名が確認できる<sup>11</sup>。さらに1928年（昭和3）8月に株式会社野澤屋と改称され、同11月に事務館落成した際の記録からは、同館3階に「図案部」が置かれていたことが明記されている<sup>12</sup>。関東大震災を機に近隣の他の呉服店が全損する中、新館だけは罹災を免れた野澤屋では、横浜における百貨店モデルを提示する存在として成長する中で<sup>13</sup>、図案の重要性も意識されるようになったといえるだろう。

石渡がいつ頃から野澤屋と関わりがあったのかは詳らかではないが、新収蔵資料に含まれる石渡の戸籍簿（複写）によると、1928年（昭和3）3月5日に東京市下谷区の高橋氏廃家の上、横浜市神奈川区入江町の石渡伊三郎長女ヨシと婿養子縁組婚姻届出が提出されたと記載されている<sup>14</sup>。すなわち石渡は、遅くとも1928年（昭和3）までには戸籍上も横浜市民となって横浜に転居し、野澤屋の新築の事務館に置かれた図案部に勤務していたことは確かである<sup>15</sup>。そして図案部では、前近代的な呉服店に西洋的な要素を取り入れ、新たな百貨店像を作り上げることが使命とされ、近代的なイメージの創出が責務として求められていたと考えられる。

## 版画家への転身

1930年（昭和5）に野澤屋を退職した石渡は、川瀬巴水に師事し、木版画家を志した。巴水については、関東大震災で罹災し一切を無くした後、版元・渡邊庄三郎（1885-1962）の援助のもと旅に出掛け、日本各地の風景をスケッチし、それらの素描に基づいた版画作品を制作したことが知られている。

これに対し、石渡が31年（昭和6）から翌年にかけて、「江逸」の画号で渡邊版画店より出版した木版画は、その多くが横浜や東京近郊の下町に取材した風景を描いたものである。



(fig.2)  
現在の横浜市神奈川区子安浜付近の風景  
(2014年11月、筆者撮影)

とりわけ、住まいのあった横浜市神奈川区子安町や入江町から徒歩圏内の風景を描いた作品が最も大きな比重をしめる。神奈川区の入江川河口付近の子安浜は、江戸時代より漁師町として栄えた場所であり、現在でもなお川沿いに漁船が並ぶ (fig.2)。この町の床屋を描いたのが、《(神奈川子安濱所見) 床場》(fig.3)

10 ノザワ松坂編『野澤屋から横浜松坂屋へのあゆみ』1977年、43-44頁

11 前掲書、60頁

12 前掲書、332頁

13 平野正裕「野澤屋呉服店とその百貨店化過程」『横浜開港資料館紀要』第30号、2012年、75頁

14 戸籍謄本（複写）『石渡庄一郎（江逸）旧蔵関連資料ファイル』（2012-M-007）より

15 昭一氏によれば、妻ヨシとは野澤屋での職場結婚であり、当初は東京から通勤していた石渡は、結婚を機に横浜へ転居した（石渡昭一氏、インタビュー、2015年1月23日）。



である。雨の日の薄暗い夕闇の中で、床屋から漏れる光が水たまりに反射する演出には、雨の描写や、暗闇の中の光の表現に長けていた巴水からの影響も感じられるが、本作の主題は奥で働く床屋の主人とその客である。また、《(神楽) 子安一の宮神社》(85-PRJ-009) は、子安浜で漁業が盛んだった頃から漁師の守り神として親しまれてきた神社に、《鶴見の観音》(fig.4) は、「子生山」と号し子育観音が祀られている鶴見区の東福寺山門に取材している。前者では神楽とそれを見に来た人々が、また



(fig.3)  
石渡江逸《(神奈川子安濱所見)床場》  
1931年、木版、36.3×24.2cm、  
横浜美術館所蔵 (85-PRJ-010)



(fig.4)  
石渡江逸《鶴見の観音》  
1931年、木版、36.4×24.1cm、  
横浜美術館所蔵 (85-PRJ-004)

後者では小さな女の子の手を引く母親と思われる女性の後ろ姿が描かれる。いずれも名所旧跡の風景というよりも、それらの場所に息づく、前近代的な人々の暮らしの一場面が描かれている。さらに、《神奈川相應寺横町 夜店》(fig.5) では、寺ではなく、むしろ寺の周辺に栄えた横町でのバナナのたたき売りりと、その回りに群がる人々が主題となっている。このような、市井の群衆を描いた作例は、師である巴水には見られない。巴水の風景版画は、風景の中に添景人物が描かれることはあっても、その多くは風景そのものが主題であるのに対し、石渡の風景版画における作家の関心は、その場所に息づく人々の営みへと向けられている点に相違が認められる。そこには、明治維新前から受け継がれてきた町並みや日本人の風習に価値を見出そうとする、本作家の特質が表れている。

企業が図案の担当者を雇い始めたばかりの時代には、図案家として働くことは「資本主義に操られ」ることとして、積極的には受け入れられていなかったようである<sup>16</sup>。百貨店の図案部で、利潤追求のために、西洋的で新しいイメージを追いかけることが求められた反動として、石渡の目は自然と前近代的、懐古的な庶民の日常へと向けられたのではないかと推察される。

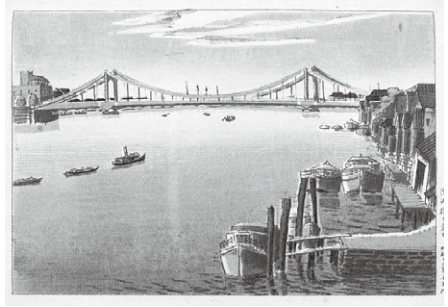


(fig.5)  
石渡江逸《神奈川相應寺横町 夜店》  
1931年、木版、24.1×36.7cm、  
横浜美術館所蔵 (85-PRJ-006)

<sup>16</sup> 渡邊素舟「街頭藝術の先駆 ポスターに贈る言葉」『七人社パンフレット(1)ポスター号』七人社、1926年(加島卓『(広告制作者)の歴史社会学-近代日本における個人と組織をめぐる揺らぎ』せりか書房、2014年、134頁より再引用)

## 合羽摺の研究

さらにその後、東京に転居した石渡は、合羽摺の研究へと踏み出すことになる。そして1934年（昭和9）から36年（昭和11）頃にかけて、加藤版画店より合羽摺を含めた風景版画や、24枚組の《おもちゃ絵集》を刊行した。なぜ、石渡は木版制作に飽き足らず、合羽摺の研究を始めたのだろうか。その疑問を探るため、同時代の研究者による合羽摺に対する見解を拾い上げてみたい。まず、1937年（昭和12）8月に発行された『浮世絵界』第2巻第8号に掲載された、浮世絵研究家の榑崎宗重（1904-2001）による「合羽摺版畫の技法」と題された論文に注目したい。巻頭には、石渡による合羽摺が掲載されており（fig.6）、この文章は次のように始まる。



(fig.6)  
石渡庄一郎《清洲橋を望む》1937年7月、  
合羽摺（『浮世絵界』第2巻第8号より転載）

口繪の版畫は、石渡庄一郎氏作の清洲橋遠望圖であつて、版式には、合羽摺を用ひてゐる。石渡氏は、従來合羽摺版畫の技術的な促進に努力してゐるが、最近では、頗る藝術的な作品を發表してゐる。誠にこれを、江戸時代に見られる合羽摺の版畫に比較するならば、現今の進歩は、極めて顯著なるものがあり到底同日の談ではないのである<sup>17</sup>。

1930年代後半以降に石渡が手掛けた合羽摺はあまり知られていないが、掲載図版を見ると、石渡の技術は合羽摺の概念を覆す程に精巧なものであったことが確認できる。渋紙に図や文字を切り抜いて紙の上へのせ、刷毛で絵具を塗って形を摺りだす伝統的な合羽摺は、型が抜け落ちないようにするための「つり」を活かした絵柄に特徴がある。また、型紙を切り抜いた形がそのまま転写されるため、単純な色面で構成される抽象的な表現に有効な技法ともいえる。しかし、石渡の《清洲橋を望む》には合羽摺の特徴である「つり」が見られず、瑞々しい水辺の風景の写実的な再現が目指されている。そこには、素朴な技法ゆえの表現の制約は全く感じられず、榑崎の高い評価も頷ける。

次に、石渡が合羽摺《靖国神社》を納めたという日本版画奉公会との関係に目を向けてみたい<sup>18</sup>。西田武雄（1894-1961）が銅版画の普及を目指して創刊した雑誌『エッチング』は、戦時下で結成された日本版画奉公会の機関誌として、1943年（昭和18）7月発行の通巻126号より『日本版画』と改題された。その翌月号には、次のような記述がある。

八月十日 第六回理事会（中略）カッパ版實技見學會開催 九月十八日頃 講師 石渡庄一郎 鈴木金平両氏 會場翼賛會大會議室の豫定<sup>19</sup>

さらに翌9月号では、鶴田吾郎（1890-1969）による「合羽版に就て」という文章が巻頭を飾る。鶴田と

<sup>17</sup> 榑崎宗重「合羽摺版畫の進歩」『浮世絵界』第2巻第8号、浮世絵同好会、1937年8月、44頁

<sup>18</sup> 吉田、同前

<sup>19</sup> 「研究所通信」『日本版画』127号、1943年8月15日、1938頁

石渡は、いずれも1930年代半ばに加藤版画より版画を出版しており、また1934年（昭和9）に石渡が豊島区千川に越してからは家も近くなり、両者の親交は深まったようである<sup>20</sup>。この文章の中で鶴田は、和紙のみならず洋紙を含めてあらゆる紙に摺ることができる点、さらに板ガラスにも捺刷し得る点、版木と比べて型紙は保存のために場所を必要としないといった合羽版の利点を挙げて、次のようにその有用性を強調する。

私は合羽版が木版より良き方のみを挙げて比較してみたけれど、決して木版そのものを排除するものではない。何百年といふ傳統を持ち、日本の生み出したる此誇るべき藝術が、これから發達させ様とする、合羽版技術と同一に論ずるものではないけれど、現今行はれて居る創作的版畫に對しては、吾々が提稱する合羽版が、充分對立できる根據を有するものである<sup>21</sup>。

さらに次のようにも述べる。

吾々の知つてゐる中で、此合羽版の研究者としては、先づ石渡庄一郎君（版奉會員）を一人者として認めなければならない。同君は十年間誰も美術家として此版畫を生かさせるべく誰も顧みないでゐる時、一人斯道の研究に没頭し從來の型紙應用版畫より更に新機軸を發明したりして自由に創作をなし得るまでに到達してゐるのであるが、同君の研究熱は、一層將來に渡つて版畫界に問題を提供してゆくものと私は信じてゐるのである<sup>22</sup>。

これらの文章からは、一部の有識者がこの時代、簡素な材料で取り組むことができる故に時代の要請に適った技法として、合羽摺に期待を寄せていたことが読み取れる。また当時、造本においても合羽摺はにわかに注目された。芹沢銈介（1895-1984）は、1936年（昭和11）に『わそめゑかたり』と『繪本どんきほうて』を合羽摺で制作、1941年（昭和16）にも本技法による『法然上人繪伝』を刊行した。さらに同年には武井武雄（1894-1983）が刊本作品の『本朝昔噺』を合羽摺で制作、本作の刷摺を担当した関野準一郎（1914-1988）も、1943年（昭和18）に青園莊より刊行した『繪本西遊記』にこの技法を用いている。このように合羽摺への興味が高まった背景には、第一人者として石渡の研究の成果があり、その功績は当時の研究者も認めるところであった。そして石渡自身も、研究者が注目したような本技法の利点を自覚していたからこそ研究に没頭したといえるだろう。

## 戦後の活路を求めて

「年譜」によれば、1945年（昭和20）5月、石渡家の住居は空襲で全焼した。終戦直後は、大正末より神田で浮世絵や版画を取り扱う中嶋尚美社に、「芳美」という画号で「木版画の原稿や孔版摺りのクリスマスカードあるいはカップ摺りの風景版画」を納めて生計を立てていたという<sup>23</sup>。新収蔵作品資料に含ま

20 「年譜」によれば、とりわけ1938年（昭和13）に国家総動員法が發布されてからは、鶴田や鈴木金平などをはじめ、活動の場を失った友人たちが石渡の家に集まるようになったという。

21 鶴田吾郎「合羽版に就て」『日本版画』1943年9月15日、1941頁

22 前掲書、1942頁

23 石渡昭一編「年譜」（未刊行）『石渡庄一郎（江逸）旧蔵関連資料ファイル』（2012-M-007）より



れる、葉書の原画（2012-DRJ-002～007／fig.7）や、クリスマスカード（2012-PRJ-006～007／fig.8）は、その一部と考えられる。これらは、初期の木版画と同様にノスタルジックな情緒を備えており、石渡が戦後も初期から一貫した作風を保ち続けていたことをうかがわせる。

また、この頃の石渡の様子を伝える貴重な資料として、新収蔵作品のうち《唐草模様紙（田端豊香園の香水外箱用）》（fig.9）の裏面に、1990年（平成2）に作家の妻が書いたと



(fig.8)  
石渡庄一郎（江逸）  
《クリスマスカード [雪だるま]》  
n.d.、シルクスクリーン、紙、15.2×11.0cm、  
横浜美術館所蔵（石渡昭一氏寄贈）  
(2012-PRJ-007)



(fig.9)  
石渡庄一郎（江逸）  
《唐草模様紙（田端豊香園の香水外箱用）》  
n.d.、シルクスクリーン、紙、54.4×35.0cm、  
横浜美術館所蔵（石渡昭一氏寄贈）  
(2012-PRJ-005)



(fig.7)  
石渡庄一郎（江逸）  
《葉書原画 [降る雪の中を行く橇馬車]》  
1950年頃、水彩、紙、11.3×15.5cm、  
横浜美術館所蔵（石渡昭一氏寄贈）  
(2012-DRJ-006)

思われる回想文を下記に  
抜粋したい。

昭和二十年 終戦後 池袋の

- ◎紙業会社で父さんがカッピーの奥さんに出会い  
香水の衣装紙（はこにはる紙）の注文を受けて 始まりだ  
最初は渋紙で模様を切抜いた その大変な事は  
二人とも肩はりになって 幾日もかかった
- ◎森田さんが寫真製版の方法を 謄寫版に作(ママ)ふため 知人を  
集めて 講習会を計畫した折に 父さんも出かけて見分(ママ)した  
重クロムサンを 絹ばりの枠にぬる時 その重クロムサンは  
激物とて あつかいが大変だった  
絹わくを作り 戸柵の暗い所で乾燥させるので もしもの事を  
考へ恐ろしい 思がした  
そのクロムサンの乾いたものに墨線の模様を重ね 日光に当て  
何秒か立(ママ) つと 墨線が白くぬけて 版が出来る  
幾度もくり返し やり直して やっと細い墨線がきれいに出来た時  
父さんも大よろこびで カッピーの模様紙が仕事になれば 手  
もつけられぬ…  
(後略)

本作に伴っていたご遺族のメモによれば、石渡は1940年代後半から50年代後半頃まで、東京都練馬区に本社を構えていた香水メーカー、田端豊香園の包装紙の制作を受注していたようである。1908年（明治41）に創業した同社は、「カッピー」という商品名の香水を売り出し、国産香水メーカーの草分け的存在となった<sup>24</sup>。上述の回想によれば、石渡は、カッピーの包装紙制作のために初め渋紙を切り抜いた型紙を用いていたが、やがて重クロム酸塩類とコロイドの混合物の感光性を利用した、写真製版の技術を制作に取り入れるようになったことが分かる。また、夫婦二人三脚で、新たな技術を研究し、開発に苦心した様子が伝わってくる。恐らく、この仕事を契機として、石渡は合羽摺のみならず、広く孔版技術の研究、ならびに、その技術を生かした制作も幅広く手掛けるようになったと考えられる。

こうした孔版の新しい技術への目覚めはまた、時代の風潮に連動していたといえる。孔版技術の第一人者であった、若山八十氏（1903-1983）が『新職業としての孔版・軽印刷技術全書』を出版したのが1955年（昭和30）であり、本書の序文として、若山は当時の孔版の発展について次のように述べる。

私の三十有余年にわたる孔版生活の中で、この版様式が、現在ほどいきいきと活気を帯びたことはないように思われます。（中略）謄写印刷からはじまって、グラント印刷、簡易オフセットへの移行、タイプ孔版の実践と、ぐんぐん前進をつづけ、ようやく謄写印刷にも、永年待望の写真版が活躍するまでになりました。おそらく孔版の第一次黄金時代の展開が、はじまったと申しても過言ではありませぬ<sup>25</sup>。

若山が述べるように、当時の日本で最も大衆的な印刷技法であった謄写印刷のみならず、孔版印刷の技術は戦後に飛躍的な発展をみせ、40年代後半から50年代にかけて、孔版は新たな複製技術として高い関心を集めていた。さらに若山は「軽印刷」と分類されたこの分野について下記のように記す。

印刷は印刷でも、軽印刷という域を出ない範囲の仕事に、愛着を禁じ得ないのですから、いかなる精巧精密な機械に対しても、羨望することはないのであります。軽印刷圏の獲得、これはひとり孔版に止まらないうで、どこまでも大衆の、いや、より乏しい末端の大衆のためにこそ、私たちの技が、血が、工夫が、捧げられる日の喜びをこそ望んでいるのであります<sup>26</sup>。

この記述からは、当時の人々が孔版に対して、技術の最先端を駆使した精巧な再現ではなく、むしろ簡易な複製方法としての普及を期待していたことが分かる。そして石渡もこうした手軽さ故に、合羽摺より進歩した複製印刷法としての孔版技術に新たな可能性を見出そうとしたのではないと思われる。

また、新収蔵資料の中には、1952年（昭和27）の2点の賞状が含まれている。当時の岡山県知事・三木行治より授けられた「昭和二十六年度輸出敷物の図案募集」における一等の賞状と、高砂ゴム工業株式会社の「タカニールデザイン懸賞募集」における佳作の賞状である。これらは、1950年代の石渡が、上述のように孔版技術の研究を重ねる一方で、フリーのデザイナーとしての活路を求めて試行錯誤をしていたことの証左となろう。

<sup>24</sup> 資生堂が最初の本格的な香水「花椿」を発売したのが1917年（大正6）である。それまではフランスからの輸入品の香水が主流であったが、資生堂の香水や田端豊香園のカッピーの登場により、国産香水が普及した。

<sup>25</sup> 若山八十氏「序」『新職業としての孔版・軽印刷技術全書』鶴書房、1955年、23頁

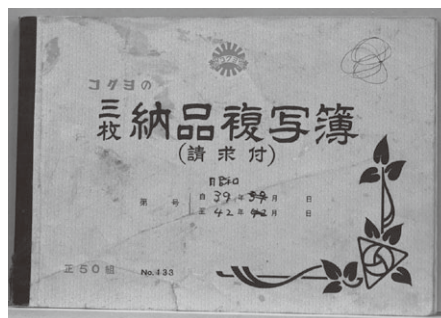
<sup>26</sup> 若山、24頁

## デザイナー・孔版技術の技術者として：「納品複写簿」より

新収蔵資料のうち、戦後の石渡の足跡を具体的に裏付ける資料となるのが、「納品複写簿」（表1／fig.10）である。本資料は1964年（昭和39）から67年（昭和42）の限られた期間の記録ではあるものの、石渡がどのような取引先と、こういった条件のもとで仕事をしてきたかを伝える。

1964年（昭和39）10月1日に納品した慈恩寺の玄装塔版画とは、《日本玄装塔》（fig.11）であろう。本作は、埼玉県岩槻市（現さいたま市岩槻区）の慈恩寺より委嘱されたもので、寺のシンボルともいえる西遊記で有名な玄装三蔵法師の霊骨の一部を納めた石塔を描いている。金地タトウ入りが1点250円、白地タトウ入りが1点220円で計500点を納めたと記録されており、外食のうどんやそばが一杯50円、大卒男性の事務系職種の初任給が21,526円であった時代において<sup>27</sup>、まとまった収入をもたらした仕事であった。

また、1967年（昭和42）6月12日と12月6日に納品している起山房の便箋についても、その一部が新収蔵資料に含まれている（2012-M-001）。これらには、起山房に納めたと思われる図案の原画2種（fig.12）と成果物9種（fig.13）があり、画題から推測して「納品複写簿」には記載がないものも含まれることから、この前後にも継続的に取引されていたと考えられる。また、これらの便箋の表紙については、現物納品ではなく、原画1点につき1件5,000円で納品されていたようである。



(fig.10)  
「納品複写簿」  
『石渡庄一郎（江逸）旧蔵関連資料ファイル』  
横浜美術館所蔵（石渡昭一氏寄贈）  
（2012-M-007）より



(fig.11)  
石渡庄一郎（江逸）《日本玄装塔》  
1964年、シルクスクリーン、紙、30.3×24.6cm、  
横浜美術館所蔵（石渡昭一氏寄贈）  
（2012-PRJ-001）



(fig.12)  
石渡庄一郎（江逸）  
「起山房便箋表紙のための原画」  
『石渡庄一郎（江逸）旧蔵スクラップブック』  
横浜美術館所蔵（石渡昭一氏寄贈）  
（2012-M-001）より



(fig.13)  
石渡庄一郎（江逸）「起山房便箋表紙」  
『石渡庄一郎（江逸）旧蔵スクラップブック』  
横浜美術館所蔵（石渡昭一氏寄贈）  
（2012-M-001）より

<sup>27</sup> 森永卓郎監修『物価の文化史事典』展望社、2008年のうち、「うどん・そばの値段変遷」（120頁）ならびに「初任給の推移」（444頁）の1964年の項目を参照。

一方で、取引頻度の最も多い国光ネオン株式会社への納品歴を見てみると、布看板の現物納品の他、ボスターの製版ならびに印刷、時に版直し代が計上されている。また、1965年（昭和40）2月24日の森田製作所への納品においても、150メッシュのスクリーン製版を請け負っていたことが記録される。これらの記録からは、60年代半ばには石渡が孔版技術に対して一定の技術力を備えていたことが分かる。

ところで石渡は、これらの技術力をどのように身につけたのであろうか。「年譜」によれば石渡は、1958年（昭和33）より（株）津上製作所の技術嘱託となっている。1962年（昭和37）に津上製作所より刊行された『過去と現在の対話』によれば、本企業は終戦後の十数年に多分野における新機種の開発に携わっており、印刷関係では活字型彫機その他、スクリーンプロセス印刷機、多色刷オフセット印刷機を開発した<sup>28</sup>。こうした企業での印刷機の研究開発に関わった経験は、石渡にとって独学では得られない新たな知識を深める機会となり、その後の仕事にも専門的な知識と技術が生かされていたと考えられる。

このように「納品複写簿」からは、1960年代以降の石渡が複数の取引先と継続的に仕事を展開しており、また各取引先に対して、自ら考案したと思われる図案をシルクスクリーンなどで刷り、その成果物を納品することもあれば、デザインの原画のみを提供するケース、あるいは製版から手掛ける案件などもあったことが分かる。その多彩な仕事ぶりは、本作家がデザイナー、あるいは印刷技法の研究者、ならびにそれらの技術者としても活躍の場を広げていったことを示している。

---

<sup>28</sup> 津上製作所『過去と現在の対話』津上製作所、1962年、90頁



表1. 「納品複写簿」(1964-67年)『石渡庄一郎(江逸)旧蔵関連資料ファイル』(2012-M-007)より

凡例:本表は、横浜美術館所蔵の「石渡江逸関連資料」(2012-M-007)のうち、「納品複写簿」に基づき、執筆者が書き起こした。

□は判読が難しい箇所、また〔 〕内は、補足・修正した箇所である。なお、納品先の固有名称については、本表の中での表記統一を優先し、一部改めた。

納品日	納品先	品目	数量	単価	金額	合計	備考
1964年10月1日	慈恩寺大鳥見道	玄装塔版画(金地タトウ入り)	300	250	75000	72500	版画は版画用大袋500枚、 版画用袋印刷費、版画題 箋印刷、お届けの費用含 内金5万円お預り差引
		玄装塔版画(白地タトウ入り)	200	220	44000		
		玄装法師御影	500	7	3500		
1964年11月2日	国光ネオン株式会社	東芝リンクストア布看板 東部3色	16	200	3200	3200	
1964年11月6日	国光ネオン株式会社	中部布看板地	14	200	[2800]	-	
		北部布看板地	26	-	-		
		西部布看板地	24	-	-		
1964年11月20日	国光ネオン株式会社	ポスター東武支部製版	-	-	3000	4000	
		同 印刷	20	-	1000		
1964年11月23日	国光ネオン株式会社	ポスター柏市部製版	-	-	3000	4500	
		同 印刷	30	-	1500		
1964年11月23日	国光ネオン株式会社	ポスター文京支部	300	50	15000	15000	
1964年11月25日	国光ネオン株式会社	布看板 柏支部	10	200	2000	2000	
1964年11月30日	国光ネオン株式会社	布看板 墨田支部	16	200	3200	9200	
		同 新宿支部	20	300	6000		
1964年12月1日	国光ネオン株式会社	ポスター江戸川支部	300	50	15000	15000	
1964年12月5日	松本紙器	白牡丹用紙 (用紙 梶紙 1×3000円)	500	35	17500	17500	
1964年12月10日	国光ネオン株式会社	ポスター練馬支部製版/ 印刷	60	-	3600	3600	
1964年12月10日	国光ネオン株式会社	杉並支部 観劇招待/ ポスター5色	68	60	4080	4580	
		版直し		500	500		
1964年12月10日	国光ネオン株式会社	ポスター温泉招待/ 中野支部	64	60	3840	4340	
		版直し		500	500		
1964年12月10日	国光ネオン株式会社	渋谷支部 喰べ放題/ ポスター招待5色	48	60	2880	3380	
		版直し代		500	500		
1964年12月14日	国光ネオン株式会社	葛飾支部 布看板	20	200	4000	4000	
1965年2月24日	森田製作所	ホース原稿直し製版 (石渡スクーリン 150メッ シュ/木□)	1	2000	2000	7600	
		□□製版(石渡スクーリ ン 150メッシュ/木□)	1	2000	2000		
		新二号版製版(石渡スクー リン 150メッシュ/木□)	1	2000	2000		
		ノート版(森田さんスクー リン木□/石渡)	1	800	800		
		新はがき版(森田さんス クーリン木□/石渡)	1	800	800		
1965年3月6日	慈恩寺	玄装三蔵法師霊骨塔版画	50	130	6500	6500	
1965年3月18日	国光ネオン株式会社	ショーカード:テレビ (製版代、紙代共)	100	15	1500	7500	
		ショーカード:ステレオ (製版代、紙代共)	100	15	1500		
		ショーカード:冷蔵庫 (製版代、紙代共)	100	15	1500		
		ショーカード:洗濯機 (製版代、紙代共)	100	15	1500		
		ショーカード:品名無し (製版代、紙代共)	100	15	1500		
1965年3月18日	森田製作所	展示会用 □幕	2	-	1000	1800	
		黄色天笠	2	-	800		



納品日	納品先	品目	数量	単価	金額	合計	備考
1965年3月22日	国光ネオン株式会社	ショーカード：東芝テレビ (製版代、紙代共)	100	15	1500	7500	
		ショーカード：東芝ステレオ (製版代、紙代共)	100	15	1500		
		ショーカード：東芝冷蔵庫 (製版代、紙代共)	100	15	1500		
		ショーカード：東芝洗濯機 (製版代、紙代共)	100	15	1500		
		ショーカード：東芝品名無し (製版代、紙代共)	100	15	1500		
1965年4月28日	国光ネオン株式会社	製版代(3尺×2尺)ポスター	2	-	3500	8000	
		印刷代(3番)印刷紙含む	75	60	4500		
1965年6月7日	松本紙器	白牡丹用紙加工	500	35	17500	19000	
		白牡丹紙	1メ	-	1500		
1965年8月3日	山岡	作曲発表ポスター／野大 同人 製版代	-	-	3000	9500	
		同 刷り代	50	65	3250		
		細字写真製版作る／原橋 〔稿〕文字誤りの度すり直 し	-	65	3250		
1965年10月18日	伊セ〔勢〕辰	千代紙 桜吹雪	300	15	4500	22500	
		糸目模様 2色	600	15	9000		
		梅 2色	600	15	9000		
1965年12月24日	森田製作所	新はがき版	1□1枚	-	800	2800	ホース、アテナ図案とも 2枚
		ホースはがき版	2□2枚	-	1000		
		アテナセット	2□2枚	-	1000		
1966年7月17日	松本ケース製作所	白牡丹箱ばり用紙	500	35	17500	17500	
1966年11月5日	乗松印刷	日本テレビ放送ドラマ台本 表紙(製版、表題文字)	2000	10	20000	20000	
-	オキナ紙製品株式会社	群青地便箋表紙4面付	1400	-	-	36894	
		紫地便箋表紙4面付	1395	-	-		
		以上2種総□□	11180	330	36894		
1967年1月25日	乗松印刷	東映童〔動〕画表紙／アン デルセン物語 製版代	-	-	1500	6500	
		同 刷り代	250	20	5000		
1967年2月14日	オキナ株式会社	紫地便箋表紙4面付	1400	13.2	18480	18480	
1967年3月9日	起山房	43年用年賀状	7	1500	10500	10500	単価1枚1000□の畫料との 事特別に配慮して下さり 1500の割
1967年3月	オキナ株式会社	便箋 東京箋 表紙 (4丁付 1400枚)	5600	3	16600	16600	
1967年4月11日	オキナ株式会社	紫地便箋表紙4面付	1590	12	19080	19080	
1967年6月12日	オキナ株式会社	絹目箋表紙4面付	1980	12	23760	47760	
		東京箋表紙4面付	2000	12	24000		
1967年6月12日	起山房	便箋表紙	2	5000	10000	30000	
		花2種	1	5000	5000		
		花と蝶	1	5000	5000		
		狩人	2	5000	10000		
		熱帯魚2種	1	5000	5000		
1967年8月7日	オキナ株式会社	絹目書簡箋表紙4面付	1985	12	23820	23820	
1967年12月6日	起山房	椅子による女人	1	5000	5000	20000	
		浪頭の感じの花	1	5000	5000		
		孔雀から草	1	5000	5000		
			1	5000	5000		

百貨店の図案家という立場を離れた1930年代の石渡が着目したのが、新版画の制作であった。当時の石渡は、新版画に新たな視覚メディアとしての可能性を見出したとも考えられる。しかし、やがてその限界を見極めた石渡は、次に合羽摺、さらには孔版へと関心を広げていった。それは同時に、戦後になって孔版の技術が進化し、50年代になると「新職業」として孔版や軽印刷が社会的に普及していった動きとも連動していた。一方で石渡は、1960年代になると、孔版技術を用いた製版・印刷業とともに、デザインの仕事もフリーの立場で請け負う活路を見出していった。こうした職能の活かし方もまた、デザイナーという仕事が、戦後になって次第に市民権を得たからこそ可能になったと言えるだろう。戦後の石渡の活動を辿ると、そこには、版画家としてのみならず、デザイナーとして、あるいは孔版印刷の技術者としての一面も併せ持った複合的な本作家の輪郭がおぼろげながら立ち上がる。

このように、染色図案や日本画の習得を原点とした石渡の生涯を振り返ると、一企業の図案家を経て、新版画の絵師、合羽摺制作者、さらには孔版の技術者ならびにフリーのデザイナーへと、時代の変化に呼応しながら転身を遂げている。こうした背景には、本作家個人の問題に留まらず、近代日本における、版画や複製技術の社会的位置づけの変遷、ならびにデザイナーという職業に対する認識の変化に関わる問題が横たわっているように感じられる。それは同時にまた、近代日本の版画の多面性について、再考を促す問題にも接続するように感じられる。

本稿では、石渡の多様な側面に光を当てるために、本作家の歩みを概観してきたに過ぎない。各時代の足跡についてのより深めた調査と考察は、今後の課題としたい。

# 横浜美術館美術情報センターにおける資料展示について

興津 美由紀 谷口 和歌子

## はじめに

図書館において、出納やレファレンスは利用者と図書資料を繋ぐ基本的な利用者サービスである。その他にも社会の様々な要請に対応するために、例えば横浜市立図書館の「移動図書館」のように、あらかじめ選抜された図書資料をまとめて利用者の身近に移送し、定期的に仮設図書室を開くなどの活動も行われている。また、図書館（室）の中に特別な場所を設け、資料を展示するサービス（以下「資料展示」）も広く行われている。横浜美術館美術情報センター（以下「当センター」）でも過去様々な資料展示を行ってきたが、平成26年度により積極的な利用者サービスを目指して、新たな視点からこれまでの方法を抜本的に見直し、「『焚書』一禁じられた書物と文化財―」展を企画実施した。小論では当センターにおける過去の事例も踏まえながら今回の新たな試みを紹介し、「資料展示」の課題と可能性を考察したい。

一般に図書館において「展示」と言う場合、その意味は必ずしも厳密に定義されている訳ではない。管見の限りでは、あるテーマに基づいて選び出された資料を、通常の配架場所から別置することを「展示」と呼ぶ図書館が多いようである。しかしその展示の形式は様々で、机や書架等にブックスタンド等を用いて資料を立てたり、フェイスアウトしたりする場合や、ケースに入れる場合もある。ここでは筆者の職場での呼称に倣い、机や書架等に展示することを「資料コーナー」と呼び、ガラスケース内に展示することを「ケース内展示」と呼ぶこととしたい。この「資料コーナー」と「ケース内展示」を合わせて、「資料展示」と呼ぶ。また、美術館での美術作品の展示は、展覧会もしくは美術展と呼ぶ。

小論の第1章では当センターと利用者サービスの概要、その中で資料展示の占める位置を示す。第2章では平成20～25年度に実施された資料展示について概観し、成果と課題を考察する。第3章では、「『焚書』一禁じられた書物と文化財―」展について、まず展示テーマとして「焚書」を設定するにあたっての考察過程を述べ、次に展示内容を資料論、展示論に分けて記述する。第4章では本資料展示で実施したアンケート結果を分析する。第5章では実地調査した神奈川県立図書館の事例を分析し、当センターの「焚書展」と比較しつつ今後の展示の指針となり得る取り組み方や様々な工夫について考察する。結びでは当センターにおける資料展示の今後の可能性について所見を述べる。序文、第1～2章、第4～5章、結びを興津、第3章を谷口が執筆した。

## 第1章 当センターにおける利用者サービスの概要と資料展示

### 1 当センターの概要

当センターは、横浜美術館内に設けられた美術の専門図書室である<sup>[1]</sup>。「横浜美術館美術図書室収集方針」に基づき、美術、美術史、絵画、版画、彫刻、写真、建築等に関する資料を収集、整理、保存し、一般利用者（市民や研究者）と当館職員の利用に供している。平成26年12月現在の所蔵冊数は約10

万5千冊を数える（逐次刊行物を除く）。所蔵資料は（表1）の8種類に区分される（平成26年12月現在）。

表1 横浜美術館美術情報センター資料分類

		名 称	所 蔵 数
図書資料 ※1		和書 ※2	29,000冊
		洋書 ※3	12,000冊
		和カタログ ※4	44,000冊
		洋カタログ ※5	20,000冊
	逐次刊行物 ※6	和雑誌	約2,900タイトル
		洋雑誌	
年報・紀要			
ニュース			
非図書資料	映像資料 ※7	ビデオ	約560タイトル
		DVD	
	マイクロ資料 ※8	ロールフィルム	26タイトル（701巻）
		マイクロフィッシュ	13タイトル（2,616シート）
	エフェメラ資料 ※9	作家ファイル（案内葉書等）	
	美術館チラシファイル		

## 2 利用者サービスの概要

当センターの利用者サービスは2種類に大別できる。ひとつは一般利用者および当館職員を対象とした「通常サービス（通常業務）」、もうひとつは一般利用者を対象として司書が特別に企画する事業である。それをここでは仮に「特定普及事業」と呼ぶ。具体的な内容は次のとおりで、「資料展示」は利用者サービスの中の「特定普及事業」のひとつに位置付けられる。

### 1) 通常サービス（通常業務）

- A 目録の作成と公開<sup>[2]</sup>
- B 開架資料の公開<sup>[3]</sup>
- C 閉架資料の出納<sup>[4]</sup>
- D レファレンス対応<sup>[5]</sup>
- E 複写サービス<sup>[6]</sup>

### 2) 特定普及事業

- A バックヤードツアーの実施<sup>[7]</sup>
- B ボランティアの受入れ<sup>[8]</sup>
- C 資料展示

## 第2章 資料展示について

当センターの資料展示は、所蔵資料と利用者を繋ぐことを目的として、司書の手により行われている。司書は学芸員と異なり美術や美術史の専門家ではないが、司書としての業務を全うすべく、作家・作品に関する質問や所蔵資料に関する質問などのレファレンスをはじめとする利用者の多様な要望に応えるよう努力を重ねている。このような立場から自分たちちりの方法で資料展示業務に従事している。

### 1 資料展示の形式

当センターの資料展示は「資料コーナー」と「ケース内展示」の2種類の形式がある。以下それぞれ詳細を述べる。

## 1) 資料コーナー

資料コーナーとは、特定のテーマに基づいて選定した資料を所定の配架場所から抜き取り、期間限定で開架室にフェイスアウトもしくはブックスタンド等を用いて別置するものである。次の2種類がある。

**A 展覧会関連資料コーナー**（開催中の企画展や横浜美術館コレクション展に関連する資料を年3～4回、展覧会開催中2～3ヶ月間実施する）

**B 特設資料コーナー**（所蔵資料紹介と書庫資料の活用を目的としている。司書がテーマを設定し、年3～10回、1回あたり1～2ヶ月間程度実施する）

平成20～22年度は利用者の目に付き易くまた資料を手に取り易いという利点から、備え付けの閲覧机や長机に資料コーナーを設置した。しかしこの場合、本来利用者のためのスペースである閲覧机を資料コーナーで占領することにもなる。そこで平成22年度以降設置場所を再考し、最終的に別の用途で使用していたスチール製のディスプレイラックを用いることにした。当該ラックの限られたスペースを考慮し、展覧会会期中は展覧会関連資料コーナーを、会期外は特設資料コーナーを交互に設置することとした。

## 2) ケース内展示（平成20～25年度まで）

ケース内展示は特定のテーマに基づいて選択した資料を所定の配架場所から抜き取り、期間限定で閲覧室のガラスケース内<sup>[9]</sup>に展示する事業である。本来閲覧を目的とする資料をケース内に施錠展示するため、それなりの課題を内包している。当センター開室時から歴代司書が担当してきたが、ここでは筆者が着任した平成20年度以降の過去6年間の概要をたどりながらその課題を述べる。

平成20年度から25年度にかけて計15回のケース内展示を行った（表2 P.48参照）。その内容は方針に応じて次の2つに大別できる。ひとつは「横浜美術館の展覧会の補完・普及のための展示（以降「展覧会補完展示」という）」（20～22年度）であり、もうひとつは「当センターの特色ある図書コレクションを紹介するための展示（以降「蔵書紹介展示」という）」（23～25年度）である。

資料の選択および決定にあたっては、先に述べたいずれの方針に基づく場合においても、①「展示テーマの設定」、②「資料の検索」、③「現物確認」と展示シミュレーションの3つのプロセスを経て行った。これらの順序はケース内展示の内容によって必ずしも一定しない。以下に「展覧会補完展示」、「蔵書紹介展示」に分け、具体的なプロセスおよび成果と課題について述べる。

## 2 ケース内展示①「展覧会補完展示」について（平成20～22年度）

### 1) 「展覧会補完展示」の概要

“展覧会に連動した資料展示を行う”という方針のもと、司書が資料コーナーと同様の「当館企画展・コレクション展（美術展）の鑑賞者の理解を助け、様々な資料を通して作家や作品を知っていただく」という目標を設定し、和書を中心にケース内展示を行うこととした。

「展覧会補完展示」では各展覧会の性質や内容に応じて資料選定の方法を変える必要が生じた。具体的には次の2つの場合がある。

**A 対象作家が明白な個展の場合**（そのまま展覧会タイトルを「ケース内展示のテーマ」とし、これをキーワードとして資料を検索し候補資料を選定する）

**B 対象が広範で抽象的なタイトルの展覧会、グループ展や歴史的・考古的な展覧会、当館収蔵作品を主体に自由な発想で構成された展覧会等の場合**（展覧会に関連する複数のキーワードを切り出して候補資料を探し、最終的にケース内展示独自のテーマを決定する）

展示の内容と質の向上のため、展示資料を選択する過程においてキーワードを何度も設定し直すことがある。例えばより特徴的かつ展示に向く資料が見つかった場合には、その資料に合わせたキーワードに切り替える。

また、資料を探す際は、蔵書検索システムや参考図書・展覧会カタログによる検索、ウェブサイトを利用した雑誌記事検索、当該雑誌の索引・バックナンバーのチェック、「ブラウジング」等の方法のほか、司書の記憶にある特徴的な資料の中から選択する、資料そのものから読み取った情報を基に新たな資料を探すといった方法も用いる。こうして候補資料を集めた後、展示ケースに見立てた同サイズの机の上に候補資料を実際に配置してシミュレーションを行う。それにより最終的な点数と配置方法を決定する。また展示にあたっては、①パネル（タイトルと展示の趣旨を記載）、②キャプション（タイトル、出版社、出版年、著者等の書誌情報を記載）の2種類を用意し、必要に応じて補助パネル（資料の内容、種類の表示、展示資料からの引用文等を記載）を組み合わせる。

## 2) 「展覧会補完展示」の成果

「展覧会補完展示」では、下記の事例のように内容や形状などが特徴的な資料を用意できれば、利用者や鑑賞者が展覧会に関連した情報を得る機会を提供でき、また当センターの多様な資料を紹介することが可能である。

（事例）当館収蔵作品を主体に4人のゲストによる自由な発想で構成された展覧会である「4人が創るわたしの美術館」展（平成20年度）では「川上澄生」を、「横浜美術館全館コレクション展 ひびきあう東西の美術—開港から現代まで」（平成20年度）では「恩地孝一郎」を取り上げた。これら版画家にスポットを当てたケース内展示では、作家の著作物（貴重書）をはじめ古い雑誌や案内葉書等様々な種類の資料を加え、小規模ながらもまとまりのある展示となった。版画作品と図書資料は双方の性質上よく馴染み、また資料が潤沢にあったことも成功の理由のひとつに挙げられる。

## 3) 「展覧会補完展示」の課題と考察

次のようないくつかの課題も指摘できる。

### A 展覧会とのつながりが明確になりにくい展示となる場合

歴史的・考古的な展覧会である「ポンペイ展 世界遺産 古代ローマ文明の奇跡」（平成21～22年度）では、タイトルや出品作品などから複数のキーワードを抽出したが当該資料が乏しく、ようやく「フレスコ画」で展示に耐えうる資料として超大型本の『ミケランジェロ・システーナ礼拝堂』を見出した。しかしミケランジェロは展覧会に出品されてはならず、フレスコ画も多種多様な出品群の一部分にすぎない。そのため結果的に展覧会とのつながりがわかりにくい展示となった。

これと同様の事例として、同じく歴史的な展覧会である「大開港展」（平成21年度）では、一枚刷りの版画集『東京名所図 小林清親』<sup>[10]</sup>を展示対象とした。ここでのキーワードは、「明治の浮世絵師」であった。このほか、『フランス絵画の19世紀—美をめぐる100年のドラマ』展（平成



22年度)では、一枚刷りの大判の版画集『ブルターニュの発見』等から、19世紀の版画を展示対象とした。ここでのキーワードは、「19世紀のフランス」であった。

## B 現代作家の個展の場合、ケース内展示の対象資料が非図書資料に限られること

「金氏徹平：溶け出す都市、空白の森」展、「東芋：断面の世代」展では、案内葉書、リーフレット、チラシ、作家作品を掲載した雑誌の複写などを中心に展示することになった。現代作家の場合には美術史上の大家に比べて単行書籍や画集などの出版物が少なく、また、出版物があっても鑑賞用というよりは読むための資料であるため「資料コーナー」に配架するものが多い。

上記の課題に共通している問題は、展覧会のテーマによっては展示対象となり得る資料が限定され、資料を見出すことが難しくなっているという点である。それはその時々展覧会のテーマに関連した所蔵資料に多寡があり、さらに展示に向いている形状を持つ資料や貴重書など特徴的な資料に限られていることに起因する。

この3年間のケース内展示は実践を重ねながら、“どのような資料が展示に向いているのか”を模索した過程であったと言える。「資料コーナー」と「ケース内展示」を同時に設置することで、読んでいただく資料とケースで見ていただく資料を選別する基準は次第に明らかになり、ケース内展示の回を重ねる度に、以下のような展示に向いている資料の大まかな基準が見えてきた。

- ・大判の図版が掲載されている大型本や貴重書、古い雑誌など、利用者や鑑賞者が見て楽しめるもの
- ・一枚刷り、折り本、卷子本など、一般的な洋装本の資料とは異なる、展示に適した形状のもの

これに対して資料コーナーでは扱いやすいサイズで保存状態が良く、テキスト主体の資料、国内の展覧会カタログ（閉架資料）等が優先される。

## 3 ケース内展示②「蔵書紹介展示」について（平成23～25年度）

### 1) 「蔵書紹介展示」の概要

「展覧会補完展示」で見えてきたいくつかの課題を踏まえて資料展示を再考した。展覧会関連資料コーナーは継続し、ケース内展示については展覧会と無理に関連づけることをやめ、資料そのものにスポットを当て「利用者に当センターの特色あるコレクションを知っていただくために、最も特徴的な資料を紹介する」という方針を立てた。当センターでは一般図書館に見られない特徴的なジャンルとして、国内外の美術館・博物館・ギャラリー等で発行された約6万4千冊におよぶ「展覧会カタログ」を所蔵しているため、そこに焦点を当てて一連のケース内展示を行うこととした。

一般図書館では展覧会カタログが所蔵されている場合でも一般の図書資料として整理されることが多いが、当センターや東京国立近代美術館アートライブラリ、東京都現代美術館美術図書室などALC（美術図書館連絡会）加盟館をはじめとする美術専門の図書室（館）では、展覧会カタログを一般の図書資料とは別のジャンルとして収集、整理、保存していることが多い。展覧会カタログは一般書籍と異なる様々な特徴を持っている。通常は会期中に展覧会会場で販売され、一般書店には流通していない場合が多い。また、ただ1回のみ存在する展覧会の記録として、主催者、開催館展示資料の所蔵先等の表記や研究成果の発表の場として、その時のその分野の最新の情報を盛り込んでいる。書物としての形態にもそれに伴って様々な工夫が施されている。そのことを利用者にご理解いただけるよう企図し、特に装幀や形状に工夫が見られるもの、一見して「一般の本に比べて

変わっている」もしくは外観が「面白い」と思われる展覧会カタログを選び、「美術情報センター所蔵面白カタログ紹介」<sup>[11]</sup>と題して数回に分けて展示することとした（表2 P.48参照）。

展示候補は過去のバックヤードツアーで紹介した「面白カタログ」や「ブラウジング」で探したほか、蔵書検索で得られた資料の形状、附録等の書誌情報も参考にした。「展覧会補完展示」では専ら和書から資料を探していたが、「蔵書紹介展示」では展示対象を広げ洋カタログも積極的に選ぶようにした。これらの展示候補となる資料を見出すまでの時間は、展覧会を展示テーマとしていた場合よりもかなり短縮される。これは資料のジャンル、形態が予め設定されているということもあるが、所蔵資料そのものを選択の出発点としたことが大きい。

配置方法は個々の展覧会カタログの特徴的な形状を引き立たせ、見る人にその魅力が伝わるように配慮し、以下のように個々の資料の形状に合わせて展示方法を工夫した。

**(事例)『現代美術のABC アートはあなたのそばにある』展カタログ**

トランプに擬えた33枚のカードと1冊の小冊子で構成され函に納められている。この函から1枚のカードを半分出し、ほか10枚のカードをテキスト部分と図版とを混ぜて並べ円形に配置することにより、大きなトランプカードが函の中から円を描いて飛び出しているように見せた。また、展示期間中幾度かカードを入れ替え、変化をつけた。

ケース内での展示期間中は、対象資料を手にとって読むことができなくなるために、展示対象となったカタログの展覧会の情報（タイトル、会場、会期等）をキャプションに記載した。洋カタログのキャプションは日本語に翻訳した内容で記載した。パネルや補助パネルは「展覧会補完展示」に準じた。

### 3) 「蔵書紹介展示」の成果

一般の人が手にする機会の少ない過去の展覧会カタログを展示の主役とすることによってこのジャンルの存在と魅力を示すこと、そして、美術館の機能のひとつとしてのカタログ制作をクローズアップすることで、美術館の図書室ならではの展示とすることがこの展示の目的であった。それ以前の「展覧会補完展示」ではもっぱら内容に注目し、それが展覧会とどのように関連するかを考えていた。つまり資料を情報媒体と考えていたのに対し、対象を展覧会カタログに特化した「蔵書紹介展示」では、資料の書物としての作られ方に注目して展示を構成したことが大きな特徴である。このことにより「情報媒体としての書物」ではなく、「実体としての書物」という新たな視点が得られたことの意義は大きい。美術作品がそれ自体の歴史を持つように、書物にもそれ自体の“もの”としての歴史がある。ものとしての本を主役とすることも展示は成り立つのである。

### 4) 「蔵書紹介展示」の課題と考察

一方で、展示が長期にわたって同一のテーマの下で継続されたために単調な印象を与えたことは否定できない。全会期を通して3回にわたり展示内容を入れ替えたにもかかわらず、各回のサブタイトルを作ることなく、それぞれの特徴や従前の展示との違いを明確に示さなかったために、展示が変わったこと自体が利用者に認知されず、関心を引くことができなかった。一連のシリーズを企画する際、「どの回にどのようなタイプのカatalogを集めるか」ということを緻密に計画していれば、それぞれの特徴が際立ち連続展示の単調さは回避できたと考えられる。例えば、金属製、木製、布製など



“紙以外の素材”に着目する、おもちゃ箱仕立ての、もしくはゲームのようなカタログといったデザインのコンセプトに着目するなど、様々な切り口を考えることができる。このように展覧会カタログの「面白さ」の多様な観点を具体的に複数設定することで、このジャンルの広がりや奥深さを表現できただろう。

以上、当センターにおける6年間に亘るケース内展示の概要、経緯を振り返り、成果と課題について考察した。最大の問題である“書物をケースに展示することの難しさ”は依然として残る。有効なケース内展示とはどのようなものなのか。この疑問を踏まえて、平成26年度にこれまでとは異なる構成で、新たな要素を盛り込んだケース内展示を行った。“情報媒体としての書物”と“実体としての書物”の二つの視点から図書資料を活用するべく、司書が独自の調査研究を行いテーマを設定した。「『焚書』—禁じられた書物と文化財—」と題し、展覧会（ヨコハマトリエンナーレ2014）の開催に合わせて実施した。そこでは、初の試みとして、章の設定、解説パネルの掲出、展示替え、展示資料リストおよび展示関連資料リストの配布を行った。また、当館ホームページ、メールマガジンでの広報に加え、今回初めてチラシを作成して館内外で配布し、市政記者発表、アンケート調査も合わせて行った。

### 第3章 「美術情報センター ヨコハマトリエンナーレ2014関連特別展示『焚書』—禁じられた書物と文化財—」について

#### 1 展示テーマとしての「焚書」

今回は、横浜美術館で開催された「ヨコハマトリエンナーレ2014 華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」に関連したテーマで資料展示を行うことになった。会期はヨコハマトリエンナーレのオープンに合わせ、2014年8月1日(金)から11月30日(日)まで<sup>[12]</sup>とした。展示内容はこれまでの「展覧会補完展示」の場合と同様に出品作家やトリエンナーレの出版物を扱うという選択肢もあったが、従来とは全く異なるアプローチによる展示を試みることにし、企画に取り組んだ。

#### 1) 「華氏451」と森村泰昌氏の「焚書」

展覧会タイトルの「華氏451の芸術」とは、レイ・ブラッドベリ（Ray Bradbury、1920-2012）による小説『華氏451度』に由来している。これは書物を摘発して焼き払う「焚書官」を主人公とした物語である。そこに描かれているのは「知性」が否定される社会であり、「知性」を象徴する書物は憎悪の対象として焼かれていく。

「本は、となりの家の装弾された銃みたいなものだ」<sup>[13]</sup>。

物語の中で「焚書」は、焚書官であった主人公が書物と共に焼かれる人を目の当たりにして、自らも「知の本質を必要としている」ことに目覚めるための、決定的な転機となっている。

横浜トリエンナーレ2014の「タイトルとコンセプト」<sup>[14]</sup>について、アーティストリック・ディレクターである森村泰昌氏（1951年生まれ）は、この作品に触れて次のように述べている。

いわゆる焚書がテーマの小説で、本を読むことも持つことも禁じられた近未来社会が舞台となっている。〔中略〕物語の後半、「本になる人々」<sup>[15]</sup>の集団「ママ」というものが登場する。〔中略〕「本になる人々」は本を禁止する社会からの亡命者達であり、また上述のように本を非物質的な記憶に置き換えようとしているため、その存在と行為の両側面において、現実社会の表舞台には決して現れることのない、不在の人々となる（＝生きている痕跡をこの世から消滅させた「忘却の人々」たらざるをえなくなる）。ところがこの「忘却の人々」にこそ、膨大な本の記憶がたまり込んでいくというのが、ブラッドベリの小説がもたらす、「忘却」に関する重い教訓なのである。

〔中略〕世界（宇宙）は、そのほとんどが「忘却」のブラックホール（あるいは、広大で奥深い海）によって満たされている。それに比べれば、記憶世界など「忘却の海」に浮かぶちっぽけな島にすぎない。

森村氏は、焚書官に追われて自ら書物になろうとした人々を「忘却の人々」と名付ける。彼らこそは「記憶世界にカウントされる値打ちもないと判断された無数の記憶されざる記憶」<sup>[16]</sup>という、森村氏にとっての展覧会のメインモチーフであり、焚書の炎は、普段は見えないその影を照らし出す光源なのである。展覧会場では大型図書の作品《Moe Nai Ko To Ba》（森村泰昌編、2014年制作）が、説教壇を思わせる階段付きの高い朗読台上に置かれ、その先に十字架を象った彫刻《ビッグ・ダブル・クロス》（Edward & Nancy Reddin Kienholz、1987-1989年制作）が配置された。

森村氏は、展覧会の最終日2014年11月3日に、壇上でそれぞれのテキストの言語でこの「本」を誦読させた後、夕刻に美術館の正面広場に持ち出し、「忘却の海」に見立てた噴水池の中でガスバーナーを使って焼くというパフォーマンス（「消滅のためのラストショー Moe Nai Ko ToBa を燃やす」<sup>[17]</sup>）を行った。尊崇の対象であった書物を焼き払うことによって、森村氏は「記憶されざる記憶」、「失われていくすべてのもの」<sup>[18]</sup>に光を当てようとしたのではないか。

ブラッドベリの『華氏451度』と、森村氏の展覧会コンセプト及びパフォーマンスにみる焚書は以上の通りであるが、果たして現実に起きた焚書は、何を目的として、誰によって行われてきたのだろうか。今回の資料展示では物語としてではなく、歴史上実際に行われた「焚書」とは何かを考える内容で行おうと考えた。

「図書室」で「焚書」を展示テーマとして取り上げることについては、不快に感じる利用者がいるのではないかという危惧があった。現在の日本では焚書は表面上存在しないが、図書館が特定の資料を排斥するという行為は、今なお問題となっている。

「図書館の自由に関する宣言」では、「正当な理由がないかぎり、ある種の資料を特別扱いしたり、資料の内容に手を加えたり、書架から撤去したり、廃棄したりはしない」<sup>[19]</sup>としている。

この宣言は、図書館が第二次世界大戦前より日本国民に対する「思想善導」機関としての役割を担い、「国民の知る自由を妨げる役割さえ果たしてきた」ことへの反省<sup>[20]</sup>から、図書館法（1950年制定）では明確にされなかった図書館の使命を確認すべく、全国図書館大会の決議（1954年）として採択されたものである<sup>[21]</sup>。

しかし、船橋市西図書館蔵書廃棄事件（2001年）<sup>[22]</sup>や、近年では松江市教育委員会が漫画『はだし

のゲン』(中沢啓治著)の利用制限を市立小中学校に求めた事例(2012年)など、図書館においても人々の表現の自由や知る自由を妨げる事件が起きている。

米国図書館協会(ALA: American Library Association)によれば、「検閲」とは「排他的プロセス」であり、「ある個人または機関が、特定の思想・描写を不快と見なし、それへのアクセスを望まないという理由から思想・描写や情報へのアクセスを拒否し、或いは思想・描写や情報を抑圧する場合」<sup>[23]</sup>としている。

焚書は図書館のそうした使命に正面から対立する行為であるが、それを理由にテーマから排除したのでは本分にもとることになる。図書館にはいかなる資料や情報も中立的立場で収集・保存し、利用者や後世に伝えていくことが求められる。このような観点からも、当センターにおいて「焚書」を展示テーマとして扱い、歴史的事実として振り返ることに意義があるのではないだろうか。

## 2) 「焚書」とは何か

「焚書」展を立案するに当たって、まず「焚書」という言葉が持つ意味から出発した。字義通りにみれば「本を焼く」という意味であるが、辞書をひもといてみると、例えば次のように記されている。

政治権力による思想・言論統制策の一つで、書物にもられた思想を禁圧し、その流通、伝播を防止するために、公開の場で当該の書物を焼き捨てる行為、儀式〔後略〕

(『大百科事典』13巻、平凡社、1985年、p.361)

このように一般的に「焚書」といえば、権力者による思想弾圧の手段とみなされる。「焚」という漢字の意味には、「やく」、「たく」、「もやす」という意味のほか、「ひあぶり」、「焚刑」、「焚殺」という意味もある<sup>[24]</sup>。即ち「焚書」とは、単に書物を焼くことの他に、衆人環視の中で人を焼き殺す「焚刑」の対象を書物へ置き換えた行為をも意味する。

また、「焚書」を包括する上位の範疇として「禁書」がある。そこで「禁書」の事例も合わせて調査対象とした。

歴史上有名な焚書による弾圧としては、始皇帝による焚書坑儒に触れた李贄<sup>りし</sup>の筆禍事件、乾隆帝による焚書、ナチスドイツによる焚書などの事例が挙げられる<sup>[25]</sup>。当センターの蔵書体系は美術書が中心であるため、焚書坑儒等の歴史資料や、出版の自由と規制に関する主題<sup>[26]</sup>の資料が乏しい。そうした事情からも、弾圧としての焚書だけではなく、焚書に類するさまざまな事例へと調査範囲を広げる必要があった。

## 3) 焚書をこえて

「焚書」を「書物の破壊行為」として見れば、美術品を含めた「文化財」の破壊についても焚書と類似した背景、もしくは動機を持つと考えられるのではないだろうか。そしてまた破壊の手段も、単に物理的な行為ばかりではなく、先述のトリエンナーレ最終日イベントの「尊崇の対象」から引きずり降ろす行為のように様々な次元が有り得るのではないか。こうした視点から、「対象」を「書物と文化財」へと広げ、手段を「焚書」だけでなく幅広く「毀損」と捉えることとした。「書物と文化財の毀損」というキーワードを設定し、当センター所蔵資料の中から様々な時代や地域の事例を調査し

た結果を示す（表3 P.49参照）。項目は次の通りである。

「書物と文化財の毀損」事例一覧凡例

- ・ 歴史事象 : 当該資料の事例が属する歴史上の大きなカテゴリー
- ・ 紹介事例 : 当該資料が指示する歴史事例
- ・ 年代 : 当該事例の年代（可能な範囲で記述）
- ・ 当該資料番号 : 表4、表5、表6に付された資料番号を参照。
- ・ 主体 : 毀損の主体。個人、団体、私的団体（私的に組織された団体）、公的権力（王権、国家権力、教会権力など）、公的機関（教育機関、行政機関など）
- ・ 対象 : 毀損の対象となったもの。書物（文書、書簡等を含む）、文化財（美術品、建造物、遺跡など）
- ・ 方法 : 毀損の方法と手段。（焼却、火災、発禁、損壊〔塗りつぶす、ページを破り取るなども含む〕、誹謗中傷、発表禁止、検閲、隠匿（隠滅）、隠蔽、その他
- ・ 公開/非公開 : 可能な範囲で簡潔に記した。行為の現場の公開・非公開
- ・ 目的 : 毀損行為の目的・意図（可能な範囲で簡潔に記述）

海外の事例では、東ローマ帝国における聖像禁止令、ルネサンス期フィレンツェにおける神権政治、マルティン・ルターによる宗教改革とその余波、ナチスドイツの文化言論統制と弾圧、スペイン内戦における聖像破壊、19世紀後半から20世紀にかけての欧米における文学作品の発行禁止措置、文化大革命、アフガニスタンのスンニ派過激組織タリバーンによる偶像破壊などの資料を見出すことができた。

日本の事例からは、「神仏判然令」と廃仏毀釈運動、日本の敗戦に伴い教育現場にまで及んだ戦争責任追及の波、占領下の日本における「墨塗り教科書」、戦後日本における文化財焼亡、行政と「母の会」による悪書追放運動、昭和から明治にかけての文学作品の発行禁止処分、芸術活動としての焚書、今日の日本における図書館蔵書の損壊、美術展における作品の一部被覆などの資料を探し出した。

取り上げた事例にみる毀損を実施する「主体」は、国家や権力者に限らず、個人や私的な集団も含まれており、方法や目的も多様である。

「焚書」を「書物と文化財の毀損」という視野にまで拡大することにより、展示に十分な量の図版付資料を用意することができた。美術専門図書室として美術や写真の豊富な図版を掲載した資料を多数所蔵している当センターのイメージバンクとしての特徴が発揮されたと言える。

このように書物や文化財の毀損がさまざまな時代、地域で行われてきたが、一方で、そうした動きに對抗して書物や文化財を守ろうとする活動の記録や同時代の抵抗運動、また毀損の歴史を批判的視点から後世に伝え、忘却から守ろうとする取り組みを示す資料も探し出し、毀損の歴史と合わせて展示することにした。これは一方的な見方に偏ることなく史実をできる限り広い視野で伝える上で不可欠であり、そうした資料を書庫に見出せたことは幸いであった。

以上の観点から、この展示では理由を問わず人為的な「書物と文化財の毀損」全般を扱うこととし、様々な時代を扱った多様な資料を通して、いつ、誰が、何を、何のために、どのように毀損したのかを来館者に考えていただく展示を構成することとした。

展示のタイトルについては、トリエンナーレの副題との関連性を強調するため、「焚書」の言葉を象

徹的に用い、「美術情報センター ヨコハマトリエンナーレ2014関連特別展示『焚書』—禁じられた書物と文化財—」とした。

## 2 資料論

### 1) 展示資料の選択基準

現在所蔵している資料の紹介が目的であるため、他館等からの借用や本展示のための新規購入はない。

表4の中から、貴重書やそれに準ずる資料を中心に、見た目に分かりやすく、内容的によく知られた史実の資料をピックアップするべく、次のような指針を設定した。

- A 当センターのコレクションの特色、多様性を示せること
- B 図版（美術品や写真など）を掲載し、展示対象として魅力的であること
- C 様々な地域、時代の事例を含むこと

### 2) 章立と柱となる資料

上記の選択基準からまず柱となる下記の資料を、続いて周辺資料を選定し、展示の章を設定した。時代と地域による分類に基づき、4章構成となった。

#### 第1章：宗教改革期の書物や聖像の破壊

宗教改革期にルターが教皇勅書を焼く図が掲載された“Historische Kronyck” (No.1：(表4 P.50 参照)の資料番号。以下同)、宗教改革期の偶像破壊を示す図版が掲載された“Der Deutsche Einblatt-Holzschnitt in der ersten-Hälfte des 16. Jahrhunderts.” (No.2)。

#### 第2章：第二次世界大戦前夜、ナチスドイツによる弾圧と文化人の抵抗

ナチスドイツによる「退廃芸術展」他の写真が収められた“Tag der Deutschen Kunst” (No.4)。

#### 第3章：占領下の日本で教科書や指導書に下されたさまざまな処分

墨塗り教科書に関連して、「中村文庫」(No.11-18)。

#### 第4章：戦後から現代の日本における書物と文化財の毀損

『アサヒグラフ』より、戦後日本の文化財焼失 (No.20) と悪書追放運動 (No.21)。

### 3) ケース内展示資料目録 (出品リスト)

資料目録については「美術情報センター ヨコハマトリエンナーレ2014関連特別展示「焚書」—禁じられた書物と文化財—ケース展示資料目録」(表4)にまとめた。前期10点 (fig.1, 2)、後期17点 (fig.3, 4)、全21点 (前期後期共通資料6点)を出品した。

### 4) 各章概要と資料解題

以下に、各章の概要と資料解題を示す。資料解題は執筆のため、今回集中的に調査研究を行った。



以下は本稿のため展示に掲出した解説シートの文章に若干加筆したものである。執筆に当たっては、当該展示資料の他、独自に複数の資料を参照した<sup>[27]</sup>。



(fig.1)  
資料展示「『禁書』—禁じられた書物と文化財—」  
(前期) (展示ケース1※) ※東側のケース



(fig.2)  
資料展示「『禁書』—禁じられた書物と文化財—」  
(前期) (展示ケース2※) ※西側のケース



(fig.3)  
資料展示「『禁書』—禁じられた書物と文化財—」  
(後期) (展示ケース1)



(fig.4)  
資料展示「『禁書』—禁じられた書物と文化財—」  
(後期) (展示ケース2)

## 「第1章：宗教改革期の書物や聖像の破壊」<sup>[28]</sup> (資料No.1-3)

### 概要

16世紀前半はまさに宗教改革の時代である。ドイツやスイスなどの都市では偶像破壊が起こり、改革派と教皇庁のプロパガンダ戦が激しく行われていた。マテウス・メリアン (1593-1650) によるマルティン・ルターが教皇勅書を焼き捨てる場面を描いた銅版画、エアハルト・シェーン (1500-1542頃) による、人々が聖像を破壊する場面を描いた木版画 (図版) 《憐れにも迫害される偶像と聖像の悲哀の物語、かくも比類なき審判と罰によせて》、また、同じ作家による、ルターと教皇の対立をテーマとした寓意画《賢者の家と愚者の家、マタイ伝7章より》(同上) を展示した。

### No.1 《教会法を焼き捨てるルター博士》(“Historische Kronyck (史的年代記)”) (fig.5) (解説シート)

ドイツの歴史家・翻訳家・著述家ゴットフリートが編纂した『史的年代記<sup>[29]</sup>』は1630年にフランクフルトで



Leo. Dit geschiedde op den 10. van December. Daerby liet hij een Scheffel uit. Hier op breken eenige Doctoren D. Luther auffderlichliçh booz haer loonen / en soeken  
(fig.5)  
《教会法を焼き捨てるルター博士》

出版され、1660年にオランダ語に翻訳された。オランダ語版『史的年代記』は、江戸時代の蘭学者に広く読まれ、西洋史、特にキリスト教史の知識をもたらした。当センターの『史的年代記』は、ライデンで出版されたオランダ語版の第二版である<sup>[30]</sup>。標題紙(fig.6)には、天地創造から1576年までのヨーロッパ史を記したものであることと、ドイツにおける宗教改革の歴史を増補した上で、1697年9月20日にレイスウエイク条約(Vrede van Rijswijk)が締結されるまでの歴史を著したことが記述されている。

図の銅版画はルターの宗教改革の一場面を描いたものである。1520年10月10日、ローマ教皇レオ10世はマルティン・ルターに対し、「九十五箇条の提題」を撤回しない場合には破門に処すとの勅書「破門脅迫の大教勅」を発した。撤回期限の1520年12月10日、ルターは公衆の面前で教会法、勅書を焼き払った。翌1521年1月3日、ルターは教会を破門となった。

本書の挿絵を手がけた銅版画家マテウス・メリアンは、1630年に印刷されたルター訳『旧新訳聖書』の挿絵も描いている。



(fig.6)  
『Historische Kronyck(史的年代記)』  
標題紙

## No.2 《憐れにも迫害される偶像と聖像の悲哀の物語、かくも比類なき審判と罰によせて》“Der Deutsche Einblatt-Holzschnitt in der ersten-Hälfte des 16. Jahrhunderts. 26. Lfg (16世紀前半のドイツ一枚刷り木版画カタログ、第26巻)” (fig.7) (解説シート)

ニュルンベルクの画家、版画家エアハルト・シェーンによる木版画。シェーンは、アルブレヒト・デューラーの弟子である。

16世紀ドイツでは、木版画とゲーテンベルクの活版印刷術を用いたテキストを組み合わせた「摺り物」が盛んに出版された。宗教改革の勃興期、既存の教会を批判する「摺り物」も数多く作られ民衆の間に広まった。

この「摺り物」の複製は、ドイツの美術史家マックス・ガイスペルクが、デューラーやルターの活躍した時代の「一枚刷り木版画」(Einblatt-Holzschnitt) 約1,600点を、原寸大で複製印刷(ファクシミリ印刷)し、全40巻の複製版画集成として出版したものの1葉である。

《憐れにも迫害される偶像と聖像の悲哀の物語、かくも比類なき審判と罰によせて》は、聖像崇拜者が一夜にして破壊者に変貌した時代の人心の荒廃を告発する版画と韻文詩である。画エアハルト・シェーン面左側には、教会から聖像や十字架上のキリスト像を撤去する者、右下には像を火にくべる者がいる。右上には目から角材が突き出た指導者がいるが、これは聖書の一節、「なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか」(伝7章5節)に則して描かれた。



(fig.7)  
エアハルト・シェーン  
《憐れにも迫害される偶像と聖像の悲哀の物語、かくも比類なき審判と罰によせて》

No.3 《賢者の家と愚者の家、マタイ伝7章より》“Der Deutsche Einblatt-Holzschnitt in der ersten-Hälfte des 16. Jahrhunderts. 31. Lfg (16世紀前半のドイツ一枚刷り木版画カタログ、第31巻)” (fig.8) (解説シート)

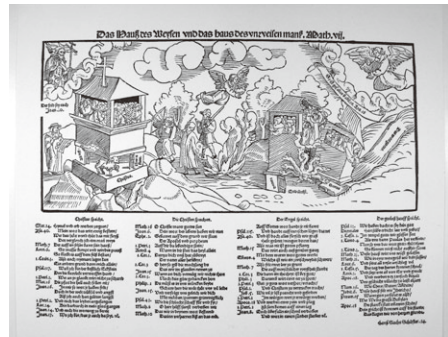
上部にエアハルト・シェーン作の木版画、下部にハンス・ザックス (1494-1576) による四列の詩が印刷されている。ザックスはニュルンベルクの靴屋の親方で、マイスター・ジンガー (名歌手) と呼ばれていた。

ルター破門 (1520年) の4年後に制作されたこの版画は、聖書の「家と土台」のたとえを元にしてている。

「わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なうものはみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家にうちつけたが、それでも倒れませんでした。」(中略)「わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。」(マタイ伝7章24-27節)

「わたしのことば」を聖書の文言とすれば、賢者とは福音主義に立つルター派を、愚者はそれを軽視する教皇の勢力を指していると解釈できる。

木版画の左側には岩上の賢者の家、右側には洪水に流される愚者の家。中央には賢者を攻撃しようとする愚者。左下では枢機卿が、教皇勅書を手に破門を警告している。



(fig.8)  
エアハルト・シェーン  
《賢者の家と愚者の家、マタイ伝7章より》

「第2章：第二次世界大戦前夜、ナチスドイツによる弾圧と文化人の抵抗」<sup>[31]</sup> (No.4-10)

概要

この章は、ナチスドイツの公式記録写真集“Tag der Deutschen Kunst (ドイツ芸術の日)”を中心に構成する。“Tag der Deutschen Kunst”は、「ドイツ芸術の日」(1937年7月18日)にミュンヘンで行われた3つの式典の記念アルバムで、テキストと100枚のステレオ写真、ステレオ写真用眼鏡(ビューアー)をセットしたものである。「大ドイツ芸術展」、「退廃芸術展」(1937年7月19日開幕)、「記念パレード ドイツ文化の2000年」(1937年7月18日)の光景が収められている。

「退廃芸術展」は、近代のBildersturm(偶像破壊)の類例として挙げる事ができる。ナチスドイツは、「非ドイツ的」美術を美術館や画廊など公的な場から撤去・接収し、それらを誹謗中傷することを目的として、退廃芸術展をドイツ各都市で巡回開催した。また多くの美術品を焼却した。

この資料を中心に、退廃芸術展を扱った戦後の資料から、ベルリンやミュンヘンにおける焚書の記録写真の図版を複製拡大したものを、出典を明記して併置した。また、弾圧だけでなく同時代の抵抗運動や戦後の批判的検証と歴史的保存活動を示す資料として、ジゼル・フロイントによる《第一回文化防衛のための国際作家会議》の写真(No.8)や、退廃芸術展の再現展カタログの図版(No.9)、ミシャ・ウルマンがベルリンの焚書の跡地に制作したモニュメント《図書館》の写真(No.7)、そして、2014年の日本におけるアンネの日記破損事件との関連を示す意味で、事件の新聞記事とともに1978年に銀座松坂屋で開催された『アンネの日記展』図録(No.10)も展示した。



#### No.4 “Tag der Deutschen Kunst (ドイツ芸術の日)” (fig.9) (解説シート)

『ドイツ芸術の日』は、ナチ党帝国報道カメラマンのハインリヒ・ホフマン撮影の写真と、アルベルト・ブルクハルト・ミュラーによるテキストによって構成された、ミュンヘンにおける「ドイツ芸術の日」の公式記録写真集である。表紙には、美術の象徴パラス・アテナとナチスドイツの国章があしらわれている。

写真集には、ミュンヘン市内における記念行列と式典、ナチスが推奨する美術作品を集めた「大ドイツ芸術展」と、ナチスが弾劾し、全国の美術館から押収した前衛美術を集めた「退廃芸術展」の光景(fig.10)が100枚のステレオ写真で収められている。本の見返し部分に、二枚続きのステレオ写真と専用の眼鏡(ビューアー)が収納されている。

1937年7月18日、ミュンヘンを訪れたヒトラーはハウス・デア・クンスト(芸術の家)の落成式に出席し、「大ドイツ芸術展」の開催を宣言した。



(fig.9)  
“Tag der Deutschen Kunst (ドイツ芸術の日)”



(fig.10)  
“Tag der Deutschen Kunst” より《退廃芸術展の光景》

#### No.7 ミシャ・ウルマン (1939年生まれ)《図書館》『美術手帖』(解説シート)

イスラエル人彫刻家ミシャ・ウルマンは、ナチスが焚書を行った場所、ベルリンのベーベルプラッツに記念碑を制作した。地表に設けられたガラス窓から地下を覗くと、周囲を本棚で囲まれた部屋が見えるが、そこに本は一冊もない。

#### No.8 《第一回文化防衛のための国際作家会議、メゾン・ド・ラ・ミュチュアリテにて、パリ、1935年》“Gisèle Freund : Photographien (ジゼル・フロイント写真集)” (解説シート)

ナチスによる焚書から2年後の1935年6月21日、パリにおいてアンドレ・マルローをはじめ各国の作家や知識人が「第一回文化防衛のための国際作家会議」を開催し、ファシズムの攻撃から文化を守るよう訴えた。三千人を超えた出席者の中には、ハインリヒ・マン、ブレヒト、アンナ・ゼーガースら、ナチスに自著を焼却された作家たちもいた。

撮影者のフロイントは、ナチスの迫害を逃れて1933年にフランスへ亡命した女性写真家である。

#### No.9 《退廃芸術展の第3展示室壁面の再現図》“Degenerate Art : the fate of the avant-garde in Nazi Germany(退廃芸術：ナチスドイツにおける前衛芸術の運命)” [展覧会カタログ] (解説シート)

1991年、アメリカで「退廃芸術展」を再現する展覧会が開催された。この展覧会はアメリカとドイツを巡回した。

### 「第3章：占領下の日本で教科書や指導書に下されたさまざまな処分」<sup>[32]</sup>

#### 中村文庫について (No.11-No.18) (解説シート)

中村文庫は、中村亨（元鎌倉女子大学教授、1914-1993）が、1936年に神奈川県師範学校訓導（現在の教諭）として教職に就いて以来、生涯にわたり収集した美術教育に関する資料のコレクションである。明治から平成初期にかけて発行された美術の教科書1,297点と、美術教育関連文献664点から成る。これらは1988年に本人より横浜美術館に寄贈され、1992年、美術図書室（現美術情報センター）で整理を終えたものである。

今回の展示では、第二次世界大戦終了直後、連合国軍占領下に師範学校の教師たちが自ら焼却処分しようとした指導書（現場教師用の手引き書）や、文部省の通牒に従って「省略削除」等の指示を書き入れた教科書などを紹介する。

#### 焼却処分を密かに逃れた指導書（解説シート）No.11『尋常小學新定畫帖』、No.12『圖画教授之理論及實際』（fig.11）、No.13『實驗圖畫教授法』

1945年10月（『日本美術教育の変遷：教科書・文献による体系』（中村亨編著）によれば8月末）、神奈川県師範学校附属小学校に勤務していた中村は、上司の命により他の職員とともに校庭で図書室の図書を焼却した。その際『尋常小學新定畫帖』、『圖画教授之理論及實際』、『實驗圖畫教授法』を密かに自宅へ持ち帰った。

1945年10月22日、連合国軍最高司令部指令「日本教育制度ニ対スル管理対策」（SCAPIN-178：Administration of the educational system of Japan）が発せられ、「アラユル教育機関ノ関係者ハ左ノ方針ニ基キ取り調べラレソノ結果ニ従ヒ夫々留任、退職、復職、任命、再教育又ハ転職セラルベキコト」とし、軍国主義、国家主義とされた教師は罷免処分させられるべきことが明らかになった。教育現場での早急な焼却命令は、こうした指令を背景に、日本側が自ら判断したものと考えられる。



(fig.11)  
『圖画教授之理論及實際』

#### 「中村文庫」における朱入りの教科書について（解説シート）

1945年9月20日、文部省は「終戦ニ伴フ教科用図書取扱方ニ関スル件」を通牒<sup>[33]</sup>し、「省略削除又ハ取扱上注意スベキ教材ノ基準」を明らかにした。これに基づき、教師は教科書の削除すべき部分を教室で指示し、生徒に墨で塗りつぶさせた。これがいわゆる「墨塗り教科書」である。

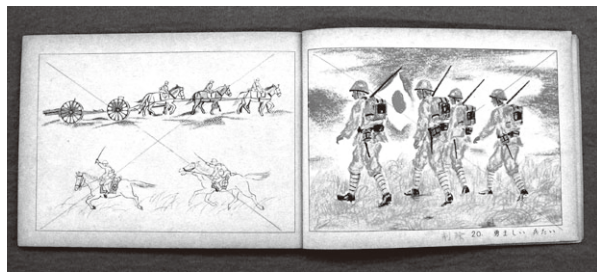
展示資料は、中村が後の研究を考慮し、本来墨で塗りつぶすべき部分に朱書きと朱線を入れるにとどめ「原画を知ることができるよう」にしたものである。

#### No.14 《20. 勇ましい兵たい》『エノホン 四』（fig.12）

国民学校初等科（小学校）用教科書、「削除」の朱入り。

No.15 「20. 勇ましい 兵たい 思想的表現 一時限」『エノホン 四 教師用』

資料No.14 《20. 勇ましい 兵たい》の指導要領。



(fig.12)  
『エノホン四』《20.勇ましい 兵たい》

No.16 《8. 防空演習》『初等科圖畫 二 女子用』

国民学校初等科(小学校)用教科書、「削除」の朱入り。

No.17 《28. 隣り組》『初等科圖畫 二 男子用』

国民学校初等科(小学校)用教科書、「取扱注意」の朱入り。

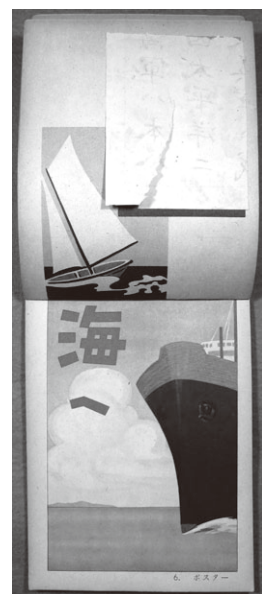
No.18 《6. ポスター (海のまもり)》『初等科圖畫 三 男子用』

国民学校初等科(小学校)用教科書、「一部削除」の朱入り (fig.13)。

削除する方法としては墨を塗る方法がよく知られているが、ページとページを糊で張り合わせる方法や、別の紙を上から貼り付ける方法もある (fig.14)。本来は図や文を見えなくすることが目的であるため、削除該当箇所に朱線を入れただけの教科書は貴重である。



(fig.13)  
『初等科圖畫 三 男子用』



(fig.14)  
『初等科圖畫 三 男子用』

「第4章：戦後から現代の日本における書物と文化財の毀損」<sup>[34]</sup>

《6. ポスター (海のまもり)》朱入り

《6. ポスター(海のまもり)》上から紙を貼り、絵を隠した例

### 概要

日本のグラビア雑誌『アサヒグラフ』より、金閣寺焼亡の記事、悪書追放運動の記事を展示した。占領下から占領後にかけての書物、文化財のおかれた状況を伝える生々しい資料である。これらの資料には解説を付さず、キャプションのみ掲出した。

No.20 「鹿苑寺金閣炎上 焼亡つづく 国宝文化財」『アサヒグラフ』

日本における有名な文化財焼失事件として、1949年1月26日に起きた法隆寺金堂壁画焼失が挙げられる。

戦時中から終戦直後にかけて、文化財の保護・保存は疎かとなっていた<sup>[35]</sup>。特に1949年から1950年にかけては、国宝の火災が相次ぎ、「文化財保護法」（1950年5月30日）が制定される契機となった。

記事の中では、金閣寺のほか1949年から1950年にかけて失火や放火によって焼損した文化財として、法隆寺金堂、長楽寺、諏訪神社、松山城筒井門、松前城などが取り上げられている。

#### No.21 特集記事「閉出された家庭の悪書」『アサヒグラフ』

1945年9月10日、連合国軍最高司令部指令により「言論およびプレスに関する覚書」（SCAPIN-16：Freedom of press and speech）が発せられ出版の自由が認められると、文芸や言論に関する本の他、「カストリ雑誌<sup>[36]</sup>」と呼ばれる大衆娯楽雑誌が盛んに出版されるようになった。

写真からは「カストリ雑誌」とされた『夫婦生活』（1949年創刊<sup>[37]</sup>）、『モダン夫婦読本』（創刊年不明）の表紙がみえる。また文中からは『夫婦生活』、『獵奇』（1946年創刊<sup>[38]</sup>）『奇譚』（創刊年不明<sup>[39]</sup>）などの誌名を確認できる。『獵奇』2号（1946年12月発行）については、戦後初の猥褻文書として警察に摘発された<sup>[40]</sup>。

### 3 展示論

「焚書展」では、平成25年度までのケース内展示にはなかった新たな展示方法を企画、実施した。以下に詳細を述べる。

#### 1) 資料の展示について

机上の実物シミュレーションに先立ち、今回初めてケースの展示面と資料の外寸を計測して縮尺1/5の模型を作り、いくつかの展示パターンを試作しながら章の輪郭を決めていった。ケース内への展示の際は、資料は図版のページを開いた状態で、章ごとにまとめて展示した。

また、資料はひとつひとつ形状・形態が異なるため、それに合わせて展示方法を考案した。例えば“Tag der Deutschen Kunst”（fig.9, No.4）は、表紙に描かれたナチスドイツの国章が見えるようにするため、資料を透明のアクリル製書見台に載せ、書見台の下にミラーアクリルを敷いた。また、当該資料の特徴として、立体写真100枚と専用の立体眼鏡（ビューアー）が付属している。資料裏の見返し部分の板紙に作られたポケットに束になって収められていた写真（全100枚のうちの77枚）を、「頽廢芸術展」、「大ドイツ芸術展」、「記念パレード」の写真に分けて配置した。①「退廢芸術展」の写真は立体眼鏡に装着し、ケースの上から眼鏡を覗けるように展示した。②「大ドイツ芸術展」および「パレード」の写真は、ミラーアクリルの左右1列に5、6枚ずつ並べた（後期は1列）。残りの写真は束にした状態で重ねて配置した。なお資料保護のため、1週間おきに開くページを変更し、並べる写真を入れ替えた。

#### 2) 資料の支持方法について

新たな物品の購入は行わず、館内にあるもののみを工夫して用いた。ページを開くことによる資料の浮き上がりについては、ガラス製の卦算を使用するか、あるいは幅2.5cmのポリエステルテープを用いて、資料の両端または片端を押さえた。左右のページに段差が生じる資料については、美術品梱包に用いる薄葉紙を折り畳んだものを緩衝剤として敷いた。以下は資料の形状に応じて特別に手作りした。



## A 大型の書見台

大型の洋書“Historische Kronyck”については、重量に耐える書見台が無かったため手作りした。およそ95°の角度で資料を開くことができる書見台が必要であったため、美術品梱包用の複両面段ボールで骨組みを作成し、資料と接する面を資料保存用品の中性ボードで覆った書見台を制作した。さらに毛氈を縫合したカバーで覆って完成させた (fig.15)。



(fig.15)  
“Historische Kronyck”は手製書見台に置き、キャプション、解説を設置した。

## B 眼鏡台 (fig.16)

“Tag der Deutschen Kunst”に付属しているステレオ写真用眼鏡 (ビューア) を展示ケースの上から覗くことができるように、テーブル状の小台を製作した。ケースの天板近くまでの高さがある台が必要であったため、木製展示台 (20cm×20cm×5cm) の側面を底辺として配置した。眼鏡を置く面には、天板代わりに10.5cm×22.5cm×0.7cmのスチレンボードの板を貼った。そのうえで、全面に毛氈を貼ってカバーをした。高さのある台なので、ポリエステルテープにピンを刺してケースの展示面に固定して地震等による転倒を防止した。



(fig.16)  
眼鏡台

## 3) キャプション (図版情報・書誌情報) について

キャプションには書誌情報のほか、今回クローズアップしている図版こそが主役であるので、通常蔵書展示では図書資料には書誌情報を記載したキャプションを付していたが、今回は各資料の特定の図版や記事に焦点を当てた展示であるため、書誌情報に加えて図版情報を可能な限り付すこととした。

レイアウトに際しては一枚のキャプションの上部に図版情報、その下に書誌情報を配置した。一般的な文書作成ソフトウェア (マイクロソフト社のWord) で製作し、印刷にはコピー用紙を用いた。

図版情報の項目については、図版名、作家名と生没年、技法、テキストを表記した。洋書の図版名は和訳し、外国人作家名はカタカナ表記にした。作家の生没年、技法は可能な限り調べた。いずれも図書館では通常行わない作業である。

書誌情報については、今回から新たに請求記号と資料種別 (図書、展覧会カタログ、雑誌) に合わせた項目を記載し、「項目名」についてもその都度記した。補足する場合には〔 〕内に標記した。また、洋書名には和訳を併記した。通常図書館では洋書名や著者名を翻訳することはないが、展示であれば、たとえ一部分であれ和訳を加えることで、普段外国語を読まない人々も洋書にアクセスすることが可能となるため、展示解説上の利便を考慮した。その他、請求記号は、展示後に資料を探しやすくするための工夫である。このように美術展とは異なる「図書室ならではの展示」を心がけた。資料種別毎の記載項目の詳細は以下のとおりである。

- A 図書 書名（必要に応じて和訳）、著者名、出版社、出版年、ページ、寄贈者名、文庫名、請求記号
- B 展覧会カタログ 書名（必要に応じて和訳）、展覧会カタログであることを補記、著者名、出版社、出版年、開催館、会期、出版年、ページ、寄贈者名、請求記号
- C 雑誌 書名、巻号、出版社、出版年月日、ページ、寄贈者名

#### 4) 導入パネル

タイトルを大書きし、チラシ序文に準じた内容の導入パネルを設置した。

#### 5) 資料解題（解説シート）

上記2 4)のように主要な図版や、資料、資料群には500字程度の解説を付した。

設置場所は、個別の図版に対する解説の場合には、キャプションに近接させ（fig.15）、資料群の解説の場合は順路に沿って当該資料群の冒頭に置いた。文字サイズはガラスケース上からの見やすさを考慮し14ptとした。

#### 6) 展示替え

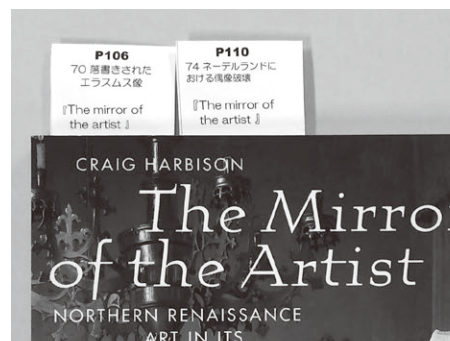
より多くの資料を展示するため、9月30日を境に約半数の資料の入れ替えを行い、全期を通じて21点を出品した。どの資料がいつ出ているかは、「ケース展示資料目録」（表4 P.50参照）の中で記号により表示した。

前期展示が終わった後も、貴重書等を除く一部の資料は関連資料コーナー（後述）に追加することにより、手に取ってご覧いただけるようにした。

#### 7) 「焚書展」関連資料コーナーの設置

展示資料の鑑賞だけでなく、この展示を契機として将来的な資料利用を促進することができるように、展示ケース付近の閲覧席上に関連資料コーナーを設置した。関連資料コーナーでは、主に展示ケースでは紹介しきれない事例や、展示ケース内の資料を補足説明する資料を配架した（表6 P.54参照）。資料には資料名（雑誌の場合は巻号も表記）、ページ数、解題を記載した付箋（fig.17）を挟んだ。この他、会期中に報道された「書物と文化財の毀損」に関する新聞記事をファイリングし、「スクラップファイル（新聞記事）「焚書」—禁じられた書物と文化財—参考資料」として、関連資料コーナーに設置した。

なお、本資料コーナーとは別に、今期トリエンナーレ出品作家や過去のトリエンナーレに関する資料を、開架室専用書架の「企画展資料コーナー」に配架した<sup>[41]</sup>。



(fig.17) 資料名、ページ数、解題を記載した付箋

## 8) 資料目録の作成と配布

今回初めて出品資料と関連資料の目録を作成した。「ケース展示資料目録」(表4 P.50参照)と「関連資料コーナー資料目録」(表5 P.52参照)を合わせた「美術情報センター ヨコハマトリエンナーレ 2014関連特別展示 「焚書」—禁じられた書物と文化財—出品目録」を発行した。

章立て順に資料を並べた2種類の目録をホチキスで綴じ、表紙と目次を付け、B4サイズ裏表10ページの出品目録とした。

「ケース展示資料目録」では作家名、テキストともにキャプションにはない原文も併記し、資料サイズ(縦)をmm単位で計測し、より詳細な情報を得られるようにした。

「関連資料コーナー資料目録」は、展示の章立てにはない、「序章」、「ヨーロッパとアジアにおける文化財の毀損」の章を新たに追加した。このリストは展示期間中、会場で無料配布された。

## 4 広報・広聴活動

### 1) 広報

下記の広報媒体にて「焚書展」の周知を図った。

#### A チラシ

展示替えに合わせ、前期、後期 (fig.18, 19) の2種類のチラシを作成した。前期は片面印刷であったが、後期は両面印刷とした。配布先は、トリエンナーレ展覧会場である美術館内と新港ピア、当センター内、横浜市中央図書館とした。



(fig.18) 資料展示「『焚書』—禁じられた書物と文化財—」チラシ(後期/表)



(fig.19) 資料展示「『焚書』—禁じられた書物と文化財—」チラシ(後期/裏)

#### B 市政記者発表

2014年8月22日、今回初めて以下のタイトルで市政記者発表を行った<sup>[42]</sup>。

「ヨコハマトリエンナーレ 2014 関連特別展示/横浜美術館 美術情報センターにて開催中/「焚書」—禁じられた書物と文化財—2014年8月1日(金)—11月30日(日)」

#### C ウェブサイト

当館ウェブサイトの「新着情報」欄で資料展示を告知した。内容は、展示タイトル、概要、

期間、時間、場所、休室日、一部の展示資料の書誌情報と写真を掲載した。

#### D メールマガジン

当館メールマガジンにて告知を行った。

#### E SNS

当館のTwitter公式アカウントにより告知を行った。Twitterによる『東京新聞』ウェブ版記事からの引用も79件（2015年3月6日現在）見られた。

### 2) 取材

2014年9月7日、新聞記者の現場取材を受け、下記の通り掲載された。

小沢慧一「焚書：西区で資料展 言論統制歴史学ぶ」、『東京新聞』、2014年9月8日朝刊、18面（地域の情報 横浜）

### 3) アンケート

今回の初の試みとして、アンケート（後述）を実施した。

## 第4章 「『焚書』—禁じられた書物と文化財—」展のアンケート分析

平成27年8月28日から11月30日まで、閲覧室にある木製記載台にアンケート用紙と鉛筆、受箱を設置し、展示鑑賞者に任意に記入していただいた。前期8人、後期9人、合計17人から回答をいただいた。設問と回答は（表7 P.55参照）のとおり。

この展示を知ったきっかけについての設問では、ホームページ（電子媒体）を見た人が1人であったのに対し、チラシ・新聞記事（紙媒体）を見た人が6人であった。チラシの配布場所は今回主に3カ所（横浜市中央図書館、横浜美術館、新港ピア）だったが、配布場所を増やす必要があると思われる。また、東京新聞の取材を受け記事に取り上げていただいたことで効果があり、その新聞記事を見たとする回答者が2人あった。こうした広報媒体を通じて、もしくは知人からのすすめと回答した人は合わせて15人であった。アンケートの回答者のうち4分の3は本展示のために来室したと考えられる。また、展示を見た動機についての設問では、展示タイトルやテーマといった今回のケース内展示の企画そのものに関心を持っていた人が複数回答で22人と、この設問での全体の7割を占めた。ヨコハマトリエンナーレ2014に関連していることを理由に挙げた人は5人、ブラッドベリの小説を読んだという人は2人であった。本展示の広報に当たっては「ヨコハマトリエンナーレ2014関連特別展示」と銘打ったが、今回のアンケートで見る限りで、トリエンナーレという接点で興味を持つ人よりも、展示の企画自体に惹かれた人が多かったようである。

展示の構成についての設問では、資料の分量、内容、資料と資料のつながり、配置、タイトルと資料の関係についてそれぞれ問いを立てた。概ね「良い」という反応であった。その中のひとつにあった資料の分量が「少ない。もっと見たかった」という意見は、この展示に強く興味を持っていただけのことをうかがわせる。また、資料相互のつながりについては「共通のものを知ることができた」、タイトルと資料の関係性についての問いでは「いろいろな例が挙げられて面白い」「よく関連付けられていた」「関係性が分かりやすい」などの意見が中心であり、文化財の毀損について様々な資料を集め紹介するという展示の趣旨を概ね理解していただけたと考えられる。



キャプションや説明文の内容、長さ、表示を問う設問では、おおむね「良い」という意見だった。さらに詳しい解説を望む声も上がっていた。

この展示の中で面白かったものを問う設問で、「情報媒体としての図書」の視点に立つ回答として、退廃芸術展や悪書追放運動等をこの展示で初めて知ったという書き込みが複数あった。「物としての図書」に注目した回答としては、ナチスドイツの公式記録写真集『Tag der Deutschen Kunst（ドイツ芸術の日）』のステレオ写真についての反響が大きかった。「中村文庫」の戦後焼却処分を免れた指導書も挙げられていた。

記述式の設問の回答を見てみると、「前期、後期に分けるのはもったいない」、「出品目録に説明文も記載があればよい」、「パンフレットがあると良い」など、まとまった規模の展示を望む声や、図版や解説を含むカタログ的な配布物への希望が寄せられた。最も多かったのは、展示テーマとなった「書物や文化財の毀損」についての感想で、来館者の考えが自分の言葉で述べられていた。これらの感想を見ても、この展示が「焚書」をはじめとする文化財毀損の歴史や、文化や芸術をめぐる今日の状況との連関について、来館者に関心を持って考えていただく機会になったと言えるだろう。

## 第5章 他館の資料展示の事例

平成20～26年度の7年間に亘り試行と考察を重ね、当センターにおける資料展示は変化してきた。平成26年度の「焚書展」では、積極的に資料の内容に踏み込んだ解説を交えた構成と展示方法（解説シートの設置）という新たな試みを行い、アンケートで好評を得られた。しかし、「焚書展」の成果について客観的に振り返り、合わせてよりよい資料展示についての参考とするため、他館の事例を実地調査することにした。平成26年10月から12月にかけて美術図書館、公立図書館、公文書館、文学館などで開催された資料展示（所蔵資料の展示）15件の実地調査を行った（表8 P.56参照）。展示の形式としては①資料コーナー、②ケース内展示、③額装展示、④パネル展示の4つの形式が見られ、単独あるいは複数の形式を組み合わせる場合があった。

ここでは特に過去のネガティブな歴史遺産を展示テーマとしている点が当センターの「焚書展」に共通する例として、神奈川県立図書館の展示「戦時文庫」（以下「戦時文庫展」）を取り上げ、展示の構成、配慮されている点について検証する。

（表8、No.8）

タイトル：開館60周年記念展示 コレクション紹介シリーズ第3弾「戦時文庫」

会場：神奈川県立図書館 本館1階展示コーナー

会期：平成26年8月15日(金)～11月12日(水)

神奈川県立図書館には「戦時文庫」と名付けられた「特別コレクション」がある。昭和8年に改正された「図書館令」により全国の公立図書館に〈貸出文庫〉の設置が義務付けられ、これを受けて神奈川県では、昭和15年に県中央館の代用館として金沢文庫が〈貸出文庫〉を行うことになった。終戦後〈貸出文庫〉はGHQに接収されたり、焼失するなどしてその多くが失われたが、昭和44年、旧〈貸出文庫〉所収の図書資料1,570冊がまとめて金沢文庫の須弥壇台座の下から発見された。これらは昭和54年に神奈川県立図書館に移管され「戦時文庫」として保管されるようになった。資料のジャンルには戦記、戦史、軍事事情、伝記、海外事情、軍事読物、小説、紙芝居などがある<sup>[43]</sup>。今回調査した「戦時文庫展」は閲覧室とは別に独立

した専用の展示室を使用し、コの字型に連なる3つの壁面に沿って4台の覗き型ケースが配置され、その中に49点の図書資料が置かれていた。また、ケース背後と両脇の壁、通路を挟んだその対面の壁にはA2大のパネル23枚が掲出されていた。「戦時文庫展」において注目された主な工夫は以下のとおりである。

## 1 展示方法での工夫

### 1) パネル

大別すれば、①タイトル（「導入文」・「結びの文」含む）、②「戦時文庫」の解説、③各章・個別資料の解説（一部図版含む）、④図表類（年表、写真含む）の4種がある。④の図表類はテキスト中心の②を視覚的に補っており、特に旧く貸出文庫の戦後の行方を図示したパネルはこれらの図書資料が時代の変化により亡失の運命にあったことを雄弁に物語る。「年表にみる戦時文庫」と題されたパネルには「戦況・世の中の動き」や「流行語」も項目に挙げられ、来館者に「戦時文庫」の時代背景を想像させる。①の「結びの文」を出口に設置することで、来館者は展示内容を振り返りつつ展示趣旨をも理解できる。③は展示資料と共に見られるように資料上方（背後）の壁面に掲出されていた。

### 2) 各章のタイトル

全7章構成で、4つのケース（①～④）にはそれぞれ、①「拳国一致・尽忠報国・堅忍持久」、②「実践のための知恵」および「女子の心得と教養」、③「伝記」および「ノンフィクション」、④「ベストセラー」および「写真・絵画・漫画」というタイトルが付されていた。＜貸出文庫＞の時代からこのように分けられていたのではなく、司書が展示のために資料の内容に基づいてカテゴリ化したものと考えられる。①は当時の国家的なスローガン、②は当時の日本人に求められた心構えや知識を普及させる出版ジャンルがタイトルとされ、①、②ともにその時代の特徴的な出版傾向を表している。③、④は今日も存在し常用されているジャンル名をタイトルとしており、それらが過去（「戦時文庫」が＜貸出文庫＞として存在していた時代）と現在を繋ぎ、両者を対比して考えさせる仕掛けともなっている。

### 3) 資料リスト

展示資料リストには、「戦時文庫展」に関する基本情報（タイトル、会場、会期、展示資料の簡単な概要）、各章のタイトル、全資料の書誌情報、請求記号、凡例、主要参考文献が記載されている。このほか当センターのリストにはない事項として、ケースの番号、一部の章についての解説、資料番号、電子版『戦時文庫目録』（ウェブサイト）のアドレスおよび問い合わせ先が記載されている。展示の記録としてだけでなく、紹介したコレクションの将来的な利用促進の意味でも有効である。

## 2 考察を促す解説文

この展示を説得力のあるものにしていく大きな要因は、解説パネルおよび結びのパネルに記載された言葉が見る者の考察を促進することにあるといえる。とりわけ次のパネルの解説文は印象深い。

### ・「戦時文庫の成り立ち(1)文部省推薦図書と思想統制」より

「思想統制が厳しい反面、この時代には読書意欲が飛躍的に向上した時代であるとも言われています」

### ・「コレクション紹介(9)児童書」より

「貸出文庫開始当初は男女青少年層を主たる読者対象とし、産業・政治・経済部門の図書を中心とする方針でしたが、小学校児童の利用が予想外に多く、産業図書の購入費を児童図書へ代えたという記録が残っています」

・「おわりに」より

「当館の戦時文庫は時代の特徴を反映しています。1、戦時文庫の多くは日本の戦争期（昭和16年～昭和19年）に出版されているため、当時の緊迫した社会状況を映し出していること。」

「図書館の使命の一つに多様な価値観、意見を異にする情報を収集し広く社会や後世に伝えていくというものがああります。戦時文庫コレクションが図書館の社会的使命を果たし、当時の複雑な時代背景を知る鍵になれば幸いです。」

これらの解説パネル、結びのパネルは一貫して客観的事実だけを述べている。にもかかわらず、思想統制された戦時下であってなお、熱心に書物を読む人々と、そうした人々の要望に応えんと努力する図書館職員たちの姿が現実感を伴って浮かび上がってくる。また、年表やその他のパネル、実物資料から、彼らを取り巻く当時の状況がいかに切迫していたかも伝わってくる。展示されていた資料は物資の逼迫した時代の出版物であり、紙質も印刷も良いとは言えず、ほころびや変色など経年による劣化が見られるが、当時大勢の人々に読まれ、また戦火をくぐり抜けてきたとは思われぬほど良好な状態を保持していた。その保存状態を見てもこれらの図書が当時の人々にいかに大切に扱われてきたのかが分かる。このようにパネルと展示資料が互いに作用し合い、この展示を見る者が、図書を手に取った当時の人々の姿をまざまざと思い浮かべられるような展示であった。これが図書の力を引き出す展示ということであろうか。結びのパネルの「図書館の使命」に触れている一文では、これを企画した司書の思いが伝わってくる。

### 3 「戦時文庫展」と「焚書展」の比較と考察

#### 1) 共通点

共通点は三つある。ひとつは、どちらの資料展示ともネガティブな歴史的遺産を展示のテーマとした点である。このような性格の展示には困難を伴う。それは、意図するとしないとに関わらず、展示コンセプトや資料の見せ方によっては、図書館が展示テーマや資料自体に一面的なレッテルを貼ったように見えたり、偏った内容の展示と受け取られたりする恐れがあるからである。そしてその場合、図書館の基本的なあり方から外れることにもなる。例えば「戦時文庫」を展示テーマとする場合、戦時下のプロパガンダとして、言論統制の道具の物証としての否定的な側面ばかりが強調されて伝わることも考えられる。また逆に、当時の人々の戦意を高揚させた精神的支柱として過度に美化されることも考えられる。そうした危険を回避するために、そもそも最初からこの種の資料の展示を企画しないという選択肢もあるだろう。しかし、「戦時文庫展」では否定でも賛美でもなく、あくまで中立の立場で、「多様な価値観を後世に伝える」という図書館の本分を前面に出し、一貫した姿勢のもとに展示を構成することで歴史資料と積極的に向き合っている。一面的な価値判断に偏らない図書館ならではの展示<sup>[44]</sup>であると言える。司書が、館としての立場や展示コンセプトについて十分に議論を重ねて企画された資料展示であることが分かる。振り返って「焚書展」では、展示資料から焚書や文化財毀損の歴史事例を知っていただき、焚書等を良い悪いで捉えるのではなく“誰が何の為に焚書等を

行ったのか”という視点で見ると人に考えてもらうことを主眼に置いている。ネガティブな歴史的遺産を客観的に正確な情報とともに展示することで、資料から分かる歴史上の多様な価値観を伝えようとする姿勢において「戦時文庫展」も「焚書展」も図書館の基本的な立場に基づいた展示と言える。

もうひとつの共通点は、当センターの用語で言えば所蔵資料紹介を兼ねたテーマ展示であり、「情報としての書物」にスポットを当てながら「物（実体）としての書物」の二つの視点を兼ね備えた展示となっているところである。

三つ目の共通点は、展示の構成する補助具に①パネル、②章のタイトルの設定、③出品リストを用いていることである。いずれも司書が所蔵資料についての丹念な調査・研究に基づいてコンセプトを考案し、章タイトルと解説パネルの設置を積極的に行っている。それによって展示のテーマを分かりやすく伝え、展示資料についての理解を助けている。

## 2) 相違点

「戦時文庫展」と「焚書展」との相違点は、“解説する対象”が挙げられる。「戦時文庫展」では「戦時文庫」という特殊コレクションの存在を知らしめることを目的としているため、主にこの文庫が神奈川県立図書館に保管されるに至った経緯や文庫の構成ジャンルといった“資料のまとめり”について詳細に解説している。これに対して「焚書展」では、様々な「焚書」や文化財毀損の事例を、多種多様な資料に掲載された図版や記事で示しているため、個々の資料やその部分である掲載図版・記事自体を、解説を交えながらクローズアップし、それらの内容を連関させることで展示を構成している。このように展示コンセプト、資料の示し方に由来した違いがある。

## 3) 資料展示の課題についての考察

当センターの旧来の展示（平成25年度までの「展覧会補完展示」や「蔵書紹介展示」）では、書物を展示することで手に取って読むことができなくなる（本の内容を知ることができない）ことが課題であったが、「焚書展」や「戦時文庫展」では、解説パネルや解説シートを用いて、キャプションだけでは伝えることのできない資料の内容を展示の文脈に沿って簡潔に示した。それまで、図書資料について司書が解説を書くことには筆者はいささか抵抗があった。それは、利用者が自由に理解し解釈すべき内容（情報）に、司書が深く踏み込んで解説することで、解釈に一定の方向性を与えたり、意味を限定して伝えたりする恐れがあると考えられたからである。しかし、図書館の中立的な立場を念頭においた展示コンセプトに基づいて、司書が調査研究を行いその解説を書くことは可能であり、アンケートの結果に照らしてみても、当センターの「焚書展」で実施した資料の内容に踏み込んだ解説を交えた展示構成は、利用者が積極的に資料内容と向き合う契機となったことで、有効であったという確信を持つことができた。

## おわりに

最後に書物のケース内展示の可能性について所見を述べたい。これまで見てきたように、過去6年間の当センターでの資料展示の実践と考察、平成26年度新たな要素を加えて企画実施した「焚書展」で得られた成果やアンケートの反応、神奈川県立図書館をはじめとする他館の資料展示の実地調査で得た知見から、



メディア（媒体）としての書物と物としての書物のふたつの観点を合わせもつ展示の方法論を掴めたように思われる。展覧会との関連性を持たせたテーマにせよ、所蔵資料そのものを出発点としたテーマにせよ、いずれにおいても司書が主体的にテーマを設定し、調査研究を踏まえて資料の内容を客観的かつ正確に伝える解説を交えながら展示を構成することが重要であり、それが来館者の期待にも沿うものであると言える。今回の「焚書展」ではある特定のページや一枚の図版が主役であり、そこにたどりつくまでの考察のプロセスが展示の文脈を形作っていった。これを名付けて「調査研究型展示」と言えるだろう。また、予算上その他の問題もあり未着手ではあるが、将来的には展示リストに図や解説を加える形で拡充し、パンフレットなどの形式で小規模ながらも美術展のカタログに相当するものを作成することも有効と考えられる。これまでケース内展示は予算化されていない事業であったが、展示ケースの分かりやすい案内表示の作成や、たとえ僅かであっても展示用備品の購入と、企画段階で展示対象となりうる資料の新規購入等が行えれば、資料展示事業そのものの向上だけでなく、コレクションの拡充を来館者の目に見える形で行うこともできるだろう。

今回の展示「『焚書』—禁じられた書物と文化財—」では、アンケートという形で来館者の反応をつぶさに知ることができた。来館者がこの展示に少なからず心動かされ、熱心に見て下さったことが分かった。また、この展示の企画意図が確かに来館者に伝わったという実感を得られた。このことは、我々司書にとって大きな財産である。資料展示は利用者と資料を繋ぐ役割を担うだけでなく、来館者と司書が資料を介して対話することができる仕掛けでもあるように感じる。当センターの全ての利用者に感謝しつつ、今後もより良い資料展示とは何かを模索し、所蔵資料の調査研究を重ね、積極的に資料展示を企画していきたい。そのような地道な努力を積み重ねることにより、利用者に信頼される図書室となることができる。

#### 〔註〕

- [1] 当センターの配置人数は、職員（司書）2名、常勤のアルバイト（司書）1名、非常勤のアルバイト（カウンタースタッフ）4名、計7名となっている（平成26年度）。
- [2] 蔵書目録は、当センター内に設置している蔵書検索パソコン（OPAC）のほか、当館ホームページで公開している（<http://yma.opac.jp/freelnd.cgi>）。また、美術図書館9館11室の蔵書が検索できる「美術図書館横断検索（<http://alc.opac.jp>）」を公開している、美術図書館連絡会（ALC: Art Libraries' Consortium）に参加している。
- [3] 開架資料は、芸術分野の和書、参考図書（和洋）、国内外の雑誌（最新号および刊行年が近いもの）、当館展覧会カタログ・パンフレット・年報紀要、現在開催中の他館の展覧会カタログがある。
- [4] 閉架資料は、洋書、参考図書・芸術分野以外の和書、国内外の展覧会カタログ、貴重書、美術館等刊行物、所蔵品目録、超大型本、特殊コレクション、国内外の雑誌のバックナンバー、エフェメラ資料、マイクロ資料、映像資料等がある。
- [5] レファレンス対応では、主に所蔵資料に関する問い合わせ、蔵書検索（OPAC）等の機器類の使用方法に関する質問に回答している。来館の利用者とカウンターで直接やりとりする場合と、電話対応の二種類がある。また、利用者からのレファレンスの助けとするため、蔵書検索端末2台、インターネット検索端末2台の計4台を設置している。インターネット検索端末では、上記のウェブサイトのほか、国立国会図書館を始め公立図書館の蔵書検索、アートイベント情報検索が可能なウェブサイト（ヨコハマアートナビほか）等を見学できるようにリンク集を作成している。
- [6] 複写サービスは、著作権法第31条の範囲内で行っている。
- [7] 当センターの利用方法、施設の機能、所蔵資料紹介、利用者サービスの紹介を目的として、年に1～3回実施している。司書のガイドにより、閲覧室・書庫の資料や検索端末（OPAC）、マイクロリーダーなどの設備を見学していただくほか、貴重書、洋書、洋雑誌等の中から、特徴ある資料を選び、解説を交えて、参加者に直接現物を手に取っ



でご覧いただいている。

- [8] 横浜美術館が掲げる目標の一つに「市民ボランティアの育成」がある。当センターでは参加者（市民）が当センターの資料を扱う業務の一部を体験することで、内側から当センターの活動や機能を理解していただくことに主眼を置いて企画している。平成26年度は、長期ボランティア3種（①エフェメラ資料のファイリング、②作家ファイルリスト作成、③資料の装備・補修）3人、1日ボランティア（資料保管袋作成、ファイリング、配列確認）7人が登録され、述べ日数は46日を予定している。
- [9] 用いるガラスケースは当センター閲覧室の中段に2台設置されており、形状は4側面と天板がガラス製の覗き型で、サイズは幅182cm、奥行き99.3cm、全高92.3cm、展示面の床上高さ60cm、展示面からケース天板までの高さ32.3cmである。木製で、閲覧室の仕器の色調に合わせた濃いグレーの塗装仕上げとなっている。
- [10] 小林清親『東京名所図』、学習研究社、1975年
- [11] 第2回から、「工夫を凝らした美術展カタログ」というタイトルを併用した。
- [12] トリエンナーレの会期終了日は2014年11月3日(月)。
- [13] R. Bradbury, Fahrenheit 451 (London : Grafton Books, 1976) , p.65. 著者訳
- [14] 横浜トリエンナーレ組織委員会事務局2013年5月21日発表、『ヨコハマトリエンナーレ 2014 第2回 記者会見資料 展覧会タイトルとコンセプト、会期発表』
- [15] [一度読んだ本を思い出すことができる人々：筆者註]
- [16] 前掲書『ヨコハマトリエンナーレ 2014 第2回 記者会見資料 展覧会タイトルとコンセプト、会期発表』より
- [17] 前掲書
- [18] 前掲書
- [19] 「図書館の自由に関する宣言」第2の1項
- [20] 「図書館の自由に関する宣言」前文4項
- [21] 1979年の日本図書館協会総会では同宣言改訂が採択された。
- [22] 2001年8月10日から同月26日にかけて、船橋市西図書館の司書が、「新しい歴史教科書をつくる会」やその賛同者らの著書、合計107冊（会や賛同者以外の著書も含まれる）を、同館資料除籍基準に該当しないにもかかわらず廃棄した事件。最高裁判所による判決は次の通りであった「公立図書館の図書館職員である公務員が、図書廃棄について、基本的な職務上の義務に反し、著作者又は著作物に対する独断的な評価や個人的な好みによって不公正な取扱いをしたときは、当該図書の著作者の人格的利益を損害するものとして国家賠償法上違反となる」。(最高裁判所判例集より 事件番号：平成16年(受)930、事件名：損害賠償請求事件、裁判年月日：平成17年7月14日)
- [23] 米国図書館協会（ALA：American Library Association）による、Intellectual Freedom and Censorship Q&A（知的自由と検閲Q&A）より、米国大使館 広報・文化交流部レファレンス資料室訳
- [24] 白川静『字通』、平凡社、1996年、p1394
- [25] 『日本大百科全書』7巻、小学館、1986年、p245
- [26] 図書館の分類法NDC9（日本十進分類法新訂9版）によると、「焚書」は「禁書」とともに分類記号023.8に収められる。この023.8の分類項目には、以下のように出版の自由と規制に関する主題が広範に含まれている。
- 1) 禁止本（禁書、発禁本、発売禁止本、Prohibited books）、
  - 2) 検閲（Censorship）、
  - 3) 出版の自由、
  - 4) 出版論理、
  - 3) 秘密出版（秘密出版物、Underground literature、Underground press publications）、
  - 4) 表現の自由（Freedom of expression）、
  - 5) 焚書（Book burning）、
  - 6) ポルノグラフィ（ポルノ、Pornography）
- （「Web NDL Authorities 国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス」より<http://id.ndl.go.jp/auth/ndla/>）
- 焚書は、検閲や発行禁止などの規制の手段のひとつであって、出版活動や既存の書物を規制あるいは弾圧する様々な「手段」が他にもあることが理解される。
- [27] 章ごとの註で参考文献を記す。
- [28] **第1章主要参考文献**
- 新改約聖書刊行会訳『聖書』、日本聖書刊行会、1986年
- R.W.スクリプナー、C.スコット・ディクソン著、森田安一訳『ドイツ宗教改革』、岩波書店、2009年
- Germanisches Nationalmuseum Nürnberg “Martin Luther und die Reformation in Deutschland : Ausstellung zum 500. Geburtstag Martin Luthers” (Insel, 1983) [展覧会カタログ]
- 徳善義和『マルティン・ルター：ことばに生きた改革者』、岩波書店、2012年
- 森田安一『木版画を読む：占星術・「死の舞踏」そして宗教改革』、山川出版社、2013年

- 田辺幹之助、佐藤直樹編『ゴータ市美術館所蔵作品による宗教改革時代のドイツ木版画』、国立西洋美術館、1995年〔展覧会カタログ〕
- 森田安一『ルターの首引き猫：木版画で読む宗教改革』、山川出版社、1993年
- 藤代幸一『ヴィッテンベルクの小夜啼鳥：ザックス、デューラーと歩く宗教改革』、八坂書房、2006年
- [29] 表記は、神戸市立博物館による和訳に倣って「史的年代記」とした。菅野陽は、『大和文華』79号 菅野陽「蘭書『可鹿涅乙吉』と石川大浪の「ヒポクラテス画像」ほか」（1988年2月、p.32）において、“Historische Kronyck”は江戸時代に「歴史的年代記」「西洋全史 和蘭ゴッドフリイド撰」と訳されており、「西史」「西洋全史」も同じ書物を指すのではないかと述べている。
- [30] 1997年に版画家の菅野陽（1919-1995）氏より当センターに寄贈された。ページは2段組み（double column）となっており、9-10ページには、レーワルデン公立図書館のものとみられる蔵書印が捺されている（蔵書印は部分的に文字が欠落しており、「OPENB. LEE□□□□L. LEEWARDEN」とある。欠落部分は、「LEE□SZAAL」であると推測される）。レーワルデンは、ライデンから約145km北東の都市である。
- [31] **第2章主要参考文献**
- “Entartete Kunst : Bildersturm vor 25 Jahren”（München : Haus der kunst, 1962）〔展覧会カタログ〕
- リン・H・ニコラス著/高橋早苗訳『ヨーロッパの略奪：ナチス・ドイツ占領下における美術品の運命』、白水社、2002年
- 平井正「ドイツ頽廃芸術展」『季刊みづゑ』962号（1992年3月）、pp.36-49
- [32] **第3章主要参考文献**
- 横浜美術館『中村文庫目録』、横浜美術館、1992年
- 中村亨『日本美術教育の変遷：教科書・文献による体系』、日本文教出版、1979年
- 文部省大臣官房文書課編『終戦教育事務処理提要 第1輯』、文部大臣官房文書課、1945年
- 文部省『学制百二十年史』、ぎょうせい、1992年
- 片山清一編『資料・教育基本法』、高陵社書店、1974年
- H.J.ワンダーリック、土持ゲーリー法一監訳『占領下日本の教科書改革』、玉川大学出版部、1998年
- 『GHQ指令総集成1巻』、エムティ出版、1994年
- 『GHQ指令総集成2巻』、エムティ出版、1993年
- 『GHQ指令総集成4巻』、エムティ出版、1993年
- 中村新三『墨塗り教科書展を終えて：戦後教育の原点を探る』、[中村新三]、1986年
- [33] 文部大臣官房文書課編『終戦教育事務処理提要 第1輯』、文部大臣官房文書課、1945年、pp.217-219
- [34] **第4章主要参考文献**
- 文化庁編『戦災等による焼失文化財 20世紀の文化財過去帳』戎光祥出版、2003年
- 文化庁〔著〕『文化財保護法五十年史』、ぎょうせい、2001年
- 講談社編『昭和二万日の全記録 第8巻 占領下の民主主義』、講談社、1989年
- 昭和の歴史刊行会編『図説昭和の歴史 占領時代』、集英社、1980年
- 小林昌樹「国会図書館にない本（続編） 戦前・占領期の雑誌を求めて」『国立国会図書館月報』、640/641号、2014年7/8月
- 山本明『カストリ雑誌研究：シンボルにみる風俗史』、出版ニュース社、1976年
- [35] 「昭和20年8月15日の太平洋戦争終結後の国全体の混乱は、国の政治体制と社会の基本構造の変革を招来し、これに経済的な混乱・疲弊が伴ったという点で明治維新の際と類似するところがあった。この事態が文化財の保存に大きな影響を及ぼすことは避けられず、所有者が経済的基盤を失ったことによる国宝等の維持・管理の悪化、円為替安による海外への流出、戦時中修理等が滞ったために生じた建造物の荒廃などの現象が広範に発生した。しかし、政府は財政の窮迫に加えて戦災復興が急務とされたことから、これに対する十分な措置は到底とることができない状況であった。」文化庁〔著〕『文化財保護法五十年史』、ぎょうせい、2001年、p.17
- [36] 「『カストリ』の語源は、(粗悪な：筆者補。以下同) かすと(り) 焼酎を三合飲めば(酔い) つぶれるように、三号で廃刊するような安直な雑誌という意味とされる」『日本大百科全書』、小学館、1985年、p.251。
- [37] 講談社編『昭和二万日の全記録 第8巻 占領下の民主主義』、講談社、1989年、p.2
- [38] 前掲書
- [39] 奇譚の名がつく雑誌、『奇譚雑誌』、『奇譚クラブ』は、ともに1947年に創刊されている。(山本明『カストリ雑誌研究：シンボルにみる風俗史』、出版ニュース社、1976年、p.54、p.68参照)

- [40] 講談社編『昭和二万日の全記録 第8巻 占領下の民主主義』、講談社、1989年、p.3
- [41] 横浜市中央図書館においては、出品作家やトリエンナーレをパネルや図書で紹介する企画展示、「記憶という芸術@図書館～ヨコハマトリエンナーレ2014応援プログラム～」を2014年7月29日から11月3日まで開催した。(2014年7月10日市政記者発表資料 <http://www.city.yokohama.jp/ne/news/press/201407/images/phpWFcSrA.pdf>) (2015年1月31日確認)
- [42] <http://fp.yafjp.org/wp-content/uploads/2014/08/kisha-140822yma.pdf> (2015年1月31日確認)
- [43] 当該展示チラシ「県立図書館60周年記念展示 コレクション紹介シリーズ 戦時文庫」および神奈川県立図書館ホームページ『電子版戦時文庫目録』[http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/digital\\_archives/senjibunko.htm](http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/digital_archives/senjibunko.htm)による。
- [44] この展示は「図書館の自由に関する宣言(1954年採択、1979年改訂)」の精神にかなった企画と言える。同提言第1の2には以下のように記されている。
- 「2. 図書館は、自らの責任において作成した収集方針にもとづき資料の選択および収集を行う。その際、
- (1) 多様な、対立する意見のある問題については、それぞれの観点に立つ資料を幅広く収集する。
  - (2) 著者の思想的、宗教的、党派的立場にとらわれて、その著作を排除することはしない。
  - (3) 図書館員の個人的な関心や好みによって選択をしない。
  - (4) 個人・組織・団体からの圧力や干渉によって収集の自由を放棄したり、紛糾をおそれて自己規制したりはしない。
  - (5) 寄贈資料の受入にあたっても同様である。図書館の収集した資料がどのような思想や主張をもっていようと、それを図書館および図書館員が支持することを意味するものではない。」









表 4 続き

No.	資料名 (書名、著者名、出版年、サイズ、掲載ページ、寄贈者、請求記号)	テクスト	図版 (作者、技法、テクスト)
18	書名 初等科国語 三男子用 著者名 文部省 出版社 東京書籍 出版年 1943年 サイズ 146×203cm 掲載ページ 45 請求記号 NK3.109.3b	作者 テクスト	《6.ポスター (海のもの)》 (国民学校初等科(小学校)用教科書:「一部份」 除の未入り)
19	書名 文藝春秋 臨時増刊 著者名 文藝春秋 出版社 文藝春秋 出版年月 1985年8月 サイズ(縦) 257cm 掲載ページ 58-59 寄贈者 浜口タカシ氏 請求記号 Z10000694	作者 テクスト	撮影者不詳 「遺座」教科書は続いている。「渡部昇一」(文)
戦後から現代の日本における書物や文化財の毀損			
20	書名 アサヒグラフ 巻号 1352号 出版社 朝日新聞社 出版年月日 1950年7月19日 サイズ(縦) 372cm (覆木) 掲載ページ 12-13 請求記号 Z10000005	作者 テクスト	撮影者不詳 「龍藏寺金剛堂上 焼亡つづく國宝文化財」
21	書名 アサヒグラフ 巻号 1090号 出版社 朝日新聞社 出版年月日 1955年6月8日 サイズ(縦) 363cm 掲載ページ 4-5 請求記号 Z10000005	作者 テクスト	吉江雅洋 (1928年生まれ) 撮影 特集記事「閉じられた家庭の遺書」より

★…9月30日まで展示

★★…10月1日から展示

★★★…9月30日以降は、関連資料コーナーにて閲覧可能



表5 続き

戦後から戦までの日本における書物や文化財の毀損

No.	書名, 著者名, 出版社, 出版年, サイズ, 掲載ページ, 寄贈者, 請求記号	付箋ページ, 四角ノテカスト, (作者, 技法, タイトル)
[19]	<p>書名 経緯編纂 巻号 45巻5号 通巻533号 出版社 新潮社 出版年月 1994年5月 サイズ(縦) 28.2cm ※ 掲載ページ 52 請求記号 Z00000696 ※ 前掲No.11と同一資料</p> <p>書名 古写真で見える変わった城：保存版 著者名 井井 聖小次郎, 龍志 聖修 出版社 世界文化社 出版年 2004年 サイズ(縦) 25.8cm 寄贈者 世界文化社 請求記号 521.62/K683</p>	<p>テカスト (特集) 明治維新百年のいまのなかの「開治の魂」弘法殿で、壊されたものはありますか？</p>
[20]	<p>書名 江戸城 小田原城：八王子城 伝倉城 石山一役城 出版社 学習研究社 出版年 2004年 サイズ(縦) 29.2cm 寄贈者 学習研究社 請求記号 521.82/Y31</p>	
[21]	<p>書名 アソノの日記展 (展覧会カタログ) 編者 会館 出版年 1978年8月10日-1978年8月15日 出版社 朝日新聞社 出版年 1978年 サイズ(縦) 23.8cm 寄贈者 朝日厚労氏 請求記号 K39/U1/78</p>	<p>作者 撮影者不詳 テカスト 写真ネーミングの肖像 ウィーン・エド・アノック Frank 1941年2月撮影</p>
[22]	<p>書名 アンネの日記 次々破られる 編者 朝日新聞 都内の公立図書館被害 出版年 2010年9月21日 朝刊 出版社 朝日新聞社 サイズ(縦) 32-83 寄贈者 武田厚労氏 請求記号 K39/U1/78</p>	<p>作者 テカスト 東京都内の公立図書館で、第2次大戦中のナチストドイツのユダヤ人迫害下で書かれた「アンネの日記」が図書館蔵書22冊以上が破損している被害に遭ったことわかった。</p>
[23]	<p>書名 これは本ではない：ブックアートの広がり (展覧会カタログ) 編者 会館 出版年 2010年11月20日-2011年1月25日 出版社 美術館連携協議会 出版年 2010年 サイズ(縦) 36.3cm 寄贈者 うらわら美術館 請求記号 K39/U1/2010</p>	<p>作者 テカスト 西村由平 (1975年生まれ) 《精修漢和辞典》2000年 ほか 遠藤和成 (1950年生まれ) 《コンテナー——壊かれた言葉——》1983-2010年 ほか</p>
[24]	<p>書名 In my Room (インマイルーム) 著者名 藤野野矢 著 出版社 朝日新聞社 出版年 2005年 サイズ(縦) 29.3cm 寄贈者 文野太郎氏 請求記号 748/T347</p>	
[25]	<p>書名 龍力の介人 隠さず見せた 「写真がいっせいで眼帯が対処要求：愛知県美術館一部蔵って展示」 編者 朝日新聞 出版年月日 2010年9月10日 夕刊 掲載頁 4 (文化欄)</p>	
[26]	<p>書名 美術手帖 巻号 98巻102号 出版社 朝日新聞社 出版年月 2010年10月 サイズ(縦) 21cm 掲載ページ 154-157 請求記号 Z0000598</p>	<p>作者 テカスト 王居謙- (1975年生まれ) 著 「このころから」である。同時に「芸術でもある」「介入事件への緊急発言」</p>
[27]	<p>書名 朝日新聞 出版年月 2010年10月28日 朝刊 掲載頁 37 (神楽坂・橋本) 請求記号 F702/M/K379</p>	
[28]	<p>書名 太平洋戦争の戦前から戦中に当時の文部省が 戦意高揚のため全国に設けた「貸出文庫」その 一部を保存した国立国会図書館(横浜西区)が 「戦時文庫」コレクションを本館1階で開 いている。</p>	

ヨーロッパとアジアにおける文化財の毀損

No.	書名, 著者名, 出版社, 出版年, サイズ(縦), 寄贈者, 請求記号	The art of Byzantium and the medieval West : selected studies Ernst Kitzinger, W. Eugene Kleinbauer Indiana University Press 出版年 2005年 サイズ(縦) 28.4cm 寄贈者 品治重忠氏 請求記号 F702/M/K379
[29]	<p>書名 著者名 出版社 出版年 サイズ(縦) 寄贈者 請求記号</p>	<p>著者名 Robert Capa, David Seymour 撮影 Georges Soria 文 出版社 Jannink 出版年 1980年 サイズ(縦) 28.6cm 掲載ページ 90-91 請求記号 F748.347/C16.2</p>

No.	書名, 著者名, 出版社, 出版年, サイズ, 掲載ページ, 寄贈者, 請求記号	付箋ページ, 四角ノテカスト, (作者, 技法, タイトル)
[30]	<p>書名 The art of Constantinople : an introduction to Byzantine art. 著者名 John Beckwith 出版社 Phaidon Publishers 出版年 1961年 サイズ(縦) 25.2cm 掲載ページ 57 寄贈者 品治重忠氏 請求記号 F702/O4/B31</p>	<p>テカスト 《画像完備の「付箋」と「テカスト」の両方のモダンイック 8世紀から15世紀まで》 An Iconoclast Cross in mosaic in a room over the southwest ramp in the Church of Agia Sophia : middle of the eighth century, Istanbul.</p>
[31]	<p>書名 The mirror of the artist : northern Renaissance art in its historical context 著者名 Craig Harbison 出版社 Phaidon Publishers 出版年 1965年 サイズ(縦) 23.4cm 掲載ページ 106, 110 寄贈者 品治重忠氏 請求記号 F702.05/7.32</p>	<p>テカスト 《落書きされたエラスムス像》 セバスチアン・ムニョス・スター・著字挿画、1550年 同4月 (スペイン国立図書館蔵) Dimitris Kourlis, in collaboration with SEBASTIAN MUNYOS STARS in a copy of SEBASTIAN MUNYOS STARS Cosmographia 作者不詳 1583年頃 Michael Ainsinger (生年不詳-1598) 著, De Leone Belgicaの挿絵, Franz Hogenberg 発行, 1583年刊 (大英博物館蔵) A. COYNE, ARTIST, Inscribed in the National Gallery, C. 1583, from Baron Eymeret, De Leone Belgica, Cologne, 1583</p>
[32]	<p>書名 Les Grandes photos de la guerre d'Espagne 著者名 Robert Capa, David Seymour 撮影 Georges Soria 文 出版社 Jannink 出版年 1980年 サイズ(縦) 28.6cm 掲載ページ 90-91 請求記号 F748.347/C16.2</p>	<p>作者 テカスト Robert Capa, David Seymour 撮影 Georges Soria 文</p>
[33]	<p>書名 宗教藝術 巻号 289号 出版社 毎日新聞社 出版年月 2006年11月 サイズ(縦) 25.7cm 掲載ページ 15-17 請求記号 Z0000666</p>	<p>作者 テカスト 野村和彦 (1946年生まれ) 撮影・文 文化大革命が叩き壊した「テカスト」秘蔵の仏教寺院</p>
[34]	<p>書名 宗教藝術 巻号 289号 出版社 毎日新聞社 出版年月 2006年11月 サイズ(縦) 25.7cm 掲載ページ 15-17 請求記号 Z0000666</p>	<p>作者 テカスト (特集) パル・ミキエーン遺跡</p>

表6 「書物と文化財の毀損」事例調査文献目録

No.	資料名(書名,著者名,出版者,出版年,サイズ,掲載ページ,高麗者,請求記号)	複製ページの図版/テクスト(作者,技法,タイトル)
①	<p>書名 20世紀文芸記録 著者名 講談社 出版年 1987年 サイズ(縦) 287cm 掲載ページ 479 請求記号 Z106/Ka19</p> <p>書名 西洋美術研究 巻号 6号 元社 講談社 出版年月 1987年7月 サイズ(縦) 257cm 請求記号 Z0000793</p>	<p>テクスト ペルシムシ等の前のオスマン広場で行われた「非文明的」諸物の焚き、ペルシムシの反テラス勢力に対する文化的潔清の象徴的儀式である。</p>
②	<p>書名 現代日本の演劇・ボクシング・フィリッピン・ハリウッド 著者名 佐々木英也監修・森田義之責任編集・谷尾康輔編 出版年 1991年 サイズ(縦) 283.5cm 掲載ページ p65~66, p67 高麗者 二見亨氏 請求記号 Z0237/N066/1-4</p>	<p>テクスト 「特集 イコノクラスム」</p> <p>著者名 サンドロ・ボッティネリ 出版年 1942年 サイズ 14.4cm 掲載ページ 図版1, 図版15, 図版17 高麗者 中村亨氏 請求記号 NK37/109/2c</p>
③	<p>書名 Reformation in Nürnberg: Umbruch und Bewahrung 著者名 Georges Natorp 出版年 1979年 サイズ(縦) 296cm 掲載ページ 133 請求記号 FK34/G379</p>	<p>テクスト (Moralische ausdeutung der bilderfrage)</p>
④	<p>書名 本の手帖 巻号 5号 2巻10号 元社 昭森社 出版年月 1961年7月 サイズ(縦) 208cm 請求記号 Z0000647</p>	<p>テクスト 「特集 発祥本」</p>
⑤	<p>書名 本の手帖 巻号 6号 元社 昭森社 出版年月 1961年8月 サイズ(縦) 208cm 請求記号 Z0000647</p>	<p>テクスト 「特集 海外の書津」</p>
⑥	<p>書名 年七の例 出版年 1957年4月5日 サイズ(縦) 34.4cm 掲載ページ p20~21 高麗者名 ベンタックスキャラリー 請求記号 Z0000005</p>	<p>テクスト 文化大革命 「ジョージア革命の機軸にピストルをつきつける子どもたち」 「東洋版の『野分かつぶさ』出版をめぐる騒動」 「アメリカ帝国主義に対する憎しみは文化革命の興業のなかで一段と強まっている」=UPI</p>
⑦	<p>書名 アサヒグラフ 巻号 51巻7号 1276通号 元社 朝日新聞社 出版年月 1955年2月16日 サイズ(縦) 37.2cm 掲載ページ p3 高麗者名 ベンタックスキャラリー 請求記号 Z0000005</p>	<p>テクスト 「台裳も空し1 法隆寺金堂炎上す」</p>
⑧	<p>書名 アサヒグラフ 巻号 1622号 元社 朝日新聞社 出版年月 1955年9月28日 サイズ(縦) 37.3cm 掲載ページ p20 高麗者名 ベンタックスキャラリー 請求記号 Z0000005</p>	<p>テクスト 「金箔ついた金剛寺」</p>

No.	資料名(書名,著者名,出版者,出版年,サイズ,掲載ページ,高麗者,請求記号)	複製ページの図版/テクスト(作者,技法,タイトル)
①	<p>書名 エノホニ 四 著者名 文部省 出版年 1941年 サイズ 14.3cm 掲載ページ 図版5, 図版16 高麗者名 中村亨氏 請求記号 NK37/109/4</p>	<p>テクスト 《5.かとう寺》 《国民学校初等科(小学校)用教科書: 図版の未入り》 《16.きりん節》 《一部削除の未入り》</p>
②	<p>書名 初等科国算 二女子用 著者名 文部省 出版年 1942年 サイズ 14.4cm 掲載ページ 図版1, 図版15, 図版17 高麗者 中村亨氏 請求記号 NK37/109/2c</p>	<p>テクスト 《1.色》 《国民学校初等科(小学校)用教科書: 図版注意の未入り》 《15.織組》 《取敢注意の未入り》 《17.形》 《職制編とながら編かれていたが、未による指示なし》</p>
③	<p>書名 初等科国算 三男子用 著者名 文部省 出版年 1942年 サイズ 14.4cm 掲載ページ 図版13, 図版15, 図版30 高麗者 中村亨氏 請求記号 NK37/109/2</p>	<p>テクスト 《13.数学演習》 《国民学校初等科(小学校)用教科書: 一部削除の未入り》 《18.算算》 《図版の未入り》 《20.形》 《一部削除の未入り》</p>
④	<p>書名 初等科国算 三男子用 著者名 文部省 出版年 1943年 サイズ 14.8cm 掲載ページ 図版6, 図版15, 図版29 高麗者名 中村亨氏 請求記号 NK37/109/3b</p>	<p>テクスト 《6.ポスター(海のまもり)》 《国民学校初等科(小学校)用教科書: 図の上に紙を貼る》 《15.武蔵》 《28.行軍》 《見聞きのページ同士を糊で貼り合わせる》</p>
⑤	<p>書名 初等科国算 三男子用 著者名 文部省 出版年 1943年 サイズ 14.8cm 掲載ページ 図版6, 図版15, 図版29 高麗者 中村亨氏 請求記号 NK37/109/3b</p>	<p>テクスト 《1.色》 《国民学校初等科(小学校)用教科書: 図版注意の未入り》 《6.ポスター》 《一部削除の未入り》 《15.武蔵》 《28.行軍》 《ともは削除の未入り》</p>
⑥	<p>書名 初等科国算 四男子用 著者名 文部省 出版年 1943年 サイズ 14.6cm 掲載ページ 図版3, 図版11, 図版12, 図版17, 図版27 高麗者 中村亨氏 請求記号 NK37/109/4</p>	<p>テクスト 《2.配色》 《3.ポスター》 《11.緑》 《12.要路》 《17.刺繍》 《27.遊ぶ》</p>



表7 「『焚書』一禁じられた書物と文化財」アンケート結果

- 1 この展示をお知りになりたかったきっかけを教えてください。(複数回答)
- |                 |   |
|-----------------|---|
| チラシ             | 4 |
| ホームページ          | 1 |
| メールマガジン         | 0 |
| 新聞・雑誌           | 2 |
| 知人にすすめられて       | 8 |
| 当センター利用時に偶然見つけた | 4 |
| その他             | 1 |
- 2 この展示をご観覧になろうと思われた理由を教えてください(複数回答)
- |   |    |
|---|----|
| タイトルに惹かれたから                                       | 5  |
| 内容が面白そうだから  | 11 |
| 焚書や文化財の歴史に関心があるから                                 | 6  |
| ホームページ等に掲載のHisatsune Kronyck(史的年代記)を、実際にみてみたかったから | 1  |
| ヨコハマトリエンナーレ2010と関連していると思われたから                     | 5  |
| その他   | 3  |
- 3 展示の構成について
- (1) 資料の分量はいかがでしたか
- |                               |   |
|-------------------------------|---|
| ちょうど良い(充分)ちょうど良い(適度、適当)       | 6 |
| 少ない(少ない)もう少し多い方がいい(もう少し少しかった) | 2 |
| 少量だがまとまっていた                   | 4 |
| 限られたスペース内にはこのくらい[が適量]ではないか    | 1 |
| 不満足                           | 1 |
- (2) ひとつひとつの資料の内容はいかがでしたか
- |               |   |
|---------------|---|
| 興味深かった        | 3 |
| 興味深いものもあった    | 1 |
| 知らないうちが多かった   | 1 |
| 見たいものがあった     | 1 |
| 見やすかった        | 1 |
| できれば、中味を見たかった | 1 |
| Good          | 1 |
| よくわからなかった     | 1 |
- (3) 資料と資料のつながりはいかがでしたか
- |                      |   |
|----------------------|---|
| わかりやすい               | 1 |
| 一つのケース内では、良いほうだったと思う | 1 |
| 共通のものを知ることができた       | 1 |
| 悪書追放運動についてもう少し少しかった  | 1 |
| 少し興味深い               | 1 |
| よくわからなかった            | 1 |
- (4) 資料の配置についてはいかがでしたか
- |        |   |
|--------|---|
| ① 見やすさ | 1 |
| ② 見やすさ | 1 |
| ③ 見やすさ | 1 |
| ④ 見やすさ | 1 |
| ⑤ 見やすさ | 1 |
| ⑥ 見やすさ | 1 |
| ⑦ 見やすさ | 1 |
| ⑧ 見やすさ | 1 |
| ⑨ 見やすさ | 1 |
| ⑩ 見やすさ | 1 |
| ⑪ 見やすさ | 1 |
| ⑫ 見やすさ | 1 |
| ⑬ 見やすさ | 1 |
| ⑭ 見やすさ | 1 |
| ⑮ 見やすさ | 1 |
| ⑯ 見やすさ | 1 |
| ⑰ 見やすさ | 1 |
| ⑱ 見やすさ | 1 |
| ⑲ 見やすさ | 1 |
| ⑳ 見やすさ | 1 |
| ㉑ 見やすさ | 1 |
| ㉒ 見やすさ | 1 |
| ㉓ 見やすさ | 1 |
| ㉔ 見やすさ | 1 |
| ㉕ 見やすさ | 1 |
| ㉖ 見やすさ | 1 |
| ㉗ 見やすさ | 1 |
| ㉘ 見やすさ | 1 |
| ㉙ 見やすさ | 1 |
| ㉚ 見やすさ | 1 |
| ㉛ 見やすさ | 1 |
| ㉜ 見やすさ | 1 |
| ㉝ 見やすさ | 1 |
| ㉞ 見やすさ | 1 |
| ㉟ 見やすさ | 1 |
| ㊱ 見やすさ | 1 |
| ㊲ 見やすさ | 1 |
| ㊳ 見やすさ | 1 |
| ㊴ 見やすさ | 1 |
| ㊵ 見やすさ | 1 |
| ㊶ 見やすさ | 1 |
| ㊷ 見やすさ | 1 |
| ㊸ 見やすさ | 1 |
| ㊹ 見やすさ | 1 |
| ㊺ 見やすさ | 1 |
| ㊻ 見やすさ | 1 |
| ㊼ 見やすさ | 1 |
| ㊽ 見やすさ | 1 |
| ㊾ 見やすさ | 1 |
| ㊿ 見やすさ | 1 |
- (5) 展示のタイトル「『焚書』一禁じられた書物と文化財」と資料の関係はいかがでしたか
- |                       |   |
|-----------------------|---|
| いろいろな例が挙げられていておもしろかった | 5 |
| 意外としてよかった             | 1 |
| 普通                    | 2 |
| ×                     | 1 |
- (6) 展示のタイトル「『焚書』一禁じられた書物と文化財」と資料の関係はいかがでしたか
- |        |   |
|--------|---|
| ① 見やすさ | 1 |
| ② 見やすさ | 1 |
| ③ 見やすさ | 1 |
| ④ 見やすさ | 1 |
| ⑤ 見やすさ | 1 |
| ⑥ 見やすさ | 1 |
| ⑦ 見やすさ | 1 |
| ⑧ 見やすさ | 1 |
| ⑨ 見やすさ | 1 |
| ⑩ 見やすさ | 1 |
| ⑪ 見やすさ | 1 |
| ⑫ 見やすさ | 1 |
| ⑬ 見やすさ | 1 |
| ⑭ 見やすさ | 1 |
| ⑮ 見やすさ | 1 |
| ⑯ 見やすさ | 1 |
| ⑰ 見やすさ | 1 |
| ⑱ 見やすさ | 1 |
| ⑲ 見やすさ | 1 |
| ⑳ 見やすさ | 1 |
| ㉑ 見やすさ | 1 |
| ㉒ 見やすさ | 1 |
| ㉓ 見やすさ | 1 |
| ㉔ 見やすさ | 1 |
| ㉕ 見やすさ | 1 |
| ㉖ 見やすさ | 1 |
| ㉗ 見やすさ | 1 |
| ㉘ 見やすさ | 1 |
| ㉙ 見やすさ | 1 |
| ㉚ 見やすさ | 1 |
| ㉛ 見やすさ | 1 |
| ㉜ 見やすさ | 1 |
| ㉝ 見やすさ | 1 |
| ㉞ 見やすさ | 1 |
| ㉟ 見やすさ | 1 |
| ㊱ 見やすさ | 1 |
| ㊲ 見やすさ | 1 |
| ㊳ 見やすさ | 1 |
| ㊴ 見やすさ | 1 |
| ㊵ 見やすさ | 1 |
| ㊶ 見やすさ | 1 |
| ㊷ 見やすさ | 1 |
| ㊸ 見やすさ | 1 |
| ㊹ 見やすさ | 1 |
| ㊺ 見やすさ | 1 |
| ㊻ 見やすさ | 1 |
| ㊼ 見やすさ | 1 |
| ㊽ 見やすさ | 1 |
| ㊾ 見やすさ | 1 |
| ㊿ 見やすさ | 1 |

- 4 展示のキャプション(題名)や説明文について
- (1) 内容は良かったか
- |  |   |
|--|---|
| よい(よい、適当、いいねい、よい)                      | 6 |
| わかりやすい                                 | 1 |
| よくかきかき                                 | 1 |
| 全く読めなかったので感想不能、速く下さい                   | 1 |
| よくかきかき                                 | 5 |
| 展示としてはもう少し詳しいと思うが、もっと詳しい説明もあればいいと思った。1 | 1 |
| (3) 焚書(文字の大きさや数詞)はわかりやすか               | 5 |
| よい(よい、適当) 1                            | 1 |
| 文字の大きさは読みやすいサイズで良いと思う。1                | 1 |
- 5 この展示の中で、面白かったことがあればお聞かせください。
- ・ナチスの時代の情報を知ったこと
  - ・ドイツの追放運動について知りました。
  - ・関連資料コーナーで知識を深められたよかったです。
  - ・中村文庫の本の書き込み
  - ・悪書追放運動のように近現代、新憲法下でも行われていたことが興味深い
  - ・悪書追放運動のようには外れませんが「防衛演習」などの絵(ドローイング)自体が良い
  - ・ドイツ芸術の目が面白かった。文化財の破壊は、物そのものを壊すことだけではなく、追放芸術として作品を貶めることもその一つな気が面白かった。
  - ・写真の3Dが面白かった。
  - ・「Hisatsune Kronyck」はネット上でしか見ないものでやはり写物は印象が違ふ、思った以上にうまく写さうだった。
  - ・焚書の時代背景が説明されていると思った。紙上に「展示」に関連する写物が選ばれて、「背景」による参考資料等の紹介もあり、全体像がつかめました。
  - ・立体視がデジタルに見ることが出来てすばらしい。
  - ・アンネの日記に関してキャプションがなかったのでよく分かりませんでした。古書が見られて良かったです。
  - ・スチレオ写真と専用メガネのぞいて見ても何も意味のある形は見えなかったけれど、3D映像の研究が昔からあったことに感動しました。
- ※ご利用目録にセットするステレオ写真は週に一度交換。当該日は、ネット・シフトウィッターズ作(メルツ絵画)のステレオ写真をセットしていただきます。
- 6 今回の展示のテーマについてお考えになつたことやお感じのことをお聞かせください。
- ・よい企画です。もう少し資料があると思ったのですが一つ
  - ・文化財のものを破壊するということはいろんな意味をもつのだなあと思います。あと知る権利についても考えました。
  - ・世の中の変化、歴史の変化を感じます。きちんとした資料が保管され、今後も市民に展示されることを望みます。平和な社会をつくるために、文化は豊かではなくて豊かにならないと感じます。
  - ・表現や言論はそれだけどんなまゆをしめようとも、守らねばならないと再確認した。歴史をくり返さないようにしたい。
  - ・時勢の論議的でない、非ユリメシムの深層に感じる。
  - ・「処分を免れた書物の本はもつと見てみたい。
  - ・このような資料(ゴットフリート)※が身近にあることを知って驚いた。
  - ※ Hisatsune Kronyck の意
  - ・中国の始皇帝による焚書、日本では北京で行った焚書等の資料もほしいと思います
  - ・図書館の本・雑誌の切取等増えていると思うので、啓蒙をお願いします。
- 7 そのほかご感想・ご要望があればお聞かせください。
- ・パンフレットがあるといいですね！
  - ・これらも展示に期待しています！
  - ・出品目録に、説明文のほうもあわせて記載すれば良いと思う。見開きページを超えている雑誌の記事は見開き部分以外のコピーを併置して読めば尚良い。
  - ・前期、後期に分けるのもいいと思います
  - ・資料の複製を当日でも可能なようにできればなお良かった。
  - ・小規模な展示ですが、これをきっかけに同じテーマについてもっと見てみたいと興味があるような内容でした。
  - ・キャプションの紙が薄くて読んでいくのが気になる。
  - ・不用品と美術品の入場券を買って失敗しました(800円)。紙の質が大変悪かったです。感謝！
  - ・保護保護等々、昨今の日本の後い状況の中、このようなテーマでは素晴らしいと思います。これをスタートにして芸術・文化面で市民への問題提起、意識の啓蒙をしてほしいと思います。
  - ・企画展示に後もういっぺん案内表示をお願いいたします。またまたまたまたまたまたまたまたまたまたまたまたまたまたと知っています。ありがとうございました。
- 8 お答えのない範囲で結構ですので、ご本人様について教えてください。
- (1) 性別 男性: 1 女性: 9  
 (2) 年齢 20代: 1 30代: 5 40代: 1 50代: 4 60代: 4 70代以上: 1  
 (3) 職業 主婦: 3 社会人: 8(業種/卸売: 1 学芸員: 1 自営業: 2 教員: 1 フリーランス(クリエイター): 1 無記入: 2)  
 (4) 住所 横浜市内: 9 神奈川県内: 2 そのほか: 5(東京都: 4 無記入: 1)
- ※、□内は筆者が補足した。

表8 他館の資料展示実地調査結果

展示名	会場	会期	展示形式(原資料)		展示対象	補助具	配布物	章	特記事項
			主	副					
第28回 「浪波の香り」 展覧	国立新美術館 アートラブリアリー	H26年 8月19日(火)~ 8月25日(月)	資料コーナー		展覧会カタログ と和書	タブレット、キ ャプセル、出品 目録	なし	[3部構成]	
近藤竜男 生涯追記 展覧	国立新美術館 アートラブリアリー	H26年 7月16日(水)~ 7月19日(土)	ケース内展示		展覧会カレン ダー	導入バネル、キ ャプセル、解説バ ネル	なし		別館閲覧室に 保存されている 資料の中から 展示
「東京文化財 センター2014」 展覧	東京都立 中央図書館 4階企画展示室	H26年 10月25日(土)~ 11月9日(日)	ケース内展示 額装展示	資料コーナー ビデオコーナー	古文書、古地 図、絵巻、浮世 絵、重要文化 財含む、複製	導入バネル、キ ャプセル、解説バ ネル	チラシ、出品 目録	4章構成	多目的ホール にて関連ビデ オ、資料コー ナー、複製品 (浮世絵、古地 図)を併せて展 示する。複製 品は、複製品 レックチャーター による複製
「東洋文庫 展覧」	東京都立中央 図書館3階	H26年 11月7日(水)~ 11月13日(水)	ケース内展示 資料コーナー		和装本(折 本)、和書	タブレット、バ ネル、解説バ ネル	出品目録	なし	
「浪波の香り」 一詩歌展 「明風」	東京都立中央 図書館1階	H26年 9月27 日(土)~11月22 日(日)	ケース内展示		古雑誌	なし	なし	なし	
「日本近代文学 展覧」	東京都立中央 図書館1階	H26年 9月27 日(土)~11月22 日(日)	ケース内展示		原稿、自筆文 書、和書、和 装本、複製バ ネル、複製品 写真、複製品 写真、複製品 写真	キャプション、導 入バネル、解説バ ネル	チラシ、出品 目録	4部構成	複製化作品 コーナー
「多摩川 展覧」	東京都立中央 図書館1階	H26年 11月14日(金)~ 11月17日(水)	ケース内展示 資料コーナー		和装本、和書 新聞、ポスター	キャプション(付 録)、導入バネ ル、解説バネ ル	チラシ、出品 目録	6章構成	
「多摩川 展覧」	東京都立中央 図書館1階	H26年 8月15日(金)~ 11月12日(水)	ケース内展示 資料コーナー		和装本、和書 新聞、ポスター	キャプション、導 入バネル、解説バ ネル	チラシ、出品 目録	7章構成	
「多摩川 展覧」	東京都立中央 図書館1階	H26年 8月15日(金)~ 11月12日(水)	ケース内展示 備品展示		図画、和書、和 装本、複製バ ネル	キャプション、導 入バネル、解説バ ネル、複製品 写真、複製品 写真	チラシ、出品 目録	3章構成	
「多摩川 展覧」	東京都立中央 図書館1階	H26年 9月30日(火)~ 10月13日(水)	ケース内展示 資料コーナー		和書、古書、錦 絵、古地図、写 真	キャプション、導 入バネル、解説バ ネル、複製品 写真、複製品 写真	チラシ、出品 目録	3章構成	
「多摩川 展覧」	東京都立中央 図書館1階	H26年 11月13日(日)~ 11月13日(日)	ケース内展示		古書	キャプション、導 入バネル、解説バ ネル	なし	なし	
「多摩川 展覧」	東京都立中央 図書館1階	H26年 9月25日(土)~ 10月13日(日)	ケース内展示 資料コーナー		和書、展覧会 目録、複製バ ネル、複製品 写真、複製品 写真	キャプション、導 入バネル、解説バ ネル	チラシ、出品 目録	あり	

展示名	会場	会期	展示形式(原資料)		展示対象	補助具	配布物	章	特記事項
主	副								
「多摩川 展覧」	東京都立中央 図書館1階	H26年 10月17日(金)~ 11月27日(土)	ケース内展示		公文書、私文 書、古文書、 新聞記事、年 表、複製	キャプション、導 入バネル、解説バ ネル、複製品 写真、複製品 写真	チラシ、出品 目録	4章構成	
「多摩川 展覧」	東京都立中央 図書館1階	H26年 11月5日(水)~ 11月14日(金)	バネル展示		バネル (複製、写真)	看板 (タイトル、会期)	パンフレット (カタログ)、展 覧目録	3章構成	
「多摩川 展覧」	東京都立中央 図書館1階	H26年 11月11日(日)~ 12月25日(日)	資料コーナー		和書	導入バネル、章立 て表示	出品目録	3章構成	

---

---

# A Study of ISHIWATA Shoichiro (Koitsu): Focusing on Newly Acquired Works and Documentation 【Summary】

KATADA Yuko

Ishiwata Shoichiro (1897-1987), a pupil of Kawase Hasui, created prints based on landscapes near Tokyo and Yokohama and is known as a printmaker associated with the Shin-hanga movement. The Yokohama Museum of Art considers him an important printmaker connected with Yokohama and has acquired and shown his works. Little is known of this artist's achievements, however, except for the two years in which he was making Shin-hanga.

In 2012 and 2013, we received documentary materials related to Ishiwata's work from his son, Shouichi. These materials are valuable for the purpose of filling in missing information related to Ishiwata's career.

Ishiwata worked for the design department of Nozawaya, Yokohama's once the biggest department store, when it was in a period of transition from a premodern clothing store to a modern department store. It is thought that the design department was given the task of creating a new image of the department store that incorporated Western and modern features.

Ishiwata retired from his position at Nozawaya in 1930 and became a disciple of Hasui with the intention of becoming a woodblock printmaker. He found value in Japanese customs and urban scenes that contained features carried on from the period before the Meiji Restoration, and they came to be the main theme of his prints. It seems that Ishiwata reacted against the work involving modern images that he had done for the Nozawaya design department and turned to nostalgic scenes of everyday life from the pre-modern period.

Later, Ishiwata embarked on a study of *kappa-zuri*, a type of stencil printing. According to the writings of ukiyo-e scholar Narasaki Muneshige (1904-2001), published in *Ukiyoe-kai* of August 1937, and painter Tsuruta Goro (1890-1969), published in *Nihon Hanga* of September 1943, *kappa-zuri* was given renewed attention during the war years and Ishiwata became its foremost practitioner.

In the immediate postwar years, Ishiwata made a living with designs for woodblock prints, screen-printed Christmas cards, and *kappa-zuri* landscape prints. According to the reminiscence written by his wife on the back of the newly acquired *Karakusa Patterned Paper* (2012-PRJ-005), he was making a study of the latest screen printing technology at this time. Eventually, Ishiwata made prints using these techniques. The newly acquired documentary materials include some award certificates for a shoulder sash design received in the 1950s, showing that Ishiwata was seeking opportunities as a free-lance designer. *A Statement of Delivery Book* [from *Ishiwata Shoichiro (Koitsu) Documents* (2012-M-007), fig.10] gives concrete information about Ishiwata's career after World War II. From these materials, we learn that from the 1960s on Ishiwata earned money by performing silkscreen printing on products and making printing plates as well as creating original artwork for designs.

As Ishiwata's activities are traced back to the postwar period, the multi-faced qualities of the artist emerges that includes his work as a printmaker, a designer, and a screen printing technician. After working as a designer for a department store, Ishiwata went on to become a printmaker associated with the Shin-hanga movement, a *kappa-zuri* printmaker, a screen printing technician, and a free-lance designer, changing along with the age. His career raises issues that are not limited to a particular person, changes in the social position of prints and reproductive technologies in modern Japan and changing attitudes toward the profession of the designer.

---

---

# Book Exhibitions at the Art Library (Art Information and Media Center) of the Yokohama Museum of Art 【Summary】

OKITSU Miyuki, TANIGUCHI Wakako

The Yokohama Museum of Art has specialized art library. It has a collection of over 105,000 items, including Japanese and foreign-language books and catalogues. The Library organizes special educational programs in addition to its basic services of helping visitors find reference materials and managing access to the materials in the closed stack room. The book exhibition of the library collection, the theme of this article, is an example of such a special educational program. The exhibitions of selected library resources are based on a particular theme for a certain period of time. There are two types of such exhibitions: open displays, in which the materials are placed on a rack or table, and case displays, in which the materials are placed in a display case in the reading room. From 2008 to 2010, the Library presented eleven exhibitions in case display designed to help museum visitors better understand art exhibitions held in the museum. These supplementary exhibitions can be effective if the found materials with the content related to the exhibition are appropriate to the display in a case. There are cases, however, in which materials directly related to the title of the exhibition cannot be found in the library collection or there is no clear connection between the museum exhibition and that of library resources. Between 2011 and 2013, the Library held an exhibition of catalogues from the collection which was unrelated to an art exhibition in the museum. Exhibition catalogues with creative designs were exhibited in order to introduce some of the special features of the library collection to visitors. In book exhibitions supplementing art exhibitions, as mentioned above, library materials are seen as information media with an emphasis on content. In this exhibition of catalogues, the emphasis was on the catalogues (books) as physical objects. Unfortunately, visitors did not pay much attention to this exhibition. The exhibits were changed three times under the same theme, but perhaps because subtitles were not added to indicate the difference from the previous exhibition, people were not aware of the change. As librarians, we felt that it was problematic to present books in a display case since they are meant to be held in the hand and read, and we studied the programs of other libraries to find better ways of doing displays. The Kanagawa Prefectural Library had held an exhibition of its resources entitled “Wartime Library,” based on research by its librarians. The display was divided into sections and explanatory comments were provided on wall panels for easier understanding. The presence of actual books and documentary materials clearly conveyed the atmosphere of the time and the enthusiasm of readers. This “Wartime Library,” a special collection of library resources selected with attention to content, combined two ways of seeing books, as information media and as physical objects. A little before this study was conducted, from August to November 2014, our Library hold an exhibition of a similar tendency called “What is Book Burning?: Prohibition of Books and Cultural properties” (below referred to as the “Book Burning” exhibition).

The theme of the “Book Burning” exhibition was related to “Art Fahrenheit 451,” the title of the Yokohama Triennale 2014, which was being presented at the same time. This title came from a science fiction novel *Fahrenheit 451* by Ray Bradbury. The protagonist of the novel lives in a society where reading is forbidden, and the experience to witness book burning awake him to his desire for intellect. Morimura Yasumasa, the artistic director of the triennale, carried out a performance of burning a book shown in the exhibition with reference to the novel. The burning book was a source of light projected on “innumerable forgotten memories which are not considered worth remembering in real society,” that Morimura associated with “forgotten people” who in the Bradbury’s novel learned books by heart.

What sort of book burning are found in factual history rather than in novels or artistic actions? A survey

of examples of book burning in the library collection showed that books have been prohibited by a variety of historical actors for a variety of purposes in different regions and historical periods, not just as a result of political repression. Books have been subject to publication bans and various kinds of physical mutilation as well as burning. Other cultural properties, including works of art, have been attacked for similar reasons and motives. Therefore, the category of things subject to banning was expanded to books and cultural properties and the methods of attacking them were categorized more widely as “vandalism.” By showing historical examples of “vandalism directed against books and cultural properties” with materials from the collection, we aimed at getting visitors to think more deeply about these harmful acts. Who has carried them out, when and where? What was harmed, how and for what purpose?

The exhibition was structured in four sections, covering a period from the Protestant Reformation to the years after the Second World War. It included rare books like Gottfried’s *Historische Kronyck*, Geisberg’s *Der Deutsche Einblatt-Holzschnitt in der ersten-Hälfte des 16. Jahrhunderts.* and an official album of stereoscopic photographs commemorating *Tag der Deutschen Kunst* published by the Nazi German Government. Bibliographical notes were added for books and periodicals and images. Explanatory panels were provided where necessary. The exhibition was divided into two periods so that 21 items could be presented in two display cases with limited space. An open display was presented on a table in the reading room where books could be handled and perused. The list of exhibits for the case display and the open display were produced (Tables 4 and 5) as records of the exhibit. The Library’s image bank, one of its special features, made it possible to trace the history of banned books through image resources such as prints and photographs. These materials demonstrated how the vandalism directed against books and cultural properties has been recorded so as not to be forgotten. A written questionnaire was administered in the Library during the “Book Burning” exhibition. Typical comments were: “I learned about the Nazi ‘Degenerate Art’ exhibition in Germany,” and “I reaffirmed the importance of protecting expression and speech even if the content is somewhat dubious” (Table 7). This exhibition provided an opportunity for visitors to think about the history of suppression, injuring and defamation of books and cultural properties and the present situation of art and culture with regard to freedom of speech and the press. Librarians took the initiative in setting the theme and providing commentary on the content. By structuring the exhibition in this way, it was possible to produce an effective thematic exhibition that regarded books as both information media and physical objects. As librarians, we would like to continue actively organizing materials exhibitions based on careful study of the resources in the library collection.



---

---

# Introducing Documents: *Yama no ue* (On a Hill), Studio Diary of SHIMOMURA Kanzan 【Summary】

KASHIWAGI Tomoh

The collection contains six volumes of a studio diary that convey the nature of Nihon-ga painter SHIMOMURA Kanzan's creative activities and daily life. The diaries were kept mainly by Kanzan's disciples, IRIE Tahei, NAKANIWA Jakumyo (Danka), YAGISHITA Zenzaburo (Seioku), and his sons, Hidetoki and others. The diaries recorded details of studio business, including the receipt and sending of letters, telephone calls, visitors, Kanzan's activities (working on paintings, going out), receipt and disbursement of money. The main function of the diaries seems to have been to remind the artist of the large number of painting commissions that arrived day after day, demands for paintings to be finished, letters to be answered, and requests for authentication (of old paintings and the work of Shunso, Shiko, Kogetsu, and Seiho). They were also useful in avoiding trouble related to accepting or rejecting commissions, autographs on boxes, and the receipt of money. They are valuable documents for understanding Kanzan's daily activities and creative work during his late years, but have not been reprinted.

The six volumes of diaries will be reprinted in order in this bulletin with the addition of bibliographical notes as a contribution to Kanzan studies. In *Yama no ue*, introduced in this edition of the bulletin, events in the studio from October 1, 1919 to June 30, 1920 are listed without a break. Of these volumes of *Yama no ue*, the entries from October 1, 1919 to February 29, 1920 are introduced here.

# 【資料紹介】下村観山画房日記『やまの上』

柏木 智雄

## 解題

横浜美術館は、平成二五年度に「生誕一四〇年記念 下村観山展」(会期：平成二五年一月七日～同二六年二月二日)を開催し、同展を機に、下村観山のご遺族より、次の資料をご寄贈いただいた。

①『やまの上』(大正八年一月一日～大正九年六月三〇日)、和綴、

二四・七×一六・二cm

記録者：入江多平

②『日記帳』(大正九年七月一日～大正一〇年一月二〇日)、和綴、

二四・五×一六・五cm

記録者：入江多平・下村英時 他

③無題(大正一五年三月二九日～昭和二年三月二九日)、和綴、二四・五×

一六・七cm

記録者：中庭寂明(煖華)

④無題(昭和二年三月三〇日～一〇月五日)、和綴、二四・七×一六・八cm

記録者：中庭寂明(煖華)・下村英時または章

⑤『山の松葉 下村家』(昭和二年一〇月六日～昭和三年四月三〇日)、

並製本、二三・三×一六・〇cm

記録者：下村英時、下村章、柳下善三郎(晴屋)

⑥無題(昭和三年五月一日～昭和四年八月一七日)、並製本、二三・三×

一六・〇cm

記録者：下村英時・柳下善三郎(晴屋)、他

これらの文書は、観山の弟子の入江多平・中庭寂明(煖華)・柳下善三郎(晴屋)、あるいは英時を中心とする観山の子息が筆記した画房の日記で、書翰の受発・通信、来客、観山の活動(制作、外出)、金銭の出納など、画房の動向の詳細が記録される。日々、もたらされる膨大な制作依頼と作品納品の催促、箱書、鑑定(古画から春草や紫紅、孤月、栖鳳らの作品)の依頼などの備忘が、日記の最も大きな役割であったと思しく、応需制作の諾否、画料受領に関わるトラブルを回避するのにも役立てていたと思われる。

この日記群については、すでに、原三溪との関わりから紹介・分析がなされている(清水緑「下村観山と原三溪にみる作家と支援者の関係」『鹿島美術研究』「年報第二十四号別冊」、財団法人鹿島美術財団、平成一九年一月、二八六～二九七頁)が、日記自体は翻刻されていない。大正一〇年末から同一五年当初の記事を欠くものの、画房の日記は、観山晩年の日常や作画の様

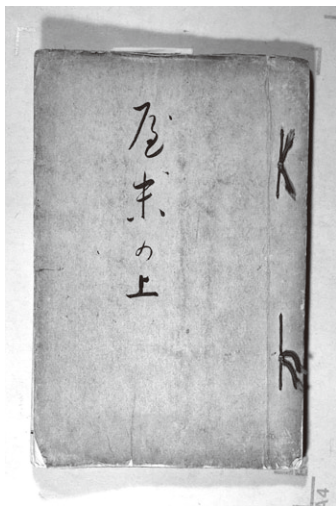
子を伝えてくれる貴重な資料であると考え、本研究紀要において、右記の日記六冊（挿図1）を順次、翻刻・紹介し、向後の観山研究に資することを目論むものである。

紀要本号において紹介する『やまの上』（①、挿図2、3）には、大正八年（一九一九）一〇月一日から同九年（一九二〇）六月三〇日までの家内の出来事が、途切れることなく墨書されている。ノドに「①中村屋製」の印刷文字が認められる市販の袋綴じ冊子（丁数一八九）を使用し、一・二丁の表側に大正九年六月三〇日の出来事が記され、六丁をはさんで、巻末に家蔵する装束の目録が記される。これは、大正九年三月二七日に江戸協会宛に発送・出品された装束二八点の備忘である。

ここでは前半部分である大正八年一〇月一日から翌年二月二九日までの記事を翻刻・紹介する。

### 観山の動向、制作

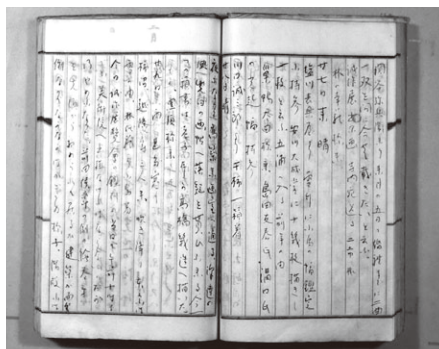
『やまの上』の頃の観山を巡る動向のうち注目すべき事柄としては、帝国美術院の創設を挙げることができる。大正八年九月六日、勅命により帝国美術院規定が發布され、同月八日、院長以下会員が任命された。原敬内閣の文部大臣・中橋徳五郎は、これを機に、在野の美術団体の統合をはかるべく、日本美術院から横山大観と下村観山を帝国美術院会員に招こうとしたが、大観、観山そろってこれを固辞した。『やまの上』の一〇月四日の記事に「大観氏より電話。先生、電話口にて九日出席の由回答す」とあり、同月九日に「先生上京。京橋□□「（香当カ）コウセツ」軒にて中橋文相等と会見との事」とある。こ



挿図2



挿図1



挿図3

これは、帝国美術院創設からひと月経過したこの時点で、会見の主旨は不明ながら、大観、観山が、文部大臣と直接、面談している事実を伝えている。

観山の子息の下村英時が著した『下村観山伝』（後藤茂樹編『下村観山 観山画集』大日本絵画、昭和五六年、分冊）には、大正八年の部分に「十一月十六日、観山会会員一行と京都に遊ぶ」と記されているが、『やまの上』の記録によれば、観山が夫人を同伴して、観山会会員と親睦を深めるために上洛したのは、一〇月一六日であり、奈良を巡って、同月三〇日に帰宅している。京都の宿所であった柵屋から柿や鮎すしなどを横浜の留守宅に送り（一〇月二五日記事）、家人を気遣う観山夫妻の心根を垣間見ることが出来る。一方で、旅行から戻ると、にわかには、箱書や鑑定に依頼に来客がひきも切らない様子が読み取れる。

文中に「○」の印影の朱文印が捺されている箇所には、観山の制作に関する記述が認められる。おそらく下村英時が『下村観山伝』を執筆するに当たり、制作の記録を日記で検索する目的で、印を付したものと推測される。その中でも、大正元年に前田侯爵家から依頼された明治天皇行幸記念絵巻は、制作に難渋し途絶していたが、東洋美術史家で帝室博物館の学芸委員であった中川忠順の督励を受けて、制作に再度着手している。大正九年一月二十九日の事に、「前田侯爵の例の絵巻第□を先頃から初められて居るが、健築が面□倒なので、なかなかはかどらぬ様子。階段には、平困だと云っておられる」とあり、建築物とくに階段の描写に苦心していたことが分かる。五日後の二月三日に「中川忠順氏宛『○』絵巻一部分送る」とあり、制作に一定の進捗があったことをうかがわせる。

この間の日記を通読すると、帝国美術院創設にともなう画壇再編への対応、

観山会会員をはじめとする後援者や関係者との交際、そして、累積する制作依頼の処理などで多忙を極める観山の日常が見て取れる。そうした状況下、大正八年一〇月五日には「大胡医院より堀医師を招き先生診察。大分胃が爛れて居る由。電話にて黒須氏へ十二日の観山会延期を申込む」という記述が認められ、また翌年二月二十七日の記事には「先生、具合悪し。例の病、眠むられぬ由」とあり、慢性的な疾病を抱えていたことが分かる。

### 記録者について

『日記帳』（②）の表紙裏に、「自 大正九年七月一日 至 大正九年十月廿五日 多平記」「自 大正九年十月廿六日 至 大正十年十月廿日 英時記」の補記がある。『日記帳』の当該期の筆跡に鑑み、『やまの上』の記録者も多平、すなわち入江多平で間違いない。当時、入江多平は、本牧和田山の観山邸で書生をしていたと推測される。『日記帳』（②）の大正九年十一月一〇日の記事に、「本日、入江多平氏、下村晴時氏二階へ移転す」と子息の英時が記している。記事にある下村晴時は観山の本名であり子息が敬称を付して父親のことをこのように記すのは不自然であるので、「下村清時氏」すなわち観山の長兄（英時の伯父）の誤記であろう<sup>脚</sup>。多平は観山のもとを離れ、『やまの上』において、「下の下村」と通称される清時（号・豊山）邸に移っている。清時は、この年の九月、日本美術院彫塑部の同人に推挙されている。また別の日記（③）の大正一五年六月二二日の記事に「入江多平氏死去の通知が豊年氏から来た。二十一日午前九時なりしと。逝年卅歳？」とあり、多平は観山のもとを離れておよそ六年足らずで死去している。記事にある「豊





【表紙】

やまの上

【表紙裏】

自 大正八年十月一日

至 々 九年六月卅日

第一号

大正八年十月

【十月<sup>(欄外)</sup>】

一日 曇天 大掃除

手伝土方男二人、女二人、魚きた。掃除済みし頃より雨降る。来客なし。

二日 概ね晴

石川安助使、箱書渡す。(一) 引船 (二) 月光 (舟ニ腰掛け足ヲ水面ニ垂ルテキル図、孤月(三) 山水。高築誠之助、画室へ通す。若松某、三ノ谷、川田氏、照介<sup>マ</sup>持参。春草筆「夏草」三男治時代の作、少しく不審故、大観氏へ持参の旨話す。午前、奥様、前田青邨氏宅を訪ふ。絵巻の下図の件。兎玉天来、船橋警察署長、同伴来訪。原田金蔵使。発信、柘屋 松茸の礼状。

三日 曇り

大塚源太郎、箱書(半切一休)、本日青森へ立つ由。

四日 曇り

今日も曇り。長谷栄吉、箱書に来る(尺八巾蓬萊)。預る。原田金蔵代人。大観氏より電話。先生、電話口にて九日出席の由回答す。

発信、長井利右衛門方川村、関西協賛会。

五日 曇後雨

三越美術部より屏風二双着。安川大成堂、此の廿四が展観故、写真の都合もあり、何卒御問合せを願ひ度しとの事。一週間後、出来いたせば通知する旨を約す。

電話、本局七八番 安川大成堂。

太田吉松、武山氏照介<sup>マ</sup>持参。以前の五拾円に、後金一百五拾円にて半切四枚と解決。斎藤元四郎、着色山水人物入を希望の由。

来信、横山大観。

大胡医院より堀医師を招き<sup>(急)</sup>先生診察。大分胃が爛れて居る由。電話にて黒須氏へ十二日の観山会延期を申込む。羽織を着る程のさむさ。夜に入れば雨さへ加はる。

六日 風雨強し

かなりの風雨に戸も開け得られず。新聞は台風と出る。午後、雨止む。乾南陽、火事の際に火災をまぬかれたらしい一幅、小督局(明治卅年頃ノ作)、鑑定に持参。電話にて大観氏へ明日の伊予<sup>(料亭)</sup>紋行きを断る。

来信、井口庄蔵、村上(旧菅沼廉)、電報にて明七日面会を求む。

発信、返電 村上(断り)。

七日 雨後晴

午前中ほとんど雨。夜になると忘れたかの様に星が出る。

八日 晴

秋晴れ心地よし。大阪堀氏より松茸着。早速晚餐に上す。白井新助、芝区佐久間町書画屋。

孤月、波に日出、箱書、観山記としてあり、図も共ニ偽筆。

先生、撫子と瓦、今迄度々鑑定ニ来りシモノ。

是真、影法師、二三日前持参セシモノ。偽筆。

福沢某（元博文館員）、夜に入つて来訪。電話、蛸殻町長井氏、大観。今宵が十五夜の由、月出づる。

九日 快晴

京橋区中橋小路角 越條福太郎

々々 灵岸島町三 坪井義意知

両氏より薦被り着。田町渡辺の奥様御出。夕刻御帰り。午後三時半頃、先生

上京。京橋□□「（香雪カ）コウセツ」軒にて中橋文相等と会見との事。南次五郎、箱

書持参。春草筆「落葉」。不在に付預る。柿沼氏外二名（越條氏と坪井氏）。

伊東、藤原某、鉄砲と箱書持参。先生が近頃紀州地方へ旅行なさるから、就

いては鉄砲が必用だと申されたとか。小柳町大久保の伝次様よりの手紙故、

今日持参いたせしと云ふ。何にかの間違ひだと云つて、箱書だけ預つて鉄砲

と弾七十発は返す。佐青木宣一、南画ニ観山ト落款ノアルモノ四幅持参。長

谷栄吉の使、箱書。

山笑ふ、山に雉の飛べる図、六月頃の景色。

出山釈迦、尺五巾。関谷小次郎が寺の分として描かせしものなれど、二幅とも長谷の手から箱書に来る。先日の蓬萊の箱書も渡す。東京会田中良助、夜に入りて来り、此の廿日頃までにとの事。呼出電話、番町二、九四一、小寫大成堂より電話にて催足（ツツ）、十一時頃先生帰宅。

十日 晴 後雷雨あり

朝、電話を黒須様へつなぐ。来客、島田友春、岡野抵策、原田使、（尺五、一枚位にて解決）。黒須廣吉、松寫勝之助（南ノ箱書渡。春草落葉）。黒須様来ての話。観山会、来る十六日と決定。

十一日 土曜日 晴

夕、先生と下の下村を訪ふ。渡辺実、郡山の菊地某、鑑定「引舟」。此の引舟の図は先日京橋石川安助より参りしものと同一の図、唯、彩色のや、淡きもの五百円と、其他、荒木十畝等の幅二、三と東京の書画屋と交換せし由。

十二日 晴

村松雨石、半切依頼の件、謝絶。沢津松溪、展観ノ件。保田龍門、栗山清太郎同伴。十一月白木屋ニ於ケル南紀展覽会出品画ノ件。寺内の使、北方堀口橋（カ）氏の表装持参。岩崎（歯医）友人一名、夫人同伴ニテ邸内拝見トノこと。光用穆、川上邦世氏紹介。夜、堀口氏宅へ表装出来の幅持参。代、三十三円五十銭預る。「○」安川大成堂息へ二尺巾愛蓮ノ図渡す。

十三日 曇り時々雨降る

来信(書留)、黒須氏より鉄道切符来る。午前、乾南陽他一名同伴。奥村とか云ふ卒業生の由。夜、下の下村の御夫婦来たる。諸井婦人の帯二本へ日本三景を描く。

十四日 概ね曇り

真砂子町諸井氏宅へ電話を通ず。千葉島田友春氏より、卵子五拾余入箱着。夕刻、諸井四郎氏来訪。帯渡す。石川安助代人、依頼画の件にて来る。発信、島田友春(礼状)。

学校の裏から見える山(天徳寺山とか云ふ)を崩つしてゐた土方の一人が、大きな土塊の下になりて速死<sup>マツ</sup>とか云ふ。

電話、小石川二、二七九 本郷湯寫新花町九十四、諸井四郎。

十五日 水曜日 晴

沢津松溪、芝区築地清水禎治、箱書ニ来る。図、逝く春と題して箱書す。四十二、三年頃作。野辺に牧童二人、鳥をかこみたはむる図。下の吉田の婦人、箱書に来る。鍾鬼<sup>鐘</sup>。三越清水氏、屏風の件にて来る。彼の屏風は中村、朝吹両氏に寄贈の由。揮毫料は五千円にて、内金一千円持参。此度の観山会の下図「淀君」二尺巾と尺八の(中央に船があつて山があつて虹があつて雨が降つてゐる。蓑を着た二人は舟に居る)は柘屋へ贈るのだそいな。

十六日 快晴

午前の八時頃、京都観山会へ御立ち、十時頃自分も文展へ行く(午後十時半

帰宅)。不在中、水戸の渡辺氏と京都の放光堂より生鮭と松茸着。

水戸市上市裏信願寺町八、渡辺実

京都市烏丸通二條下ル、石田放光堂

下の吉田へ箱書届く。

十七日 概ね晴

午後、赤羽雪邦氏使、月琴と箱書持参。平塚、中根へ四百円計り支払ふ。林の奥様の移転、荷物夕刻荷造りなし出す。明朝十時頃迄には着く由。総数四十五個。

神田区猿樂町二丁目三番地

午前京都より電報にて無事着と知らせあり。原田金蔵使、何やら奥様にと小さき箱入りのもの持参。

新潟県中浦原郡金津村、渡辺喜四郎

と書いた札が付いて梨の荷一個着。送り状が来てないから、運賃は此次頂きに出ると云つて帰る。

十八日 土曜日 晴

神田へ移転に就き、午前、東京へ出掛けらる。珍らしく大人が留守。淋しそな顔もせず遊ぶ。□□らしきものなり。親をはなれた淋しさならん。午後、日下吉平氏代人、観山筆「雪景月夜」持参。手紙、菓子折共預る。

来信、赤羽雪邦。下谷区谷中坂町七九、赤羽知足。

林の奥様、午後十一時帰宅。

十九日 日曜日 晴

画室、小座敷をさがす。未だ見あたらず、不可思議な事なり。美濃安八郡の渡辺文三より柿(四十七個入)着。石岡町、太田吉松氏より栗着。京橋区柳町二、稲垣利恭より箱書願ひたしとの事。

来信、有朋堂、小菅一、渡辺文三。

廿日 雨

柀屋より松茸着。

廿一日 曇り

大塚源太郎、奈良漬樽呉れる。先頃の東坡先生の屏風の一件、佐々木氏は一万円位へにて手に入れ度き由。三の谷、門田氏より屏風(松)拝見に出いと、電話にて申越む。

発信、柀屋(松茸の礼)。太田吉松(栗の礼)。渡辺文三(柿の礼)。  
来信、長谷栄吉。

廿二日 晴

根岸鉄太郎、宮川大寿旧博文館員、明治四十三年十二月(五浦時代)、知人より依頼され、絹本にて、二尺巾、長サ四尺五寸を依頼した由、揮毫料として金三拾円を価額表記にて絹を書留にて着せし由。尤も奥様の手らしき受取のはかきと、其節、絵絹屋よりの受取を持参してゐる。追加金をするから何分御願ひ、たすと云ふ。麻布区笹筒町五番地。梨の箱を開ける。八十五個入り、梨の受取来る。山田様と相談の上、奈良ホテル宛、オホツカヒトツニ

テカウヘンマツと電報(至急ウナ)にてうつ。料金九拾銭也。林の奥様、絵巻下図の件にて横須賀へ行く。三崎にて何んでもよく当ると云ふ、鶴屋の番当来り、御預けいたせし太物頂戴したいと云つてゐるが、誰れも留守にてわからぬ。

廿三日 曇り

奈良ホテル宛、うった返電が来ぬ。奈良を御立ちになったかもしらぬ。英時君、修学旅行(那須塩原方面)の由にて、午後六時頃出掛ける(廿二日)。  
発信人、ヌマタ、として、アス、ゴック、オマチタノムへと返信付きにて電報来る。消印は芝浜松町局とのみ。多分、沼田一雅氏かも知れぬ。然し沼田氏の居所不明につきそのまゝになす。

廿四日 雨

山田様来り、本月末十五日位の予定にて、塩原へ御出掛けの由。  
来信、東横浜駅より荷物到着通知書来る。郡山よりリンコ(リンゴ)の荷発送の由にて、午前(お)たけにて帰る。そら豆蒔く。

来信、南葵育英会、安川大成堂、沼田一雅。

東京府下渋谷町一、七九六 沼田一雅。

封書にて電報の事申し、面会を求む。早速返電す。

アルヂ、ルス、ノチ、シラス。

廿五日 雨後曇り

午前、東横浜駅へ荷物の件にて行く。大坂堀喜二氏来訪。箱入呉服物呉れる。

北海道、太田鐵次郎氏より塩鮭着。

来信、内山種一（書留、為替券三円在中）。

広島県府中、浅野定二郎。

太田鐵次郎、町田清治。

発信、太田鐵次郎。佐野。

東京本所小泉町三五（墨竹）、土屋耕造より箱書の幅着。東京下谷区西黒門町三、内山種一より箱書の幅着。京都柘屋滞在の先生から柿一箱、香魚すし一箱来る。柿もスシも早速一同にて拝味。奥様よりの御手紙に、あちらにて二三枚御執筆の由、画印並びに裕、羽織等を送れとある。魚喜多の家内昨夜□□にて死去、弔みに行く。

廿六日 晴

高寫屋店員に栖鳳紙五枚渡す。トランク一個、柘屋宛桜木町駅より出す。一

円六十二銭也。小玉天来氏来訪。

発信、横浜新聞社（為替二円返送）。北海道三上運送店、長谷栄吉 散木画社、

伊東源四郎、内山種一、林萬芳。

廿七日 快晴

来信、東京大林区署、橋本関雪（仏像集）。

発信、橋本関雪（礼状）。

中根の話、これから芝が百坪位いる由。下水工事費、一百六拾七円八拾八銭

五厘の請求書受取る。

五浦七一八番 原野。

実測面積 一反三畝拾五歩。

々々 三畝拾八歩。

右を私受希望あらば、十月十日までに当署に出願せよと、云ふのである。

廿八日 雨

観艦式なれど相憎くの雨。水戸、渡辺氏、齋藤隆三氏同伴来訪。渡辺氏、箱書の板置いて行く。沼田一雅氏より電話。

愛知県碧海郡安城駅前、杉浦市治郎

書留にて百円の為替券在中の封書、絵絹の包着。明年の一月までに何でもよ  
いから御染筆願ひたいと云ふ。一先帰りまで預る旨返事出す。町田清治来訪。  
明治四十年、尺幅、金拾円持参の由。現今ではあまり不足ゆえ追加金百円い  
たしたい。凶は寿老で仕上、尺巾、丈四尺五寸位。

新潟県南蒲原郡中之嶋村字中之嶋、堀半次

封書書留にて箱書を依頼して来る。為替券六円在中。

廿九日 曇天

安城駅前、杉浦と云ふ者へ、昨日の百円券を断り状と共に返送す。

卅日 晴

午前八時頃、先生帰宅。日下氏使、手紙持参。安城駅前、杉浦氏宛、絵絹返  
送（普通便）。午後二時、桜木町東本願寺へ飯田氏の会葬に行く。本郷向ヶ

岡弥生町三番地はノ三号、電話、小石川三五八五 黒須廣吉



卅一日 天長節 曇天

岐阜、五藤竹重郎氏来り、来月中旬に入用なれば、是非願ひたしとて、菓子料五拾円を出す。これは留守とて返す。五藤竹重郎発信の松茸着。

十一月(欄外)

十一月一日 土曜日 曇天 旧九月九日

先生が御帰りになつて在宅だと、俄に箱書だの鑑定だのと人が来る。鎌倉の表具師だと云つて、孤月筆の幅を五、六幅持参して、何れも箱書をして貰ひ度いと云つてゐた。そのうち一幅大横物があつた。出陣の処か知らぬが、真中に大将分の鎧武者(び)が立つて、前方を悲な眼でみつめてゐる。左右や後の方に、家来らしきものが腰を落してゐる。中には女で鎧を付けてゐるのもある。孤月にしては珍らしい図だと思つたら、孤月ではないそうだ。孤月は人物は描けない人だそうな。だから偽筆だと云ふ。孤月が値がよいために、出品画にでも描いたものを落款をいれたのだらう。今一つ、半切で春草で柳に燕の図があつた。この図は、以前、信州の書画屋が鑑定に持つて来たのを、下谷の前八重が買ったのだつた。これも全く偽筆。午後になつて、京橋の古物商理事とか云ふ肩書の付いた名刺を持つて、氏家某と云ふ男が来た。春草の大幅、これには横山大観の五月雨の頃と云ふ箱書がしてある。鑑定して戴きたいと云つてゐた。先生ハ見て疑問だと云つた。山形巳之次郎氏来訪。茨城県に、花崗岩で一丈三尺の石燈籠があるから差上げ度いが如何ですと、写真を見せてゐる。白痴威の燈籠である。何処へすゑるつもりかしら、其他、支那官服二枚(夏物)を置いて行く。

二日 晴

高田の小菅氏来訪の由。

三日 曇天

千葉島田氏へ返電。小玉天来氏来る。

四日 雨

島田友春氏来訪。新潟の堀半次と云ふ人から来た箱書依頼の小包を開けてみると、北斎の描いた様な狐が描いてある。六円の為替券に手紙を添へて、箱の中に入れて返送する。本な所の土屋と云ふ男から来たのが墨竹で、下谷黒門町の内山からのが両国の煙火。これは両方ともに真筆である。尺八、六枚と尺五、三枚の絵絹を張る。島田氏と入り違ひに渡辺実氏来訪。夜、五藤竹重郎(東京)より電話。

五日 晴 旧曆 九月十三夜。

発信、紀淑雄、嶋盛図、土屋耕造、南紀美術会徳川家

内山種一箱書(川開き) 発送。長谷栄吉、箱書持参。半切「一休」、先日、大塚に渡せしもの。今一枚の半切「錦木」、南次五郎に渡せしもの。尺八を二枚新たに依頼したいと云ふ。一枚は帰去来(観山会のと同様なもの)。一枚は白菊、これも観山会に描きしものと云ふ。今は中村房次郎氏蔵と云ふ。多分老人が白菊の前に立つて居る図なのだと思う。

日下吉平氏、麴町三番町二。新橋二、二七一。

伊東源四郎来訪。夜、田中良助より電話。

六日 晴

三越清水氏来訪。越後より梨着。多分、井口様前の料理屋だらうと云ふ。

七日 快晴

京橋高島屋高橋初郎氏、秋の展にて、二尺巾、一、尺八、一、都合二枚の絵絹持参。廿一日頃開会。青森、宮越正治氏より林檎荷一個着。川島鉄之助来訪。画帖の催足。<sup>マツ</sup>

来信、松岡文橋。

八日 晴

原田金蔵来訪。大塚より電話にて、午後伺ひ度しと云ふ。

発信、宮越正治（林檎礼状）、島田友春、長岡常磐楼（梨子礼状）。

〔○〕二尺巾、唐美人、大阪三越沢津松溪氏宛、書留にて出す。夜、沢津氏より十二日に伺ふ旨、電報あり。

九日 曇天

赤羽氏、手紙持参。大野氏来。箱書と月琴の件。箱書は三平ノ図の由。日光、小村溪雲氏来。大塚源太郎来。鑑定もの持参。尺五巻り墨、風竹（偽筆）、遠山の春（真筆）。

十日 曇り 寒むし 火鉢を出す

加藤とか云ふ通信記者来。千登世女将来る。大阪三越沢津氏より電報にて無事受取ると来る好意を謝すと申し来る。五藤竹重郎、長谷栄吉来。高橋徳三来。

岐阜県武儀郡吉田村西町、林代蔵

小包にて毛皮、葉巻一箱着。長谷栄吉は、帰去来（二尺巾尺八巾）一枚と半切一枚だけ今年中に御願ひいたしたいと云ふ。

〔欄外〕拾日 <sup>以下欄外</sup> 安川大成堂より展観集一部来る。此の終りの方に、先頃鑑定に来た春草の横物 <sup>び</sup> が出てゐる。

十一日 雨

此頃の天気は毎日雨でヒヤ／＼とさむい。これがあたりまへなのだらう。三越美術部清水来。明日、午前中に出来の旨話す。夜、電話にて日本橋の古物商某であるが、一週間以前御願ひいたした箱書が出来てゐるかと思つてゐる。話しが馬鹿にせきこむのであるので聞きとり難いか、<sup>び</sup> こうである。春草の横物で船に三人の  が乗つてゐる図が、何日、箱書 <sup>び</sup> 出来るかと云ふ。箱書等に預つてない。何かの間違ひぢやないかと聞きたゞすと、間違ひでしたと云ふ。そして、持つて上つたら何日出来ますかと云ふ。あれは疑問の画であるから断つてしまったものだと電話を切つてしまった。これは、此月の初めに古物商理事何とか云ふ、やかましい肩書の名刺を出した男が持つて来たものだ。昨日夕方、京都柘屋から湯殿のスノコ <sup>び</sup> か三枚来た。珍らしいスノコである。

八八 <sup>欄外</sup>

十二日 曇天

岐阜の野村忠左衛門より糶糶漬 <sup>び</sup> 来る。昨夜電話で話のあった日本橋の竹内とか云ふ男の使が春草の「五月雨の頃」を箱書に来る。すでに大観の箱書 <sup>び</sup> か

してある。観山観と裏へ入れる。此の幅と雅邦先生の四幅対とで、一万五千円にて、此間安川から求めしと云ふ。〔○〕三越美術部清水氏代人へ尺八双幅「静清」渡す。午後八時頃兒玉天来氏来。漬物樽二個呉れる。

岐阜県羽島郡上中寫村字仲、野村忠左衛門

十三日 概晴

京ばし石川安助代人来。十二月十三日、展観に就き、写真等の都合あれば本月下旬に入用の由。夜、碗屋主人来。

十四日 雨

深川東元町二、安藤徳三郎より小包にて大きな菓子入の鐘着。此人より、先頃、安藤サク出として、菓子折小包にて来りしも、何う云ふ訳か知らず受取。今日も亦来る。不思議故、き、たゞす。杉山仙助へ振替にて拾八円七拾錢払ふ。為替五拾円くむ。伊豆の山田様へ送るもの。横電の従業員一同怠業のため、午後五時頃より運転休止。夜、東京会田中氏来訪。来月三日展観に付き、此の廿日頃までに願ひ度しと云ふ。承知の旨返答す。南紀美術会後藤氏より電話、十七日より白木屋にて開会の由。

下谷 甲 七七〇番 後藤

十五日 晴

精華社小林来。錦絵芝居集成一冊、精華帝展号一冊呉れる。大阪三越沢津氏来。二尺巾揮毫料、一千二百円持参。受取出す。先生と三溪園へ行く。美術協会のため蔵品珍列。小柳町大久保の夫人来。真島彦次郎氏へ日下氏預りの幅渡

す。岐阜の書画屋岡本喜三郎より送り来たる。雨中の船ノ図は偽筆、返送すべく荷作る。自分達等外出した留守に、石原氏が岩立義太郎、杉山環湖の二人を連れて来て、一百円と尺五の絹本を出して無理に依頼して帰った由。

十六日 快晴

赤羽氏代に大野と云ふ人来る。「三平」の箱書の蓋と月琴渡す。所得税と戦時利得税と合せて三百七拾五円納める。岐阜岡本の鑑定物返送。ホト、ギス社の山名氏来。十八日午前の約束。野毛の倉林氏、石原氏と来。水戸渡辺実氏より納豆着。渡辺氏自身も来る。

十七日 概<sup>マ</sup>ネ晴

島田友春氏来。大分県日出町井上勇五郎氏より、シヒタケ着。相沢某鑑定。南画に観山の印あるもの。巻<sup>マ</sup>り四枚。天谷某、風竹(尺五)鑑定に持参。先生と野村サムライ商会へ行く。野村氏の話。先日御依頼したのを、一枚で結構ですから何分御願ひすると。二千五百円で十枚描けと云ふ注文は取消になる。

十八日 雨後 晴

飛騨国吉城郡上宝村蔵柱、中畑米次郎  
日本アルプスの自然生山葬<sup>マ</sup>たと云って送って来る。此の男は小学校を建てるから寄附して貰ひ度いと云って来た事がある。ホト、ギス社から画をとりに来るかと思つたら、今日は来ない。夕方茅町の横山様へ電話を掛けたが、話の出来ぬうち時間で切れてしまった。

十九日 快晴

出雲崎、佐藤吉太郎来。画帖、及び寄附画（二尺横物切）渡す。兵役の件にて市役所へ行く。ホト、ギス社山名氏、小品、〔○〕紅葉ト茸の図渡す。松岡文橋来。龍村平蔵、江中無牛来。小林源太郎氏来。中央美術協会下山某、来月中旬展観の件にて来り、箱書の蓋預る。高嶋屋美術部使来る。栖鳳紙二枚渡す。珍らしく、井上徳三郎来。

廿日 快晴

江中氏来。龍村氏の帯地展覧会の件。午後より先生と帝展行き、夜八時頃帰宅。〔○〕高嶋屋美術部使、二尺巾双幅、高士観瀑渡す。

廿一日 雨

夜、東京会田中より電話。大石静雄来。箱書預る。午後、碗屋の会へ御出掛け。雨のためとて半日にて終ふ。廿二日 夜、十一時帰宅。

廿二日 土曜日

長岡井口庄蔵氏より鮭かす漬着。午後、東京行き伊予紋<sup>〔料亭〕</sup>の由。上田恒治、箱書二来る。武山との合作蓬萊。渋谷の杉浦某、黄初平（席画）箱書二持参、預る。大塚源太郎来。鑑定。風竹と小品。奥様昨日頃より□□□□のため寒むけなす由にて、一日中御寝み、夕刻大胡医師に診察を乞ふ。□□□□のためなれば心配なしと云はる。先生帰宅、一時半人力車にて御帰り。紙入紛失なせし由。

廿三日 晴

高嶋屋氏より良寛の本着。井口庄蔵様、鮭、礼状出す。岐阜県武儀郡吉田村西町、林代蔵より毛皮、箱書の幅着。川口誠三郎より樽柿着。福岡市天神町小横丁、深江千代壽、洪沢さんへ行つて居る寿老（尺八）の偽筆を箱書に送つて来る。此れは観山会に描きしもの、箱書料が拾円入つてゐる。

廿四日 雨

松田の使来。紫紅筆「山雨」箱書預る。一日晴れると、少なくとも三日は雨の多八月なり。黒須廣吉氏来。〔○〕東京会田中良三来。尺八「竹林高士」渡す。安川喜一郎来。目出度かけにと、一千元出して無理に置いて行く。再三断るもとう／＼置いて行く。安川より電話にて、大彦の羽子板があった由、通知して呉れる。京都野口様奥様より小包来る。

廿五日 曇天

安川の使、羽子板持参。井上の親父「来」渡金盛物台（徳川初期のものらしい）持参。これと以前持参せし巻絵の筥にて尺五一枚を御願ひしたいとの手紙。百五十円の由。断り返却なす。原田金蔵使来、催促。廿五日の約束の由。京橋区木挽町四ノ二 井上質店 松田の使来。紫紅筆山村の箱書渡す。亦、養由ノ図預る（紫紅筆）林代蔵、深江千代壽の書、箱書、書留にて出す。明治大学生、若松正一と云ふ者来り、大学昇格の基金のため絵を寄附しろと云ふ。中川忠順氏来。田町の渡辺様、

下の下村の祝に来る。太田鐵次郎様来。  
発信、松岡文橋、林代蔵。

廿六日 概 晴

〔○〕島田友春氏来。尺八□渡す（漁船あり虹を見る）。もと美術院の看板等を書きしと云ふ関野とか云ふ男、東洋美術研究会幹事などと云ふ名刺を持った某と同伴にて来る。高橋徳三氏来。鼓の胴を置いて行く。石川安助より電報にて催足。市内尾上町高橋三郎、紫紅筆（席画）五條の弁慶図、箱書に持参。

廿七日 快晴

東京の水木伸一と云ふ者、崑山筆「竹と郡雀」鑑定に持参。偽筆。静岡の山梨氏より蜜柑箱入二個、箱書幅、一個着。

静岡県庵原郡江尻町 山梨謙蔵。

竹田露村来（本美日本画出身ノ由）。〔○〕石川安助、尺八、一枚渡す（問答）。

大塚源太郎来。尺五、墨画、風竹、鑑定に持参。先頃預りし風竹と同一のものなり。箱書と云ひ、絵と云ひ、よくも似せたり。今日持参いたせしものは、正銘真筆。以前のは、四度来り二度真筆と返答せし程、巧妙に出来たるものなり。長谷の一休の（半切、大塚が青森佐々木氏に土産にせしもの）箱□枚持参。これは二枚箱書せし故、一枚は受戻して貰ふ。

廿八日 金曜日 曇天

大先生の法事の爲め、一同東京へ行く。留守中、琅玕洞主人、安川大成堂来りし由。出品の観音像着。画室へ安置する。黒須氏来訪。来月四日、観山会

の人々来浜。三溪園へ来るとのこと。〔○〕尺八、虹（山麓に虹あり傘さし走る人二三人）黒須氏へ渡す。これは先頃観山会を京都に開きし際、松茸狩の礼の由。赤尾藤吉郎（返信書留）大宮川大寿、青森県山崎清三郎より鑑定の幅着。偽筆（海辺の図）。

卅日 雨 日曜日

神戸中西嘉助来。矢部岩蔵、山崎清三郎、返信出ス。郡山川口誠之助来。画帖尺五、六枚の催足。

〔欄外〕  
十二月

十二月一日 晴

原田金蔵代人来。宮川大寿来。齋藤隆三氏来。信州片倉代人来。齋藤隆三氏へ光起、化狐、御貸しす。

二日 晴

島田友春、川嶋鉄之助、大塚源太郎来。異画会出品画の老子（木炭にて線描させしもの）と夏の富士と題せし幅持参。児玉氏来。午後三時、諸井様へ御出掛け。午後十二時、帰宅。

三日 曇天

東京会田中来り石原氏「文珍」<sup>〔殊カ〕</sup>の手付として、金一百円置く。赤羽氏を介し□□の三幅対と尺八とを交換せし本人（信州の人）来。片山久、下山吉田儀作氏の件にて来る。赤尾藤吉郎より、一口尺八一枚にてよしとの返あ



り。夜、石原氏へ一百円届く。山梨県謙蔵氏箱書鉄便(鉄便)にて出す。

四日 曇天

来客の準備。高嶋屋店員、秋の会、二尺巾双幅の代、二仟五百円持参。片山  
久来。午後二時、高田様令夫人等、御六人來。夜、自分は夜行にて出発。

五日、六日、七日、留守。

原田金蔵、尺八、〔○〕「夕月」漁夫、停船、児童垂足。

八日 晴

午後四時帰宅。〔○〕安川大成堂へ尺四巾、高士渡せし由。

九日 晴

井上徳三、琅玕洞主人、渡辺実来。

十〔○〕二尺巾、竹林弹琴(倉林氏)の分。先生自身、石原氏宅へ持参。尺  
八の双幅をこれにてすませたしとの事。山崎清三郎、小包にて出す。

十日 晴 霜を見る

林の奥様東京行き。障子張り。春草未亡人、令息来。大阪三越より箱書の蓋着。

昨日、府中の浅野と云ふ人から、府中味噌が一樽来てゐる。今日は国府津の  
高田令夫人より蜜柑が来る。〔○〕渡辺実、尺八、蓬菜渡す。

十一日 快晴

障子張る。箱根小涌谷温泉の榎本恭三、菓子折、尺八絵絹持参。先年、先生

当地へ参られし節の御約束故、何分御願ひいたし度いと云ふ。先生は知らな  
いと云ふ。菓子折と絵絹預る。松岡文橋来。ギヤマンの瓶、三個持参。大院

君の持ちしもの、由。これと二拾円を包んで来て、色紙二枚を描いて呉れと  
云ふ。昨日、渡辺実氏に渡した蓬菜は高嶋屋で焼かれた春草、大観双幅の代

りに持主へ出すのだそうだ。神田一つ橋俳画堂より箱書に來た張果老は、佐  
藤日天と云ふ新聞記者にやった画帖を表装したものである。

音(菊)きくから鮭着。根岸鉄太郎来。手紙等を整理すると十一月二十八日附の手紙  
と云ふ者から銀行小切手で二百円封入して、明治四十二年六月中「河渡りノ

虎ノ図」を依頼してある。子孫に伝ふるものであるから、雀一羽でもよいか  
ら描いて貰ひ度いとある。寸法は別に記してない。

十二月四日附手紙

高崎市本町 櫻井忠三郎

塩川兵弥より周旋されて求めし屏風、豊公三百年祭の桐の花の図は真偽(真)かた  
しかめたいと云つて来る。

十二日 概(マ)ね晴

乾南陽氏来。佐藤一齋の書持参。百三十拾円、現金にて支払ふ。関谷弥兵衛、

鶴殿長康来。浜町中島元芳箱書来。扇面、二、白藤、石草(石)、春草色紙直し「月

夜」。野毛倉林氏より電話にて絵を受け取りし旨申す。

十三日 土曜日 曇後雨

朝より曇り、午後に至りて雪さへ降る。甚だ寒むし。雪は雨となる。瀬能正太来。裏粕（粕）「日出」の催足（足）、原田金蔵、礼に来る。山の下、春木とか云ふ家で電灯の線を設くのに、樹の枝が邪魔になるから、切らして貰ひ度いと電話にて申し来る。埼玉原草加町大川十三代、引舟図、鑑定に来る。偽筆。井口庄蔵氏より、荷着。

十四日 晴

東京□特殊小学校より寄附画の催足（足）に来る。画帖預る。横浜商工課長の吉田と云ふ人、展覧会の件にて来る。京都終より魚着。大阪三越箱書出す。サムライ商会野村氏宅へ尺八「○」「雲来」持参。表装にまわして貰ひ度との事故、預り帰る。

十五日 曇後雨

寺内新太郎氏来。中根、平塚へ五百円支払ふ。残金二六円余。二三日前に来りし鯛は、舞鶴にて一万五千からとれしものと云ふ。長谷栄吉使来。小屏風預る。

発信、井口庄蔵、松岡文橋。

十六日 晴

田口巳之吉、柴田克己氏の使にて来り、大観氏の小品、竹、持参、預る。午後二時八（料亭）膳に高峰博士に会すべく、出掛けらる。「○」松岡文橋氏来。尺五「雲来」一枚渡す。先日の色紙は二枚にて、小切は取消す事、色紙二枚と

念を押す。斎藤元四郎来。井上徳三来。灯一個預る。夜に入つて平林大虚氏来訪。画会をするから先生に御承諾を得度しと云ふ。画会も月並の画会のようにきものでなく、自分の研究本位の後□会（後）だとの事。清方や高田早苗氏等が賛助員を承諾したと云ふ。小柳町大久保の伝次君、夜に来。先頃まで、北海道へ旅行して居たと云ふ。探幽の三幅対だと云ふのを鑑定に持参。其時の話。卅貫になる熊が一匹中野にあるから、それを殺すとき美術家の天狗達をして、何処か山へつれて行つて銃殺させ度いと云つて居る。

十七日 晴

箱根小涌谷、榎本恭三と云ふ人、先頃、尺八の絵絹を置いて帰つて、今日出なほして来る。謝礼は出来の上に頂戴すると云つて、揮毫を引受け（引）しまふ。此の牛込の青木と云ふ人の家内が、箱書を二ヶ持つて来る。紙本の半切、竹に（紙）ババ鳥の図は、二枚にはがしたものである。一寸銃筆版の様に見える。印だけは写らないとみえて、印の処は切抜いて後から入れたものだ。今一つの色紙の直しは、安田鞞彦の畑のものに観山と印を押したもの。島田友春、琅玕洞主人来。桐のクリ盆渡す。大久保の伝次君来。昨晚の探幽返す。黒須氏来。石川丹麗女史来。画帖二預る。年内の由。謝礼として、伍拾円持参。遠山氏の尺五もと云ふ。三越清水氏来。静清の箱書に来る。揮毫料、二尺巾双幅にて、千七百円也。夜、尺五「○」「清水観音」を石原様宅へ届ける。鈴木良治氏の分、屏風を手伝つて貰ふべく出掛けたのだから、静岡へ行つて不在。

十八日 晴

朝、電話にて、横山様へ今日の忘年会断る。野毛倉橋氏より二斗入酒樽（載）載く。

国華社蔭山氏来。寸法何にてもよし。本郷高谷氏代人、安田市太郎来。井上徳三来。此間の灯明台、八拾五円だとの話。

十九日 晴

朝日新聞の横尾と云ふ男、しきりに面会を求む。「丹青」の主人が、本月か来月中に面会したいからと云ふ。木村久雄より荷着。豊崎俊文より蜜柑一箱着。本郷高谷氏より林檎着。堀口氏へ歳暮に行く。夜、高谷氏の礼状かく。

廿日 慨晴（編外）

発信 五藤竹重郎、坂奇坦（朝日新聞）、高谷豊之助、木村久雄、豊嶋俊文。堀口氏来。倉橋の件、柘屋西村善三郎氏、櫻井定二郎来。中央美術協会（下山儀三郎）より歳暮品着。高築誠之助来。

廿一日 日曜日 曇り

福沢市太郎来。追加金一千円を出し以前の百五拾円にて、色紙か何か小品二つほしいと云ふ。奥様が受取出す。先方では、最初、色紙二枚、短冊三枚（絹無地）、尺五双幅、尺八、一枚と云ふ申込なりし由。倉林氏来。宮内省本金庫へ受取出す。書留にて、鶴殿長康 □ □ □ 濟寺の水指様のもの持参。湯本福住橋畔、背妹尾春太郎より塩から着。

廿二日 快晴

大野様、葉礼払ふ。第三期所得税、戦時利得税支払ふ。越野様（琴）へ行く。宮内省よりの手当、三井銀行にて手続き済み。林奥様来。

肥前大村町 高比良雄之充

より蜜柑一箱着。青森宮越正治氏より鯉節（白木屋使持参）来。

廿三日 晴 冬至 ゆづ湯。

朝日新聞の横尾来。明治神宮御屏風の □ □ □ 図の腹案と、申年に感して何か伺ひ度いと云ふ。サムライ商会野村氏より電話にて、先日、御覧に入れたペルシャの瓶や壺の中、御気に召したのを差上度いと云ふ。【○】老松に寄生木、六曲一双仕上る。原様の使に渡す。

東京府南千住町百拾六番地、池田屋

電話下谷三二三二、乙部喜兵衛

例年の如く、漬菜一樽の送状来。夜、太田吉松より電話。

廿四日 曇天

太田吉松来。年内、半切二枚送る旨約す。鴨一羽持参。青木の家内、雅邦先生幅鑑定に持参。豊公祭の屏風半双、極めを得度き由。三溪園河田氏、光琳筆、虎、御貸す。松岡文橘氏来。箱書（尺五 雲来）渡す。徳川家にて女中の用ひし羽子板、歳暮として鬘斗を付けて持参。大村マス来。佐藤益之氏の依頼にて、尺八に寒山拾得を願ひ度いとて、金五百円包を置く。根岸鉄太郎代人、二人にて箱書持参。三幅対「三上戸」、大正八年試作展出品画、井上の桃山屏風と交換せし二五巾、隠士（竹林遣遙）、石川安助使鑑定。高崑屋、双幅、会へ出品せし「三平石葦」。大塚源太郎来。大石静雄氏、箱書渡す。

廿五日

青木堅太郎使、屏風渡す。興業銀行の利子、一、二六〇円、三井銀行へ持参。紀州の橋本と云新聞記者来。高田様より小荷物着。酒樽、四斗入着。差出人は向井としてある。大阪、日本美術株式会社より小包にて、拾円債権三枚来る。土浦板野氏よりワカサギ着。本所東之町安藤徳三郎より、御歳暮として菓子来。これにて三度目、一向に思ひ出せない。精華社より本着。高嶋屋□殿塚来。箱書「○」「高士観瀑」渡す。「オモダカ」箱書預る。

廿六日 晴

目黒十郎氏より梨着。長井利右衛門より茶来る。例年の如きもの。赤尾藤吉郎来。(午後) 尺八二枚と話さまる。一枚は年内にて、後一枚は来年追加金を持参して頂戴すると云ふ。

廿七日 晴

大阪市北区堂島浜通一丁目、大日本美術株式会社

拾円債権三枚、書留便にて出す。神戸市野島呉服店、袋布(布袋)(半切、村松雨石氏へ渡せし函) 箱書出来したれば、書留(四四九「号」)にて出す。観山会にて、午後三時頃御出掛けにならる。八百善(軒)の由「○」木村博士の処と承る。絵は尺八双幅、右に悪鬼の腕を抗して立ち□□□の調べを聞く。左、官女風の美夫人□□□を弾ず。近来の傑作の様、拝見す。増田義一氏の分。帰宅十二時過ぎ。夜、暮の市へ□□□を買ひに行く。甚だ寒し。チラ／＼落ちるものさへあり。廿「夜」、竹田文吉氏より四斗入酒樽着。肥前の高比良氏よりカラスミ届く。

廿八日 雨 甚だ寒し

山田様より御歳暮として、画室用電球三個贈らる。日本橋「○」音菊の画帖、川口誠三郎の画帖、紀州新聞の橋本某の画帖出来。東京府荏原郡大井町倉田三四〇五、特殊小学校後援会、小原梅太郎英時様歳暮に行かる。東京の親戚方々ならん。京橋の高嶋屋付近の洋服屋来。箱書蓋「オモダカ」二五巾横物、依頼する。

石川県能美郡板津村字高臺、高林澄月

昨夕、「このわた」青竹に入れるもの二本着。中央美術協会下山儀三郎の尺八揮毫料、一千円の預り云々の件にて、不明になってゐたが、はからずも一千円の包紙が出て来て、預つたと云ふ事がわかつた。中央美術協会としてあつた。彼の男が先頃来ての話。七月頃に御預けしたと云つてゐた。先生の帖にも記入してないし、自分もうろんになって居た次第である。市内、大橋とか高橋とか云ふ書画屋が、春草の小品、柳に鶯と燕、双幅、箱書に来る。真筆。先頃、根岸の使で箱書に来た(二五巾、隠士、井上の屏風と交換せし)斎藤嘉助と一緒にだつた男が夕方来て、原田金蔵の尺八に就いて、話しをしてゐた。これも其の男の話。三越「静清」、時価五千円位との事。千七百円が五千円になつてゐる。「○」長谷に渡す翁……菊に水やる……尺八は、ほゞ出来上つてゐる。新紀州新聞社、橋本義雄へ画帖出す。「○」川口誠三郎画帖発送。

廿九日 晴 風あり

渡辺実氏、来訪。

斎藤隆三 浮世絵 一冊。

矢口政三郎 わかさぎ

茨城県新治郡田余村高崎

佐々政徳 のしいか

東京京橋区新柴町三丁目四番地

文部省、帝展画集 二冊

上野精養軒 ビール 切手

松山の瀬川喜七、五百円の小切手を書留でよこして、尺八を描いて呉れと云ふ。何処までもづう／＼しい男だ。書留が届いたかと電報が来る。五藤竹重郎より返電付来る。来春まで待つて貰ふ様返電す。北海道太田様から、鮭が二本着。や山本とか云御弟子来。竹内常吉来。紙本の小品一枚と金地扇面一枚、七拾円の包預る。宮本、紙の尺五、四枚が尺八、二枚になり、亦一枚になる。図は何んでもよし。瀬川喜七、書留にて五百円小切手返送。夜八時過、東京会田中良助来。

卅日 曇り

大谷喜嘉平、日渡様。午後〔〇〕赤尾藤吉郎、尺八、観音持参。天王寺、〔〇〕三原屋、尺八横切〔三保〕持参。長井家、寺内、安立寺、歳暮に立寄る。長谷栄吉、尺八〔〇〕「白菊翁」渡す。川嶋鉄之助来。南米岳息、箱書に來。「孤月筆」〔不〕書ず。児玉天来氏来。関本為吉氏より蜜柑一箱着。前田兼実氏より鮎のかす漬着。中嶋某来甘栗  
東京日本橋区浜町二ノ一三、中嶋元芳  
より甘栗着。千登世の扇面を世話した男、飾屋の由。中村岳陵来。

卅一日 晴

画室の西の開き、掃除す。尾張一の宮、中央美術倶楽部の封書（書留）を茶の間で拝見発見。一百円の小切手在中にて、来春二月初旬の展観に入用なれば、一月中に御揮毫願ひ度いと云ふ。文面、早速に書留配達証明にて返送す。瀬川喜七より電あり。御諾否を返乞ふと云ふ。中根、平塚の分、四百〇五拾八錢支払ふ。野毛倉橋氏、竹林彈琴、野村サムラヒ商会「雲来」表装出来、寺内より届く。早速野村商会へ持参（表装代四拾一元）。倉林氏宅へ持参、五拾五円、表装代預る。乙部喜兵衛氏より菜漬樽着。下山儀三郎来。

九年一月

九年一月

一日 晴

七八軒廻礼。山本氏（児玉氏紹介の）年始に來。

二日 晴

深川鈴木某、鑑定に來。尺八席画らしき墨画の竹、宜しければ表装をなほし、改めて箱書に來る由。島田悦山来。

東京四谷須賀町廿六桂方 飯寫南風

大正五年二月十六日、横浜に來り先生に面会なし、尺八絹本一葉三月末までの約束にて依頼し、其後何等の返事なし。來る二月末迄に、半切一枚、五拾円にて揮毫して貰いたいと書いてある。新聞記者に対する好意上、描いてよからうと云ふ乱棒（暴言）な言ひ草である。



三日 概ね晴

東京の松田、島田友春、年始に来る。島田氏、藤原為恭だかの下図を持参。

四日 晴

瀬川喜七より鯛塩漬来。夜十時過ぎ、下の下村の近所に火事あり。一〇軒にてすむ。あき家なり。甚だ寒むし。一同にて、此度の庭に出てカメラの前に立つ。琅玕洞主人年始に来る。

五日 晴

客来ほとんどなし。

六日 曇天

五藤竹重郎より来信。十一日すでに入用の由。寒むき日なり。

七日 曇り

昨日から寒の入りの為めか寒し。天王寺三原屋より礼に来る。関谷弥兵衛、中村岳麓、飯下山儀三郎、年始に来。中央美術協会、此の十五日頃までに入用の由。元美術学校卒業生にて白濱とか云ふ人、乾南陽氏と同期ならん。華山の描いた三組入を持参。先生、先頃中より、しきりにほしがりし品故、早速、現金五百円を渡し、後は何にか一寸したものを描く約束にて引取る。この□□は、此の人の祖父に当る人が金座に居た時、華山に描したのでさうだ。それを三代目の此の男が生活に困って手放すのである。千円位、ほしそうな口ぶりであったとか。野村サムライ商会より、先頃立て換へし表装代、

金四拾一円持参。

八日

羽後酒田港中ノ口町、高山長之助と云ふ未知の人から書留で封書が来た。開いて見ると文面に

申込書

一金 五拾円也 紙本半切

右之通り、御送金申候也

拝呈、誠にお手数恐入り候。厚く御礼申上候。さて画題は先生の御得意作をたつた御一筆書きに宜しき候。此儀、特に御願ひ申候也。

菊地契月先生様（元文のま、）

とある。そして、両羽銀行の小切手で五拾円入れてある。随分□□たものだ。早速書留で返してやる。

九日 晴

荒井寛方氏来。和歌山橋本義雄氏より蜜柑二箱着。平家納経着。大和絵同好会、七月より十二月までの分、金二拾四円、振替にて出す。昨年の暮、差出人の不明だった酒樽は、肥前の高比良氏と判明した。大阪市築港八幡屋町一七番地、高比良雄之充山梨県南都留郡勝山村、大石静雄より小包にて雪（清路粉）の雫来る。

十日 快晴

市川の田中喜兵衛氏より醤油一樽着。谷上隆介氏来。大観、洛中洛外雨十題カタログ持参。高比良氏へ酒の礼状。二葉会、五藤竹重郎、田中喜兵衛、三越、発信。

市内北方、羽生龍太郎と云ふ男の父が、華山の絵を持って居るから、若し御望みなら御目に掛け度いと手紙で云つて来る。奥さんの御話によると、昨日、石原さんが来て、正金二百円の包みを出して、村松雨石が半切二枚御願ひしたいから御預り置き下さい云つて、二百円置いて行つた様だ。

村田直吉、

大野禎一、

々 徳治、

大胡喜作、

三田四郎

堀口 哲、

伊藤脩徳、

田代戸太郎

亀田行蔵、

高橋保之、

西郷健雄

吉田栄治、

岡野哲兼

津田蒔太郎（移転）

以上は、回礼書いたり、先方から来たりした分。此の土地で、毎年十四五軒、歩けばすむ。金閣寺より小さな箱入りの納豆が来た。年賀状をすっかり忘れて居た。

新潟市上大川前通十一、小川巳三郎

より箱書の小包着。山形巳兵次郎氏来。

十一日 晴 日曜日

特殊小学校、梅原氏来。島田友春来。村松雨石氏親子来。下村平之進夫人来。小港、市川の老婆来。下の井上とか云ふ人が、青木堅太郎の代理に来て、先

頃の席絵の廣業と双幅の [ ] の図の箱書をして貰いたいと云つて、置いて行く。高屋肖哲氏来。

府下千住町四ノ六五、高屋肖哲

静岡市外川辺 村松雨石

十二日 曇天

酒田、高山長之助、書留にて五拾円小切手を送つて来。先日のは [ ] が間違したと云つて改めて依頼して来る。早速返送する。

受信、片山久、福沢市太郎、いづれも催足。

十二日 曇後雨

北方、羽生龍太郎、華山筆だと云ふ虎持参。江川太郎左衛門 [ ] 筆をして居た人、一万円位でなければ売らぬと云ふ。めつたな人には見せないで置くと云ふ。気毒なものだ。水戸渡辺実氏、外二名来。小座敷の病間へ通つて新しい依頼画をして居た。夜、吹き降り。

十三日 晴なれど風強し

朝、電話にて洋傘を深川の玉泉院まで届ける様、寺内へ話す。午前八時、雅邦先生の墓参に御出掛けになる。「正午」十二時、帰宅。風強、南の雨戸閉める。京橋材木町伊藤洋服店よりマント（千代子の君の）、書留にて来る。八時少し過ぎ、二つ半鐘なる。谷中の寺内へ電話にて荷車を頼む。十五日、小屏風（諸井様の分も）を乗せて引き出す由。風なか／＼に止まず。

十四日 晴 風あり

昨夜の火事は八戸坂とかで、十五戸焼けた由。章君、東京林家から通学すべく行く。溝口禎次郎氏来。

十五日 晴

絹十五六枚張る。高築誠之助来。夜十時過ぎまで、画室に話しこむ。下山儀三郎来。水戸の渡辺氏も高築氏も福岡で展覧をする由。

十六日 晴

華山の盃の台へ松をかゝる。不相変の風□□人夫二人付。四時頃、寺内より荷車着。諸井様の六曲、黒須様の二曲、東坡先生屏風なり。南條氏の六曲、鉄道にて着。

十七日 晴

早朝、荷車出る。風呂桶、屋具、本箱、机、行李等載せる。京都十合呉服店の美術部の人だと云ふ二人連来り、三月の展覧に尺八か二尺巾を一枚、御願ひいたしたいと云ふ。千五百円預る。釋義堂氏来。三重県の何山某、三銭切手百枚封入、それで絵かほ<sup>(送)</sup>しいと云ふ。そのま、配達証明にて返送す。小川已三郎、新井徳次郎、箱書發送。元園町一ノ一三、下山儀三郎へ電報うち、絵の出来た通知。

十八日分<sup>(欄外)</sup>

野毛、倉林氏、夜九時頃来訪。画室にて十一時近くまで話し込む。

十八日 晴

好天気なれば客来多からんと思ひしに、ほとんど無し。

十九日

根岸鉄太郎へ電話を通ず。下山儀三郎より電話にて画題を聞合す。目録にするための由。明日とりに来る由。昨夕うった電報が、未だ届かぬ由。

廿日<sup>(欄外)</sup>

麹町区元園町一ノ一九

電話 九段 八四一番 下山啓二郎来。尺八「○」「哲祖」渡す。

廿日 晴

竹内常吉氏来。川口誠三郎より何豆とか云ふ菓子着。根岸鉄太郎使に尺八「○」「春」||高士あり背に桜らしきもの描く、春と題す、を渡す。

廿一日 曇天

乾南陽外某一名同伴にて来訪。「栄之」の幅持参。市岡傳太郎来。昨十二月下旬、鶴殿氏、箱入朝鮮湯瓶箱を持参せし時、横物で□眠「トウミン」筆、盤□<sup>(盤)</sup>「バンケイ」<sup>(盤)</sup>禅師||猪の首を盆に乗せ前に置く。それから□□「タツツナ」筆、<sup>(盤)</sup>手観音図、尺五位の中の二幅を持参しはせぬやと云ふ。鶴殿、目下行衛不明で□□中だと云ふ。瓶は一時預り置き下さいと云ふ。今泉雄作氏の<sup>(盤)</sup>照招介の名刺を持参して、赤穂義士の図を描いて貰ひ度いと、物づきな人が来る旨□□書を見ると、堀部安兵衛、高田馬場仇討たの、大石良雄妻

子の決別の図だのと書いてある。

廿二日 曇天

京都滞在中の田中良助氏より千枚漬一樽着。郡山川口誠三郎来。〔○〕尺五、  
叭々鳥、山水（支那）、哲祖の三枚渡す。澤達三郎使来。画帖、鑑定（馬ノ図）、  
孤月筆、山水。箱書を謝断絶す。代りにレターペーパーに、本日御持参の孤  
月筆、山水は真筆と拝見仕り候と書いて渡す。小玉天来氏来。

廿三日 晴

竹内常吉来。福澤氏〔○〕尺八、幽<sup>か</sup>□□□□渡す。大阪、吉村元次郎、鑑  
定に来る。横物、田舎の村ばれ、栖鳳の畑、出□出鱈目の印あり。

廿四日 土曜日 晴後雨

来客なし。

廿五日 晴

特殊小学校、小原氏来。〔○〕尺五、三保、一枚渡す。画帖は預り置く。小川  
巳三郎より無礼なる手紙来る。「箱書の蓋を預けてあるが、若し見当らぬ時  
は小品物一枚揮毫せよ」と云ふ。乱棒<sup>棒</sup>な奴だ。

廿六日 晴

関谷弥兵衛来り、来月の五日の婚礼までに二曲一双を間に合せて載<sup>載</sup>きたいと  
云ふ。試作展〔○〕出品画、寺内宛送る。二五巾□□。林の幸蔵様来。

廿七日 未晴

塩川表具屋より雪竹に小鳥の幅、鑑定に持参。安川大成堂に十幾枚描きし一  
枚と云ふ。五浦へ入る前年の由。巢鴨太田様来。島田友春氏、溝口氏の光起、  
幅持参。川口誠三郎より千柿一箱着。

廿八日 晴

夜になって高築来。画室へ通る。澤達の使、先日の画帖へ落款を貰ひに来る。  
今一つの箱書は老子。たしか高橋幾造へ描いたもの。黒須様来。

廿九日 雨 甚だ寒し

柿沼、越條等、三人来。吹き降り。東京は雪の由。林代蔵より小鳥着。今日、  
試作展覧会の鑑別の当日で、午前十時までに美術院へ出掛なければならぬ  
のだが、御やめになった。前田侯爵の例の絵巻第□を先頃から初められて居  
るが、健<sup>マ</sup>築が面□倒<sup>倒</sup>なので、なかなかはかどらぬ様子。階段には、平<sup>マ</sup>困だと云っ  
ておられる。

卅日 晴

銀行にて二百円小切手を作り、五百円、本所の銀行の小切手と合せ、七百円、  
書留にて溝口禎次郎氏宛出す。先日、島田友春氏が持参せし光起の幅の代な  
らん。五藤竹重郎より電報あり。返信付き。飯塚某、荒井寛方氏の紹介にて  
来り、尺八、一枚依頼なし、千五百円置いて行く。長谷栄吉、大塚源太郎来。

卅一日 晴

梶本八重二氏、画帖、柿図渡す。美術院より画題の事にて電話あり。寺内へ電話をかく。太田吉松、来月五六日頃、来る由。五藤竹重郎、二三日中には送ると返電す。

(番外)  
二月

二月一日 曇後雨

平塚、中根へ二百円近く支払ふ。但し、五十九円の砂利代と工々手間、三十四円、合計九十三円、平塚分、先月十八日以後は支払はず。八十一円四十銭は、中根へ支払ひし分。柿沼氏と同伴せし坪井氏一人にて来訪。三月  
□□ 節句の幅をとて、百円にて半切、尺八等、三枚置いて帰りし由。松山、清水より電報にて箱書送れと「申し」来る。午後、まったく曇り五時頃より雨降り出す。

二日 雨

井上徳三来。尺八「を」一枚依頼して行く。

三日 曇天

有朋堂書店へ一日三拾一円二拾銭、振替にて支払ふ。但し、有朋堂文庫代。中川忠順氏宛「○」絵巻一部分送る。大村有慶発送の出雲大社の御守、並びに大黒天返送。名古屋朝日新聞社美術部へ書附返送。

四日 晴

太田吉松、半切「○」三枚渡す。ボケ、錦木、布袋、四枚のところ、此の三

枚にてすます。

山形県酒田上中町二番地、中村太助

小包にて、水飴、箱(但し依頼の幅、出来の上、箱書なし送るべき)着。銀座東京美術館より、尺八、南泉斬猫、鑑定に来る。鈴木直三郎、半切、山水(観山会の記念分配分)を持参。鑑定。岐阜五藤竹重郎「○」尺五、「引舟に虹の図」発送。

五日 雨

石川鶴治氏、画帖二、谷中寺内へ持参。京都柘屋より干魚着。

六日 曇天

小川町加藤某(長岡の井口氏を知つてゐる人)、布袋之図、鑑定に持参。偽筆。桐生塚本武一郎来。成田山の御札、例年の如く持参。飯寫勝太郎南風来。関谷へ電話にて二枚曲、出来の由旨通す。

神田 六百八十番 関谷弥兵衛

七日 曇天 甚だ寒し

関谷弥兵衛来。「○」二曲松竹梅渡す。自動車にて持ち帰る。奈良美術院より春日燈籠、二個着。永山近影氏、前田利為侯代理に絵巻の挨拶に来る。飯嶋南風来。半切、「○」維摩、一枚渡す。

八日 曇り後雪

正午近くより雪降る。午後、長野草風氏来。



九日 雪晴れ

坂間順之助来（色紙二枚の件）。八王子より山吹植来る。濱中氏来。

十日 晴

中西嘉助氏、尺八「〇」、清涼渡す「側面の高士、竹林」。八王子佐藤兌氏よりツ、子植八個来。大久保、次男君来。琅玕洞、林氏来。何にか依頼す。

伊豆伊東町玖須美竹町、大久保利喜

十一日 晴 風あり

八王子市佐藤兌氏他一人同伴来。但、例のおいそ君の案内。乾南陽氏来。応挙、狗「ケン」、持参。三百五十円にて買ひ取る。尺八双幅、嵯峨野（定家）渡す。岡野哲策氏、石原氏と来。有朋堂文庫、本箱着。硝子戸一枚破損す。高寫屋の高橋初郎氏来。小品画の催足。大阪の朝鮮鉾産株式会社内、無声会より書留の封書にて、為替券三拾円来り、杉本丘花と云ふ青年画家が前途の望みを囑され、管ら画の研究に没頭したいから、画を一枚寄贈して呉れと云ふ由。丘花後援画会趣旨と印刷物が入ってゐる。そして、景品画御寄贈諸大家先生（イロハ順）として、ずらつと例挙してある。今一つ、愛知県西尾外町、三浦香峰と云ふ男、広告を裏返した手製の封筒にて、一円五十銭の為替と、三十に四六寸位の小さな画□紙を一枚入れて、これに描いて呉れる様にとある。松山市湊町四丁目、清水義影よりの返事。竹林高士之図、画帖小裂（横九寸、縦八寸）。

十二日 晴

無声会、三浦香峰、書留にて返送。横須賀山王五〇原巖氏より鴛鴦（香い）つかひ来る。

十三日 晴れたれと風あり、さむし

京都西村庄助なる者より漬物着。夜、高築来。試作展出品画、売買の件にて来る由。

十四日 晴

齋藤隆三氏来。老子出関ノ大幅、外一幅御貸しする。沼田一雅氏より電話にて、明日、大阪工高の土肥助三郎氏同伴にて来訪の由。

十五日 雪

雪がみそれになり雨になり終日晴れず。谷上隆介氏来。川寫鉄之助、稲垣利恭来。三月下旬の展覧に、是非、尺八を二枚揮毫願ひ度い。先生も奥様も留守の様取計ふ。内金として、二千元並びに絵絹二枚（尺八）、先生、帰宅次第、返答によっては、或ひは、返却するかも知れず、た、仮受取のみ差上げて置く由事にて、二千元と絵絹預る。十八日の頃、御伺ひして、其の節、御返事を聞き度いと。日本美術主筆、石原翠葉、武山氏紹介状持参。千五百円にて、尺八一枚、色紙一枚の約束にて、銀行小切手、千五百円置と画帖（僕の画帖と書きしもの）を置く。廿一日頃来る由。沼田一雅氏、土井助三郎氏来。午後三時頃より十時過ぎまで、画室にて話し込む。

十六日 晴

京橋三八〇二番、帝国美術株式会社へ電話を通ず。昨日、川嶋氏より預りし

二千円返却の件にて。

十七日 晴

川口誠三郎より鴨一羽着。黒須様来。早稲田校友会依頼、寿星(二五巾)渡す。此の廿日の校友会に大隈侯に贈る由。

十八日 曇天

渡辺実氏来。明治神宮の件にて荻野伸三郎氏来。京都廣瀬氏、百円の受取出す。これは、昨日菓子盆(桐細工)と来たもの。

十七日分追補。

京都四条通富小路西、三崎清二郎代人来。自身は心臟病のため、自動車にて下に待ち合せ、代人を登す。武山氏の紹介状持参。依頼拒絶。

十九日 曇天

齋藤隆三氏、中村岳陵氏来訪。此間の幅返す。今日あたり、川寫鉄之助か稲垣か、何れか来るかと待つ。終日来らず。牛込鈴木直三郎、墨画、尺五、風竹(多分松岡文橋に描きしもの)鑑定に来る。ひどい偽物。大塚源太郎等、四度鑑定に持参して、一寸問題になりしものと同一の図。但し偽物にしても此か方拙劣なり。片倉の件にて、山口某の手紙持参。小林寿一の一件。

廿日 曇り

帝国美術株式会社稲垣の私宅(柳町二番地〇)まで行って、此間預った

二千円を返し、受取をとって来る。諸井様、黒須様来訪。八時頃御帰り。今日、不在中、市岡傳太の使来。預品水さしを渡せし由。丹青の三部均来。

廿一日 曇

三部とか云ふ丹青の主幹、早朝来。三週年記念展観にて依頼なし来る。拒絶する。夜、先生と下の下村へ行く。小林源太郎氏之分と云ふ尺五双幅、出来る。

廿二日 日曜日

寺内新太郎氏、井上徳三氏来。京都廣瀬氏より和鏡拓本沢山来る。内務省井上清氏より先日御貸しせし洋傘返送し来る。早速、寺内へ返す。南米岳来。何にか依頼して帰る。

廿三日 曇り 雪模様

八王子在、久保田氏より山吹苗三ヶ着。

廿四日 曇り

小林源太郎、尺五双幅「鯉」送る。降雪四寸、終日太陽を見ず。

廿五日 晴

八王子佐藤氏よりツ、チ苗二十本着。西川大六使来。

廿六日 晴

江寫碗屋の会の絵、尺五「岩上觀音」渡す。奈良美術院、春日燈籠代、八拾円、小切手を送る。大和絵同好会、第二期分会費、全部払込む。十合呉服店佐藤兌氏へ、はかき出す。

大阪南区日本橋筋一丁目交叉点角、奥田弥生氏より画帖着。高寫屋より小品画催足、来月初旬の由。

廿七日 曇り

先生、具合悪し。例の病、眠むられぬ由。内務省造営局より屏風下絵用紙着。十合美術部店員、尺八、維摩、一枚渡す。美術院より江原氏来り、尺八、絹本二枚入筒持参。四月初旬、同人展覧会の由。下の下村の材料費、金三拾円も預る。京都奥田弥生氏より漬物小樽着。大塚源太郎、小樽丹内重兵衛、同伴来訪。尺八、拾枚、一万五千元にて依頼す。内金として一万円持参。

廿八日 雪

来客なし。別に事故もなし。

廿九日 晴 日曜日

長谷の使、白菊図、箱書に持参。預る。高寫屋美術部宛、洋服立替金、百六十円四拾錢、小切にて送る。山浦□□と云ふ男、来りて曰く、昨年の十月に、先生に、尺二寸巾位の墨絵を（人物）を御願すべく、手紙で二百円、少ないけれども二枚の謝礼を差上げてあるが、あれは友人からは非なく依頼されての事であるから、御返事伺ひ度いと思つて上つたと。此の男の帰つた後、奥様に何ふと大変な違ひである。一百円で続絹一葉との事。彼

自身か、現金入りの手紙を先生に御目に掛けて戴き度いと置いて行つたま、の由。飯田町伊藤正之介より、春草筆「野ざらし」、鑑定に来る。偽筆なり。夜、高築誠之助来。京都速水御舟、富田溪仙へ紹介状（名刺）書く。春日燈籠の格子の硝子入れる。一枚、廿八錢也。

横浜美術館研究紀要 第16号

平成27年3月31日発行

編集◎横浜美術館学芸グループ

翻訳(pp.57-60)◎スタンレー・N・アンダソン

発行◎横浜美術館  
(公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団)

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1  
tel.045-221-0300

印刷・製本◎山陽印刷株式会社

©横浜美術館 2015

Bulletin of Yokohama Museum of Art No.16

Date of Issue : March 31, 2015

Edited by Curatorial Department, Yokohama Museum of Art

Translated by Stanley N. Anderson (pp.57-60)

Published by Yokohama Museum of Art (Yokohama Arts Foundation)

3-4-1, Miatomirai, Nishi-ku, Yokohama 220-0012 Japan  
tel.+81-(0)45-221-0300

Printed by Sanyo Printing Corporation

©Yokohama Museum of Art 2015